

Ⅲ 定点把握対象 五類感染症(週報・月報)発生状況

1 週報

(1) インフルエンザ／小児科定点

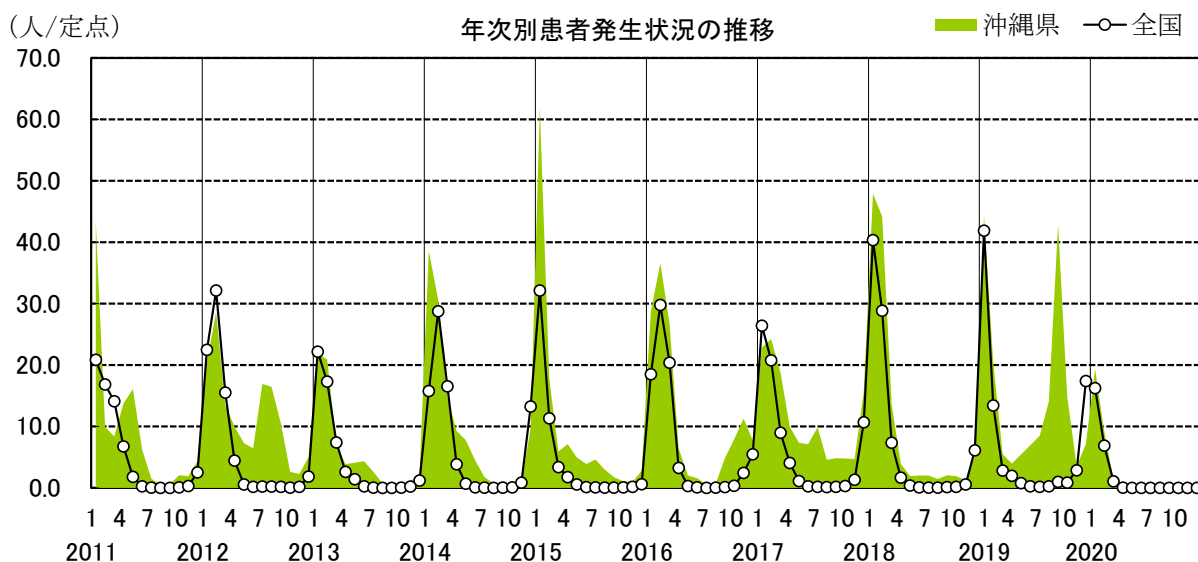
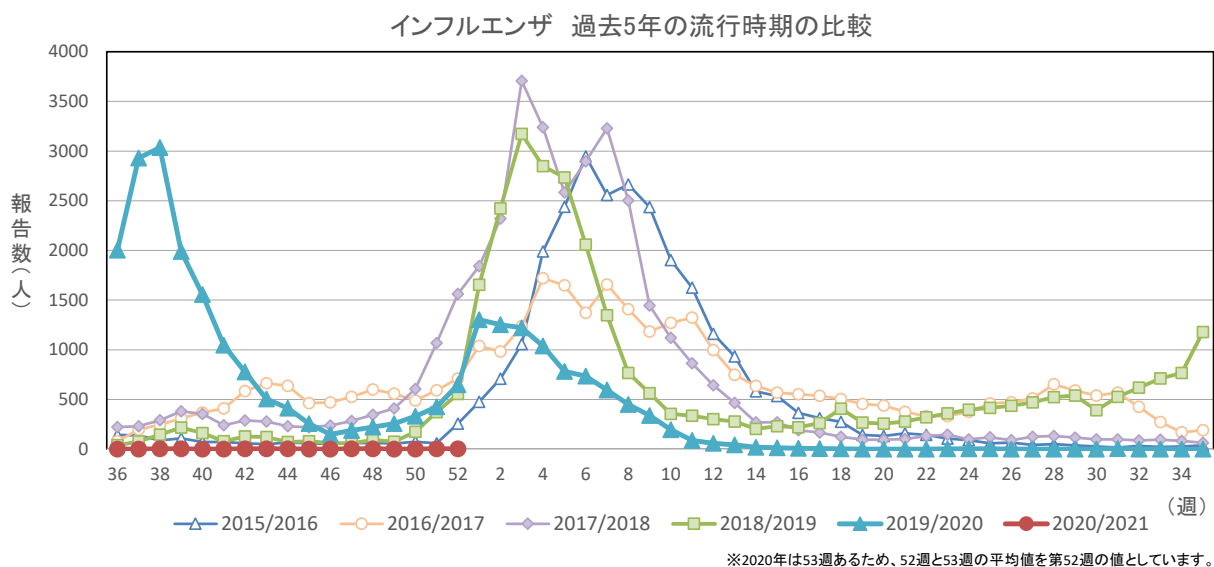
● インフルエンザ

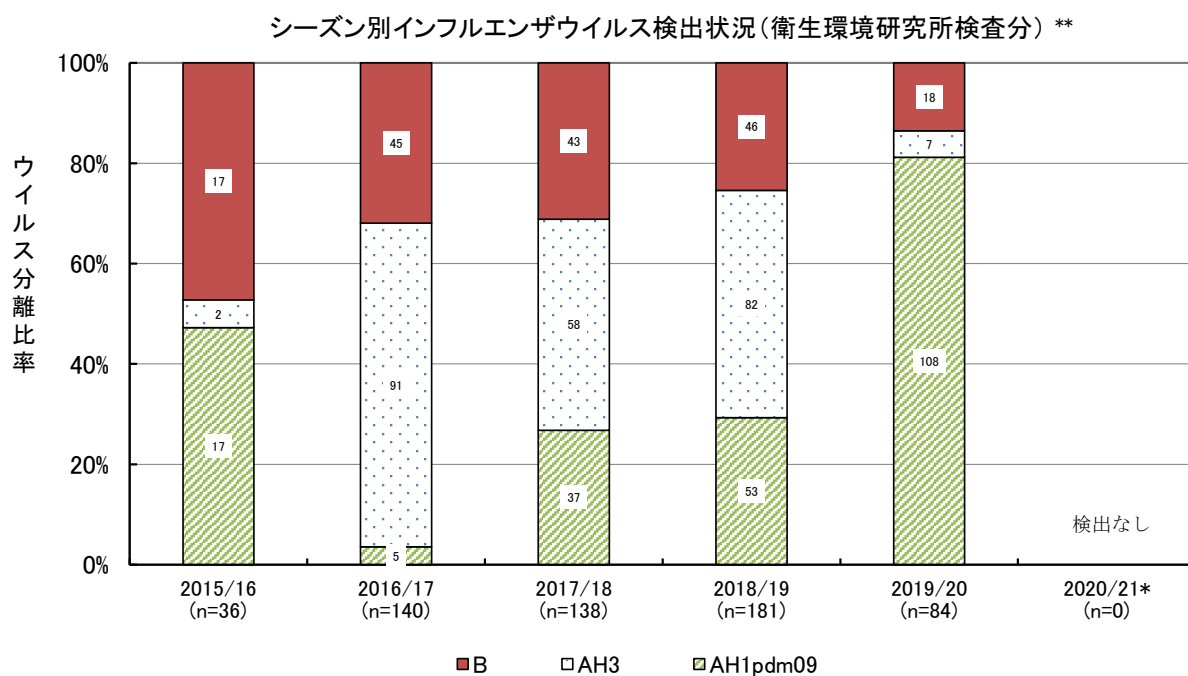
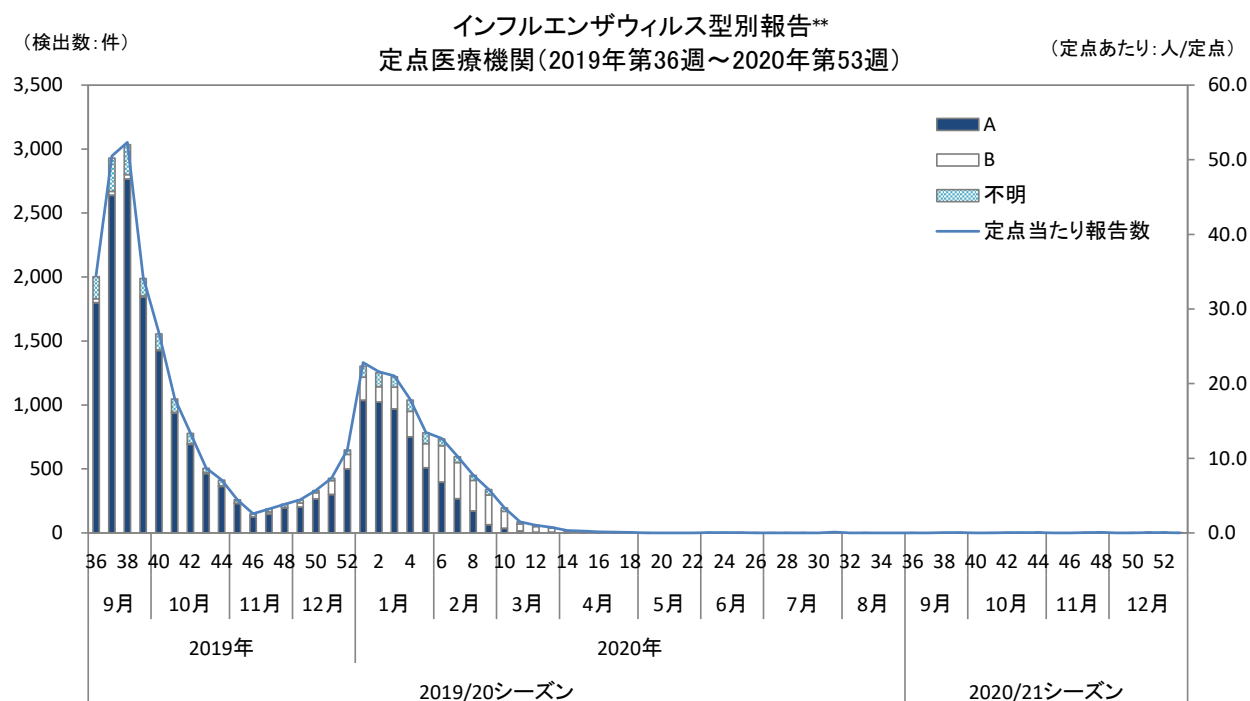
2020年、沖縄県内の報告数は8,197人、定点あたり報告数は141.74人であった。2019/20シーズンの報告数は24,902人、2020/21シーズンの報告数は2020年第53週までで28人だった。

沖縄県の2019/20シーズン（2019年第36週～2020年第35週）は、2019年第36週に定点あたり報告数が34.53人となり、2008/09シーズン以来となる夏季の警報発令に至った。その後、第38週の定点あたり報告数52.33人がピークとなり、第43週には終息基準値10を下回って、警報が解除された。また、2019年第52週には定点あたり報告数が11.17人となり注意報が発令され、2020年第8週に基準値を下回り、終息した。

2019/20シーズンに検出されたインフルエンザウイルスは、AH1pdm09が108例で最も多く、次いで、B型18例（うち山形系統18例、ビクトリア系統0例）、AH3亜型が7例であった。2020/21シーズンは2020年第52週までにインフルエンザウイルスの検出はなかった。

2020年の年齢階級別では、0歳から14歳までが、全体の51.8%を占めた。



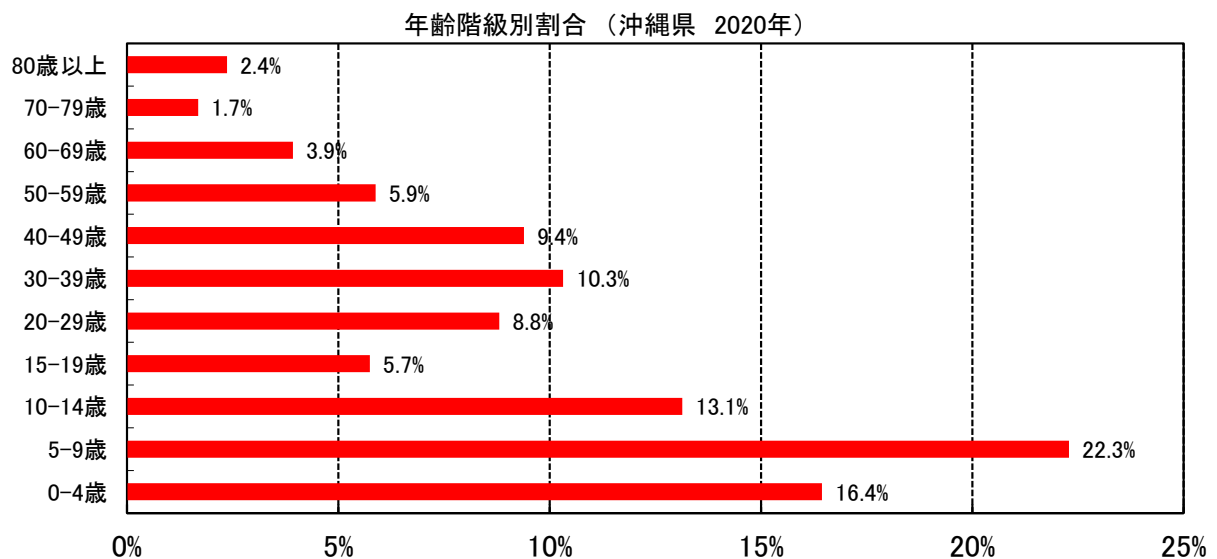
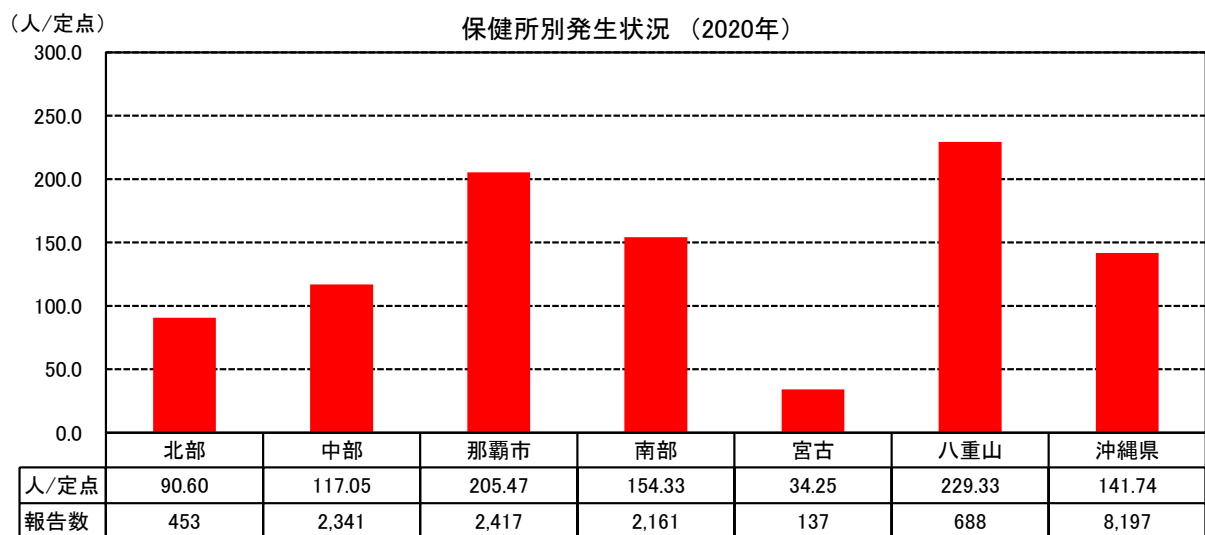
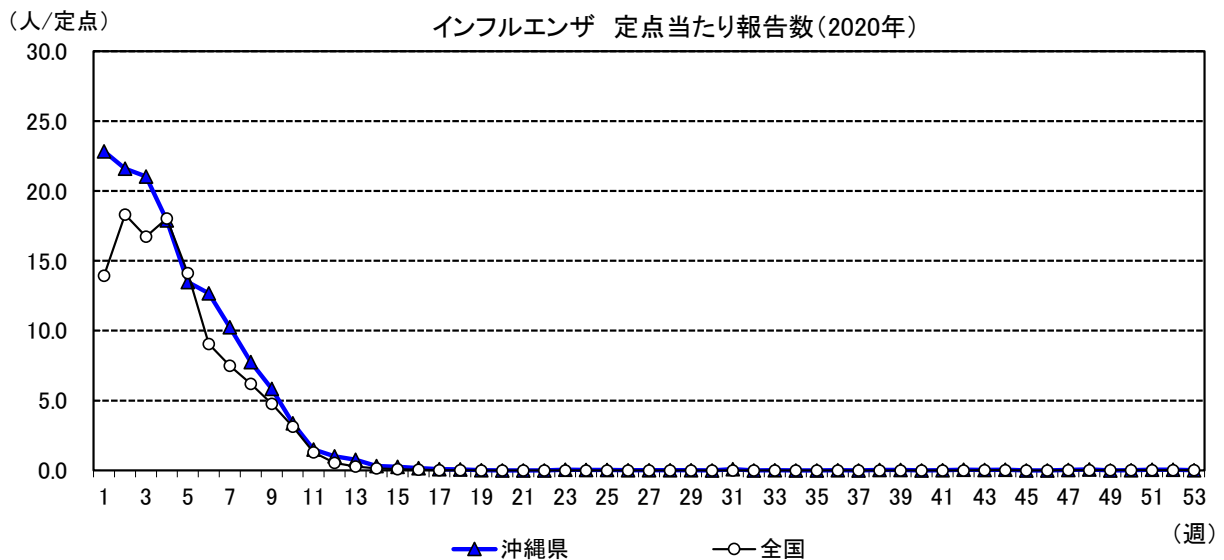


シーズン(9月～翌年8月)別の報告数合計: インフルエンザ

平均報告数 (2020/21)を除く	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21*
31,062	27,896	34,462	36,915	31,137	24,902	28

* : 2020年第36週～第53週の集計。

** : AとBの重複感染例を含む。

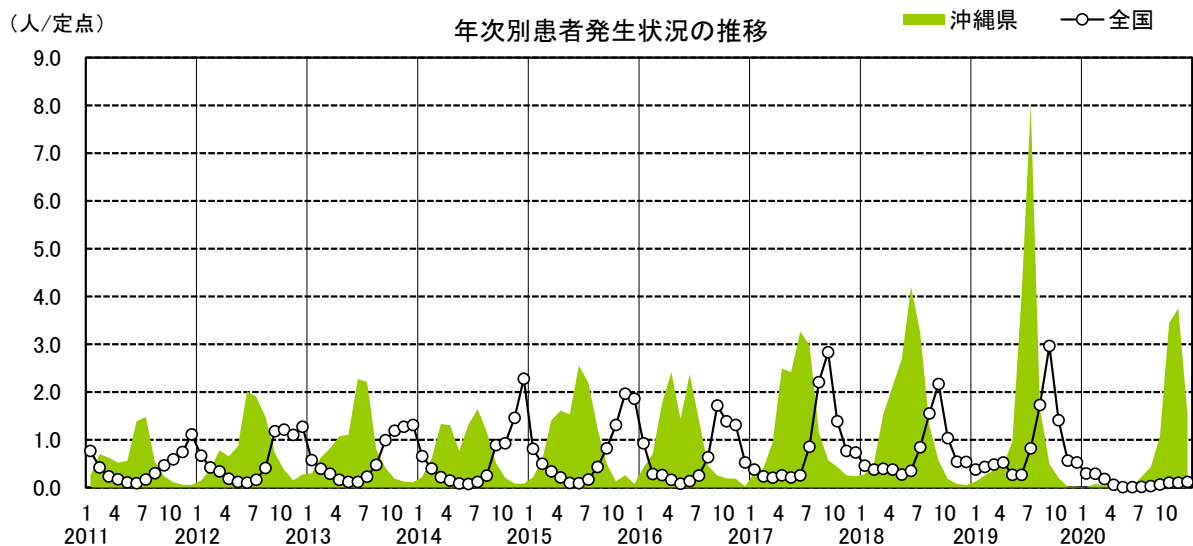
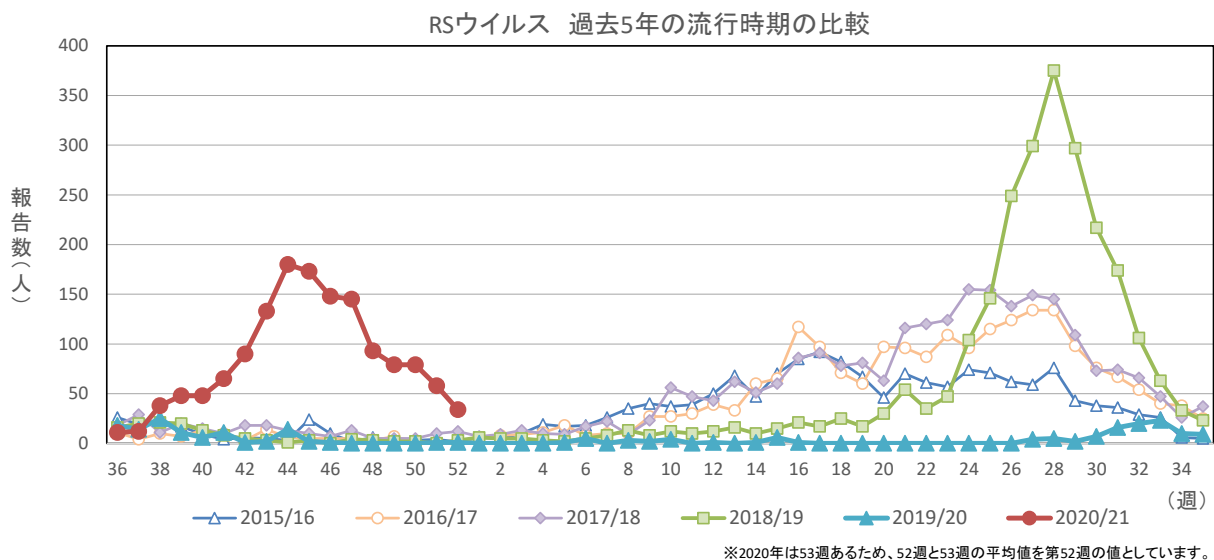


●RSウイルス感染症

RSウイルス感染症は、RSウイルスによる急性呼吸器感染症である。生後1歳までに半数以上が、2歳までにほぼ100%の乳幼児が感染するとされている。生涯にわたり何度も感染と発病を繰り返すが、特に乳児期早期（生後数週間～数カ月間）にRSウイルスに初感染した場合は重症化しやすいため、感染しないよう注意が必要である。

2020年、沖縄県内の報告数は1,588人、定点あたり報告数は46.71人であった。2019/20シーズンの報告数は227人、2020/21シーズンの報告数は2020年第53週までで1,468人だった。

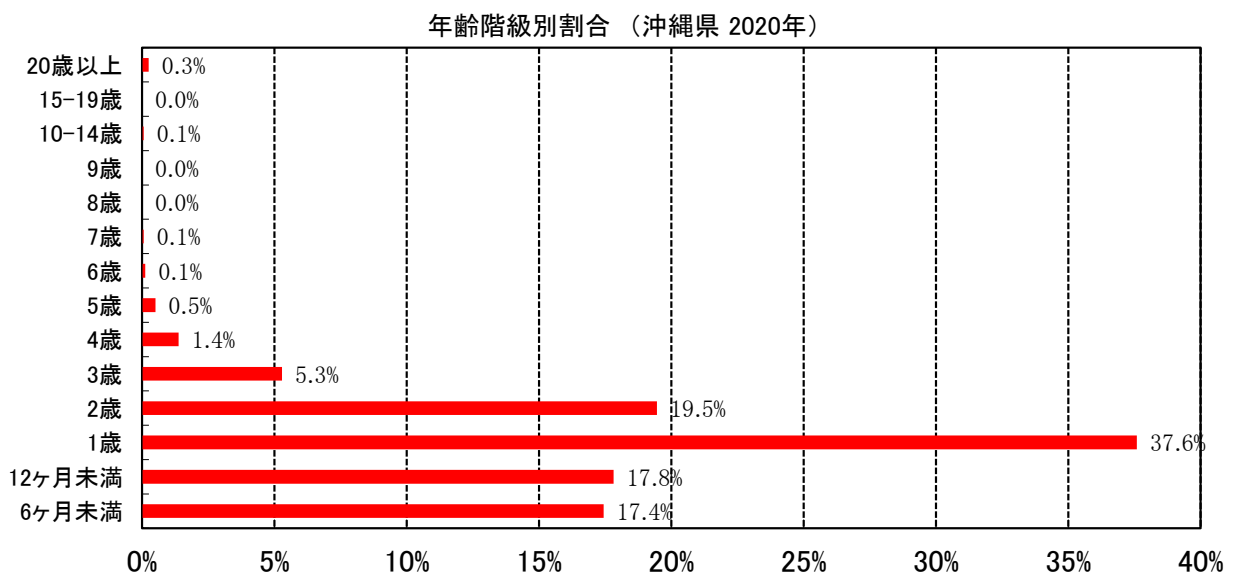
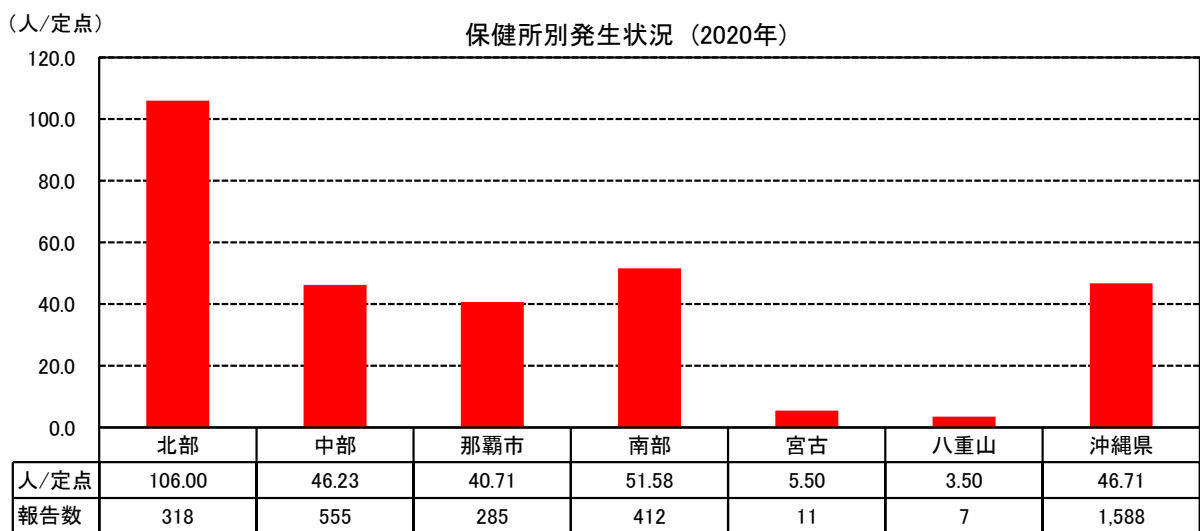
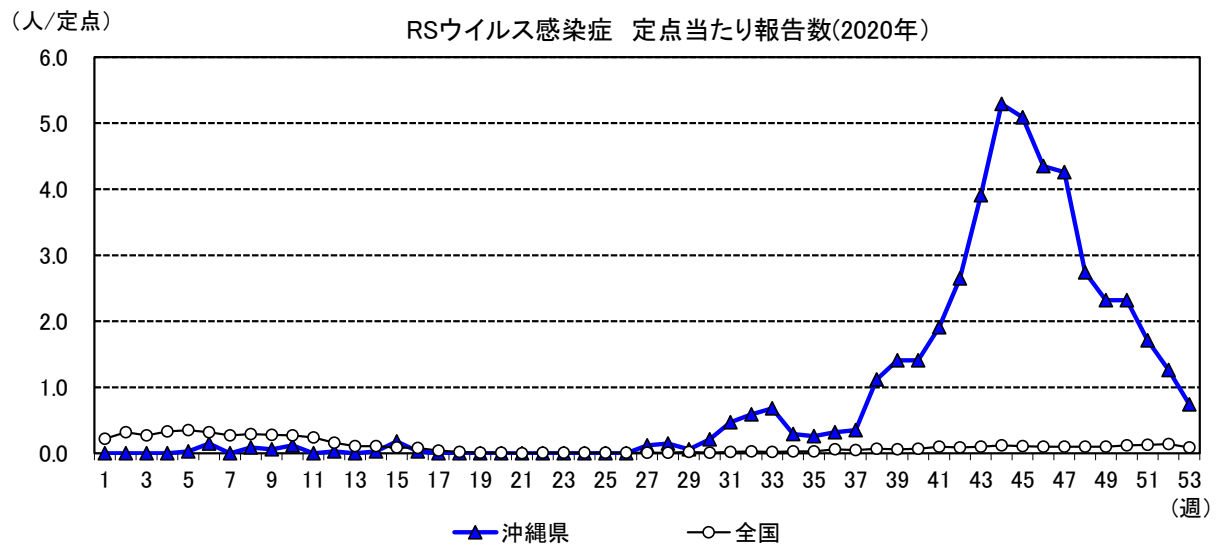
例年、沖縄県の流行は夏頃に見られるが、2020年は第44週の定点あたり報告数5.29人をピークとする秋頃の流行が見られた。特に、北部保健所管内では第50週の定点あたり報告数15.67をピークとする大きな流行があった。また、全国では目立った流行は見られなかった。



シーズン（9月～翌年8月）別の報告数合計：RSウイルス感染症

平均報告数 (2020/21を除く)	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21*
1,868	1,737	2,203	2,589	2,586	227	1,468

*：2020年第36週～第53週の集計。



咽頭結膜熱は、アデノウイルスによる発熱、咽頭炎、眼症状を主とする小児の急性ウイルス性感染症である。プールでの接触やタオルの共用により感染することもあるので、プール熱とも呼ばれている。

全国では大きな流行はなかったが、沖縄県では7月にピークが認められた。また、2020年、沖縄県、全国ともに、警報レベルの開始基準値3を上回る週はなかった。

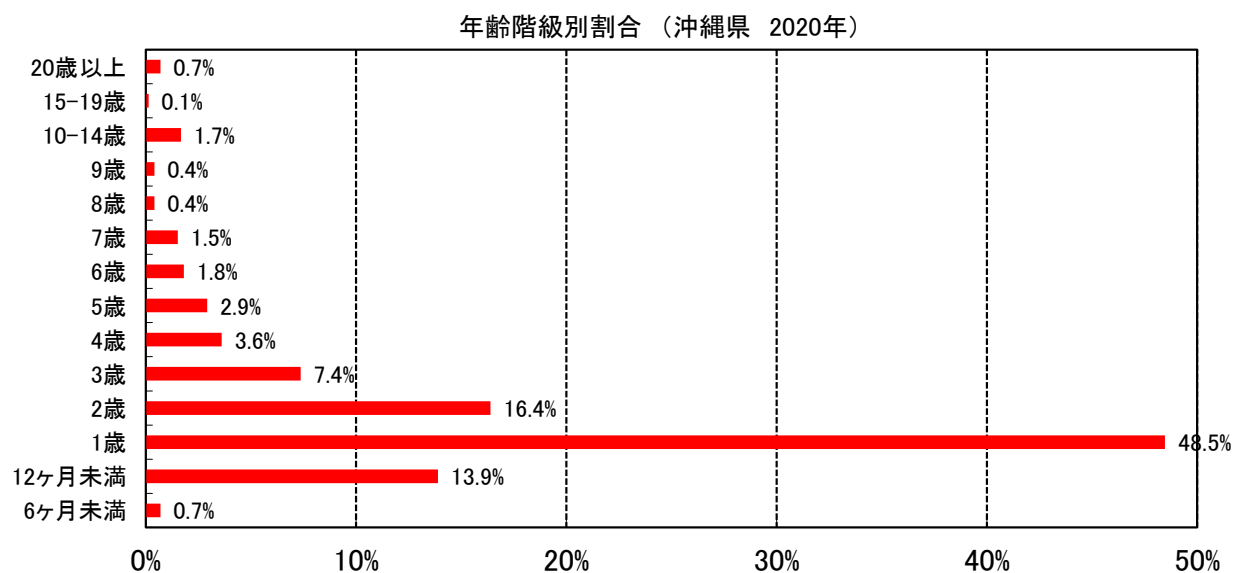
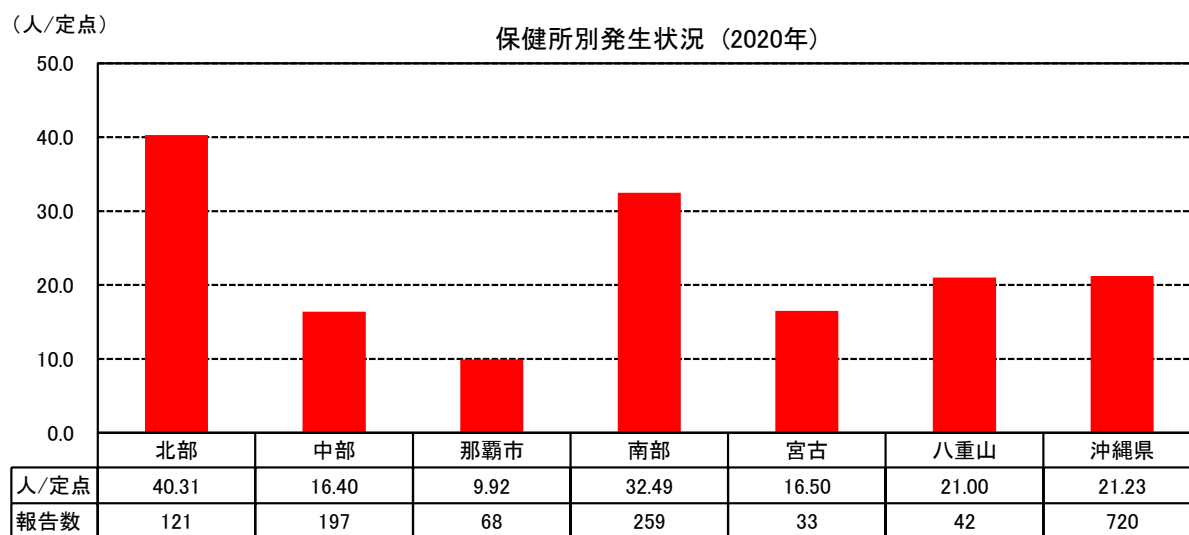
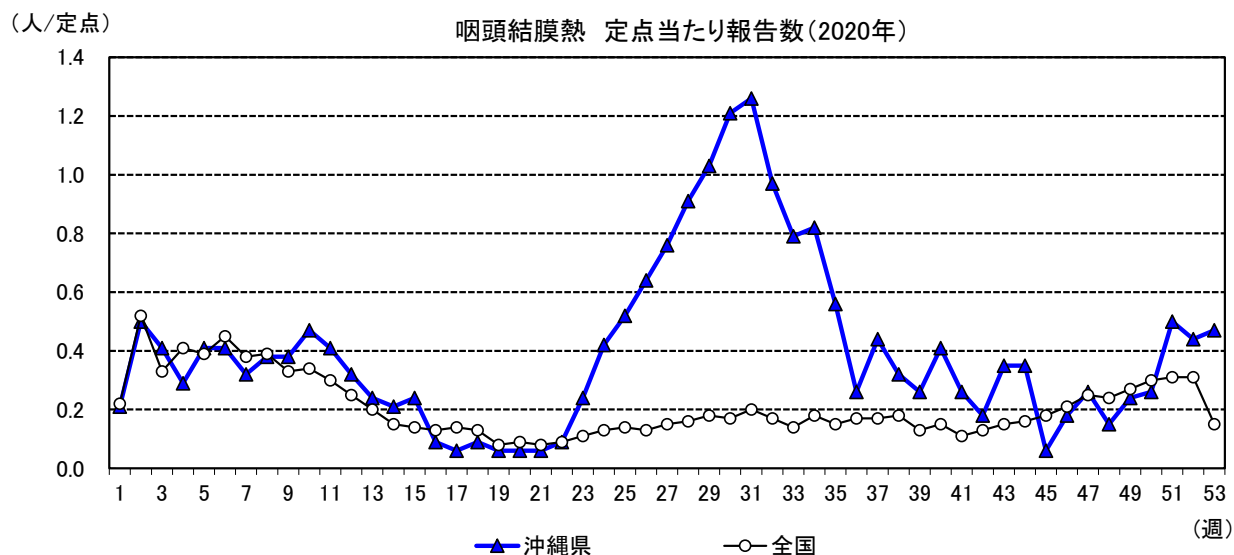
年齢階級別では、1歳が最も多く、全体の48.5%を占めていた。

報告数(人)

○ 2016年 ◇ 2017年 □ 2018年 ▲ 2019年 ● 2020年

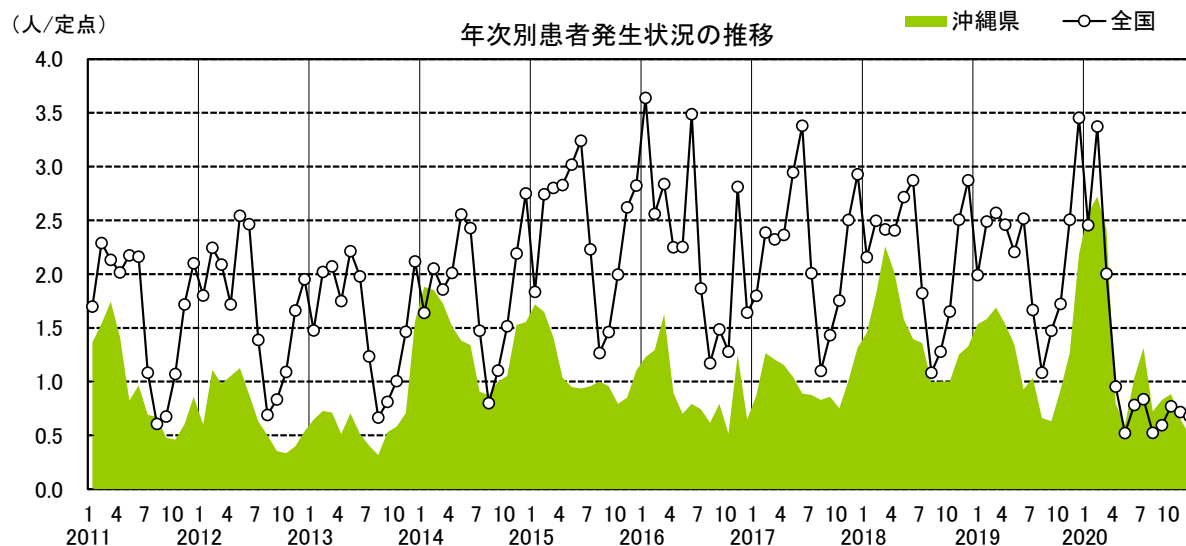
(週)

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
1,090	938	1,266	970	1,555	720

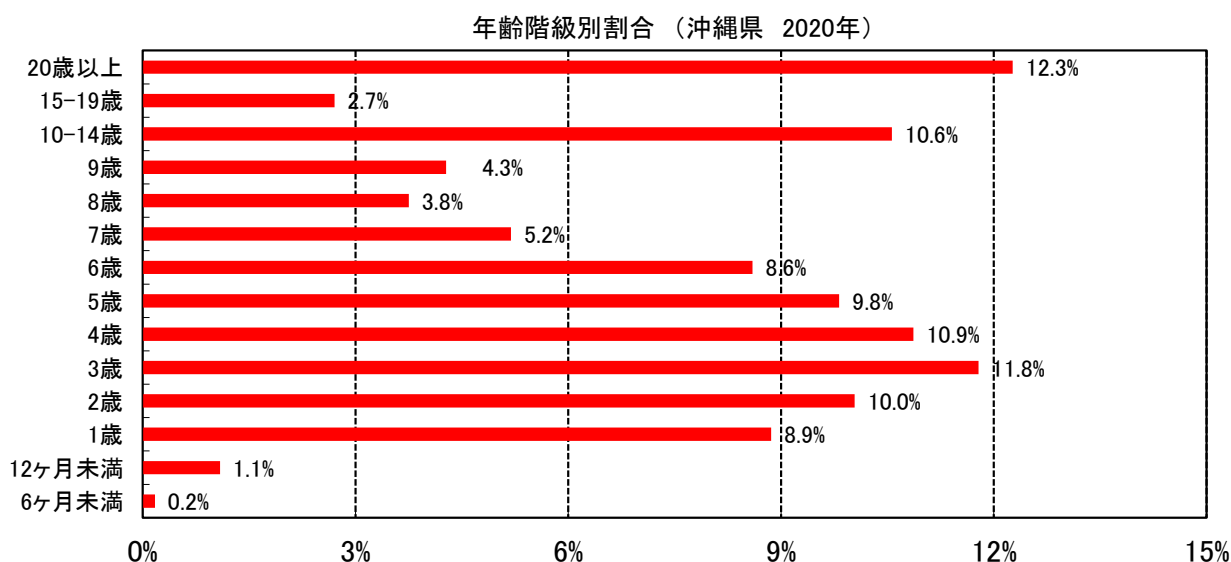
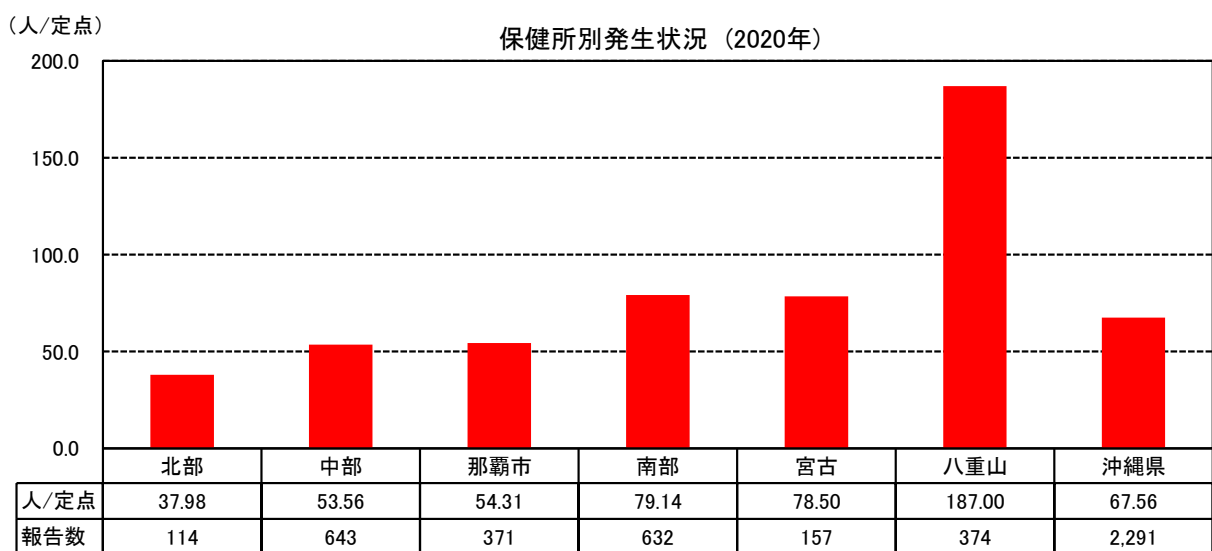
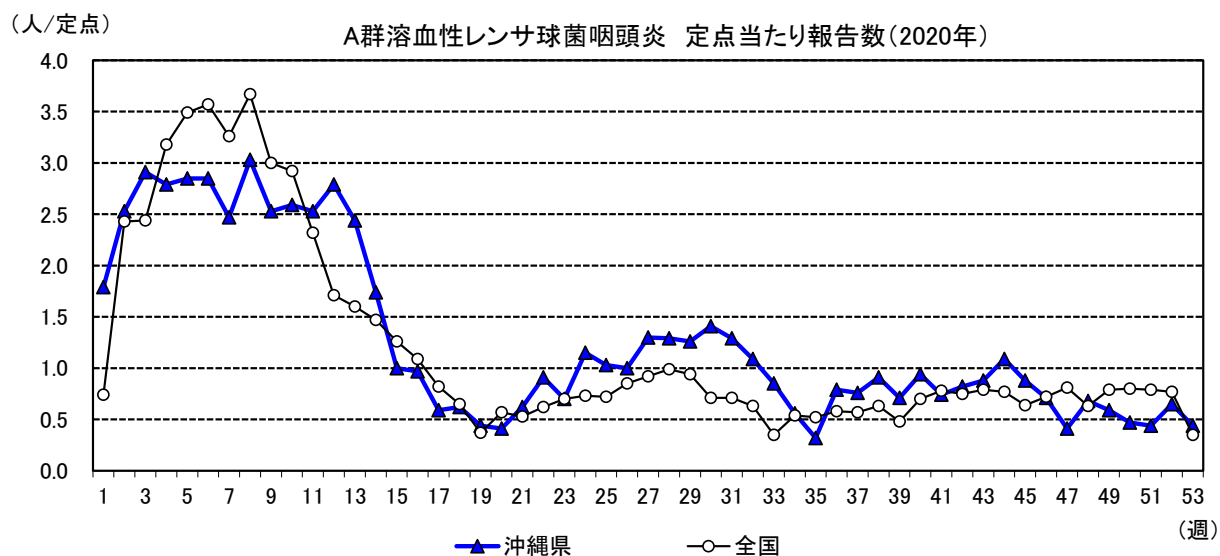


A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、いずれの年齢でも起こり得るが、学童期の小児に最も多く認められる。乳幼児では咽頭炎、年長児や成人では扁桃炎が現れ、発赤毒素に免疫のない人は猩紅熱を呈する。発疹を伴うこともあり、リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの二次疾患を起こすこともある。

保健所別では、八重山保健所管内の定点あたり報告数が187.00人で、他保健所管内より多く見られた。年齢階級別では、10歳未満が多く、全体の74.4%を占めていた。



平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
2,094	1,617	1,762	2,555	2,243	2,291



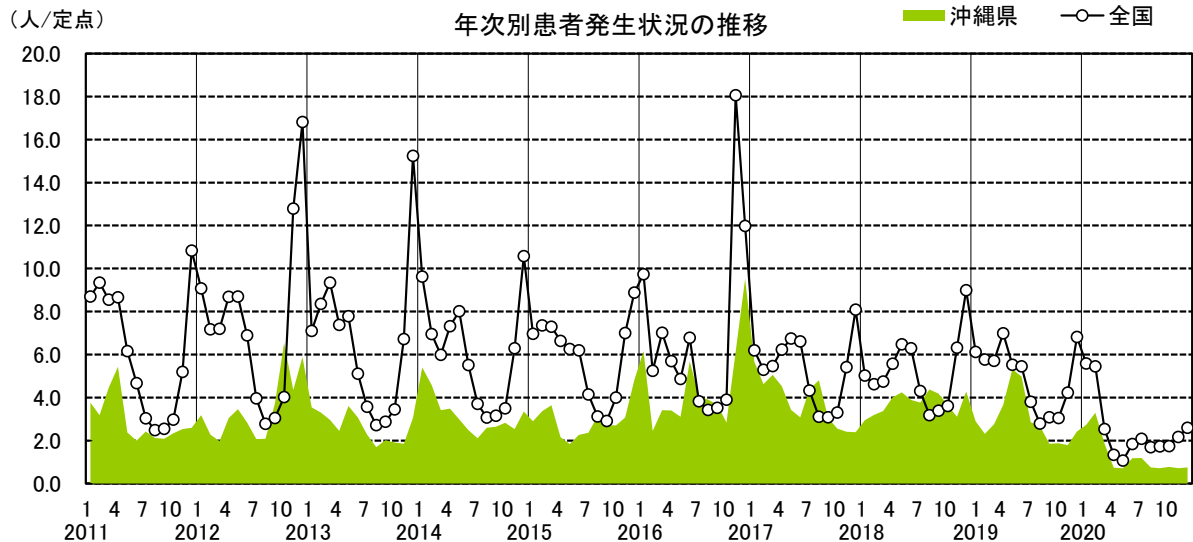
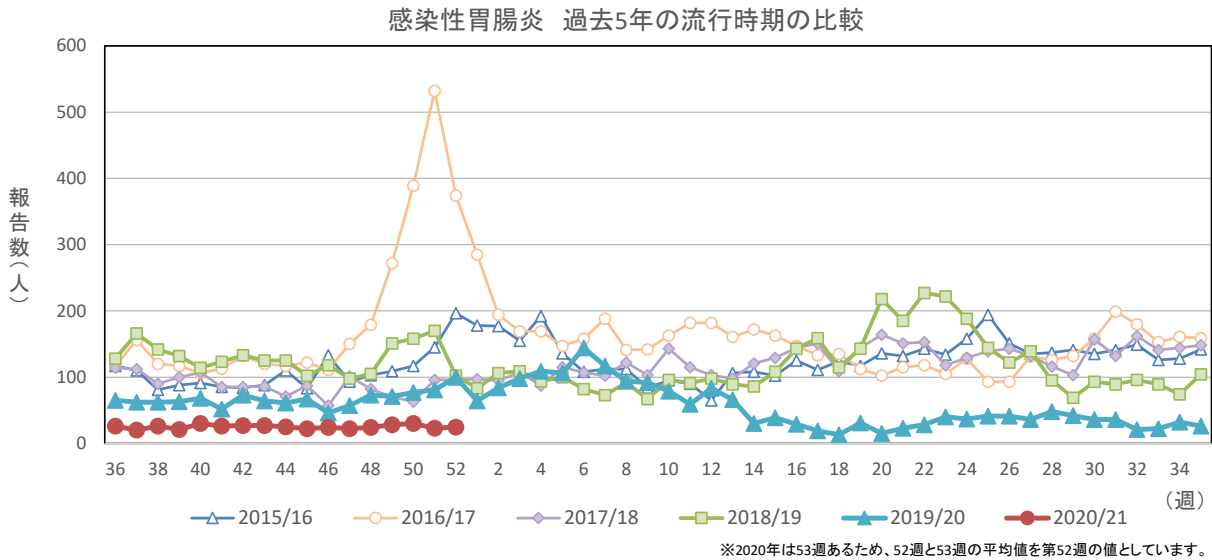
● 感染性胃腸炎

感染性胃腸炎は、多くの細菌（腸炎ビブリオ、病原性大腸菌、サルモネラ、カンピロバクター等）やウイルス（ノロウイルス、ロタウイルス等）、寄生虫（クリプトスポリジウム、アメーバ等）が起因病原体となる。ウイルス性の流行のピークは秋から春にかけて、細菌性の流行は夏季に認められることが多い。

2020年、沖縄県内の報告数は2,330人、定点当たり報告数は68.75人であった。2019/20シーズンの報告数は3,022人、2020/21シーズンの報告数は2020年第53週までで450人だった。

沖縄県、全国ともに、2020年の冬にピークが見られたものの、2019/20シーズン（2019年第36週～2020年第35週）及び2020/21シーズン（2020年第36週～2020年第53週）は、警報レベルの開始基準値20を上回る週はなかった。

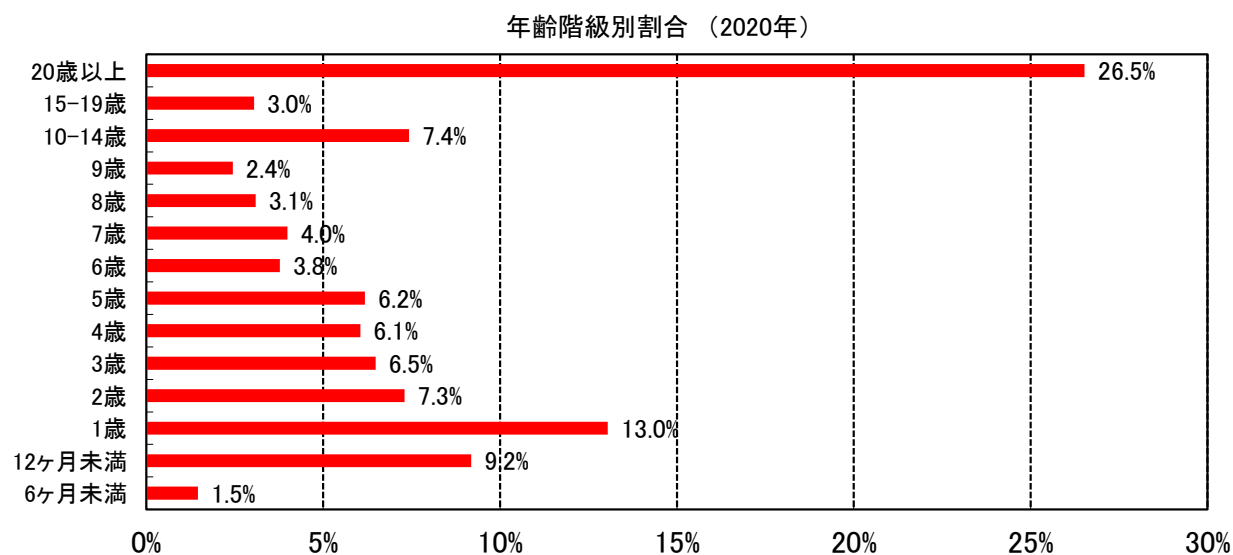
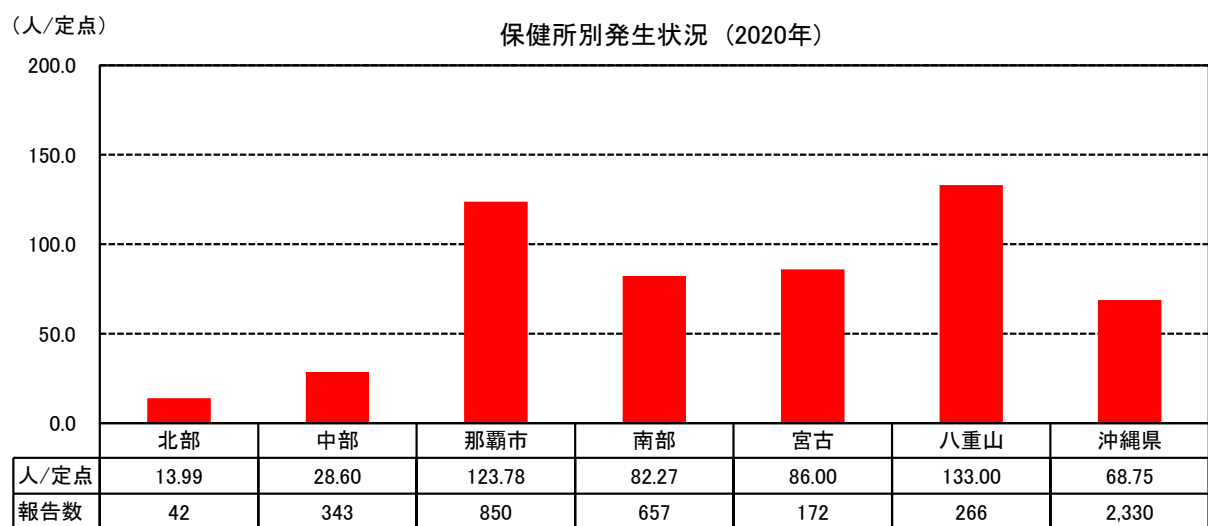
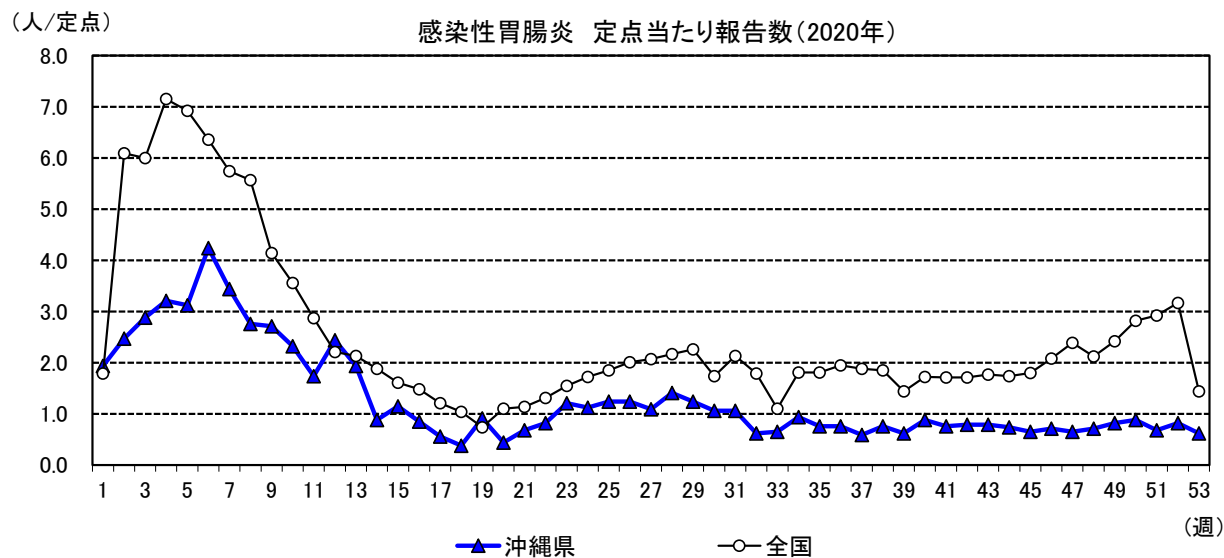
年齢階級別では、10歳未満が全体の63.1%を占めていた。



シーズン（9月～翌年8月）別の報告数合計：感染性胃腸炎

平均報告数 (2020/21を除く)	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21*
6,072	6,609	8,523	5,926	6,280	3,022	450

* : 2020年第36週～第53週の集計。

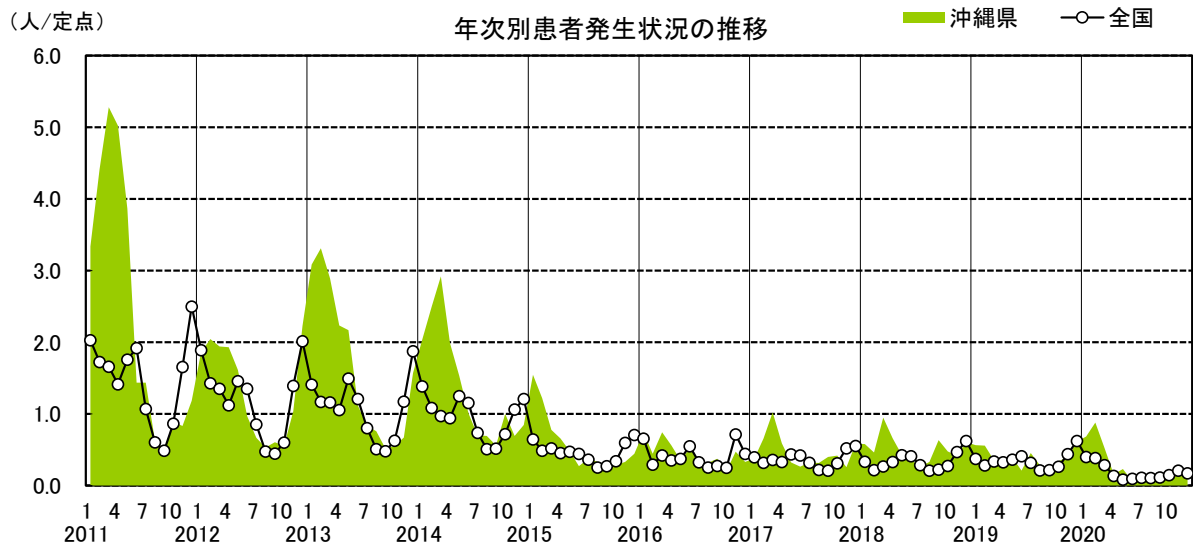
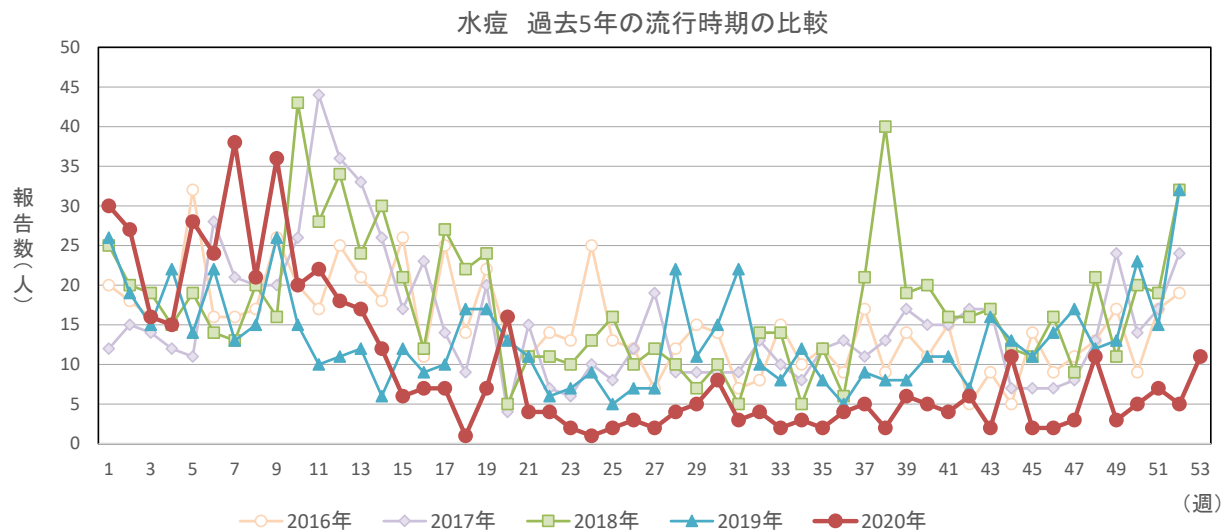


●水痘

水痘は、水痘帯状疱疹ウイルス（VZV）によって起こる急性の伝染性疾患である。例年12月～7月に患者発生報告が多く、罹患年齢はほとんどが10歳未満であることが知られている。

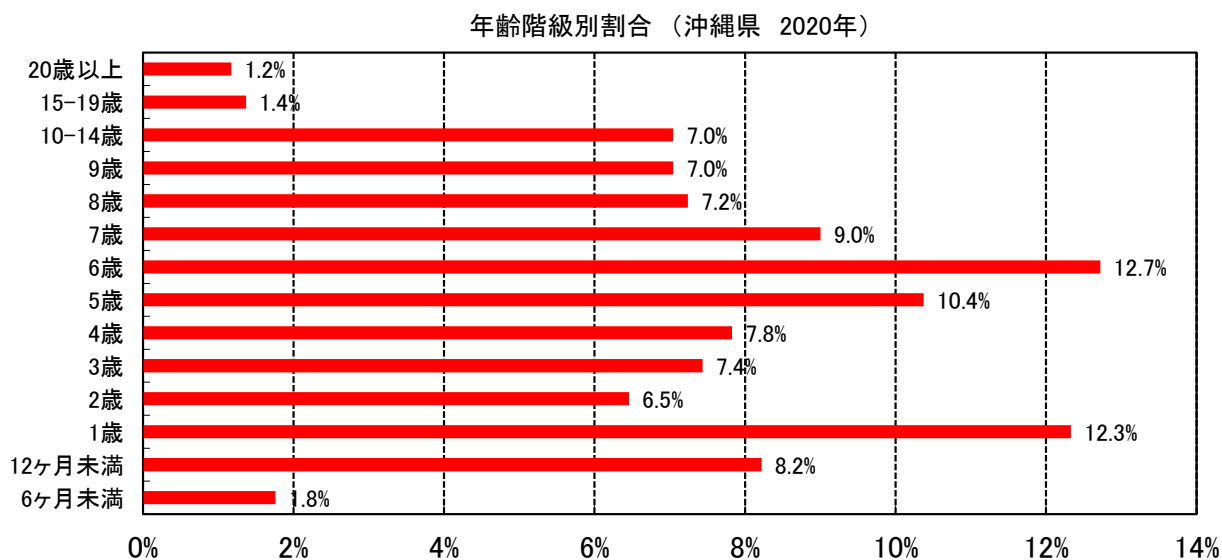
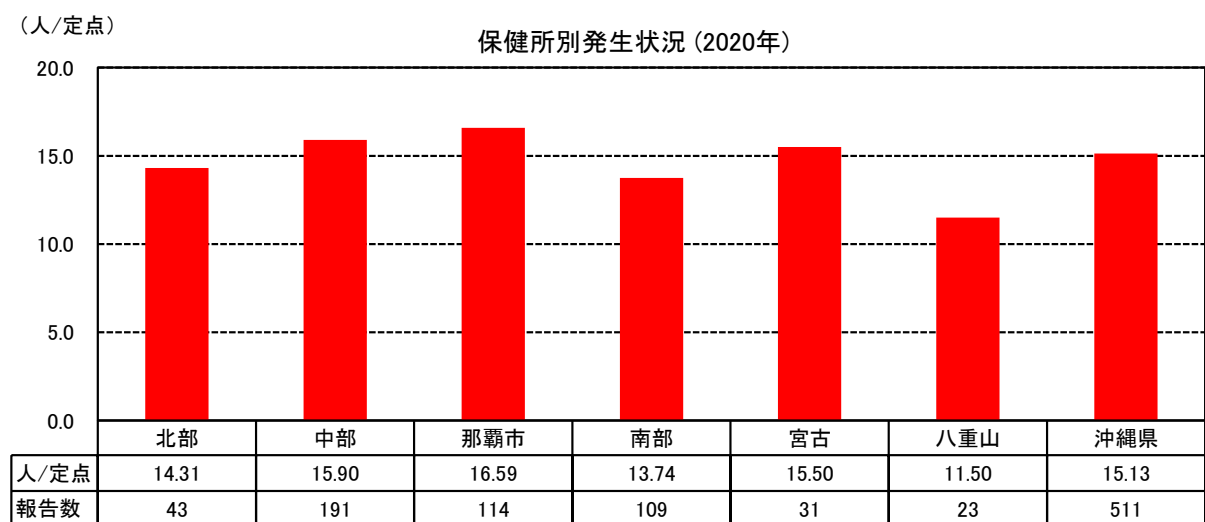
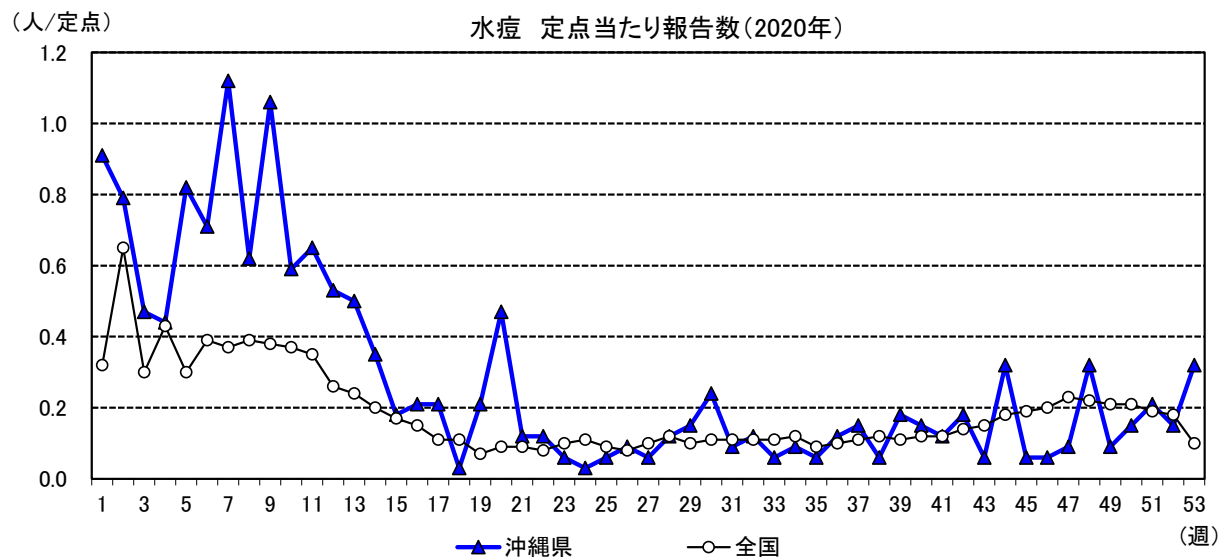
2020年沖縄県内の報告数は511人、定点当たり報告数は15.13人であった。定期予防接種の対象となった2014年10月以降、減少傾向にあり、2020年の報告者数は過去10年で最も少なかった。また、2020年は沖縄県、全国ともに警報レベルの開始基準値2を上回る週はなかった。

年齢階級別では、10歳未満が全体の90.4%を占め、6歳が最も多く12.7%、次いで1歳が12.3%、5歳が10.4%と続いた。



年別の報告数合計：水痘

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
735	779	800	897	689	511

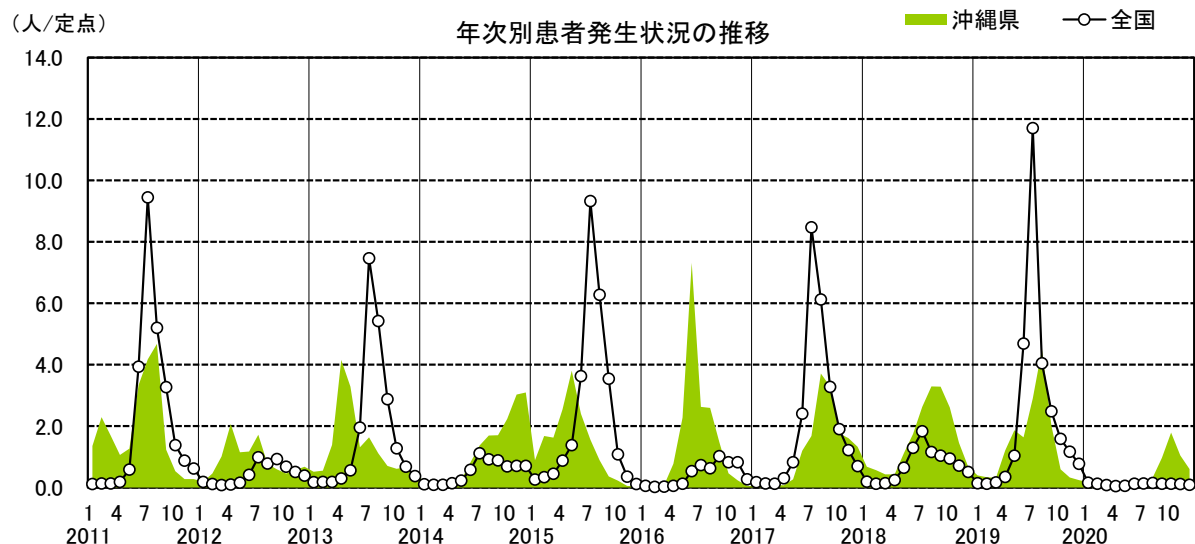
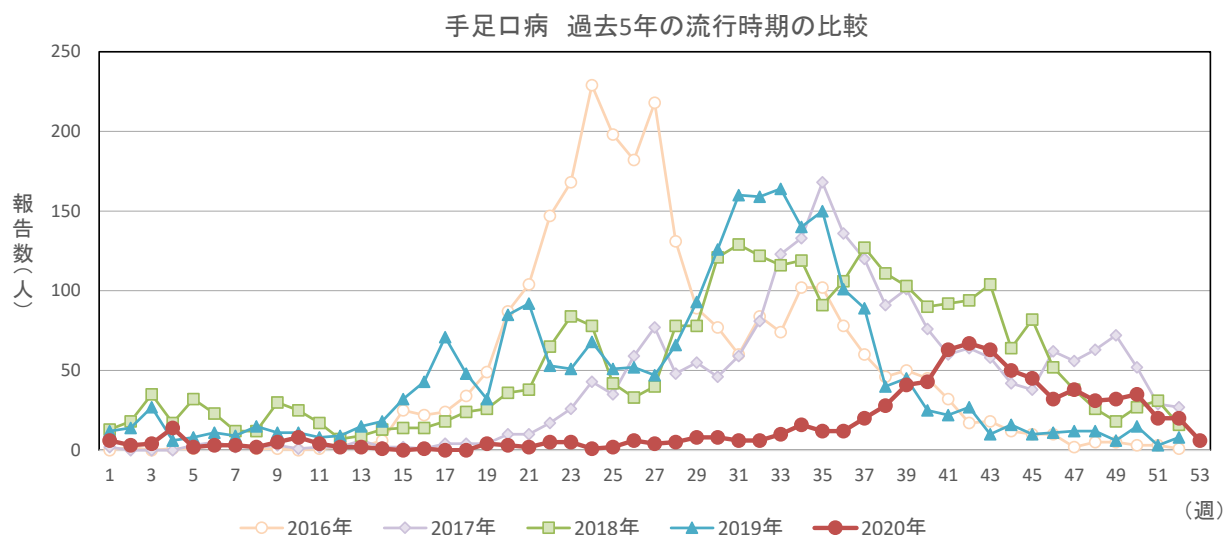


●手足口病

手足口病は、口腔粘膜および手や足などに現れる水疱性の発疹を主症状とした急性ウイルス感染症で、幼児を中心に夏季に流行が見られる。コクサッキーA16（CA16）、CA10、CA6、エンテロウイルス71（EV71）などが起因ウイルスである。EV71は中枢神経系合併症の発生率が他のウイルスより高いことが知られている。

2020年沖縄県内の報告数は809人、定点当たり報告数は23.84人で、過去5年で最も少なかった。また、全国では目立った流行が見られなかったのに対し、沖縄県では例年よりやや遅い10月にピークが見られたが、どちらも警報レベルの開始基準値5を上回る週はなかった。

年齢階級別では1歳が最も多く、全体の61.7%を占めていた。

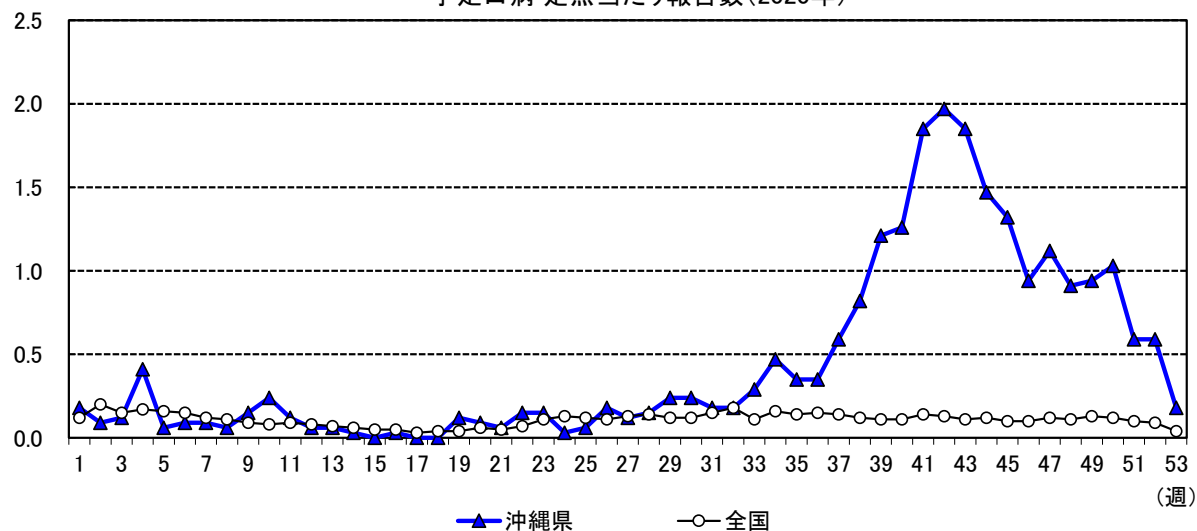


年別の報告数合計：手足口病

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
2,167	2,627	2,182	2,810	2,409	809

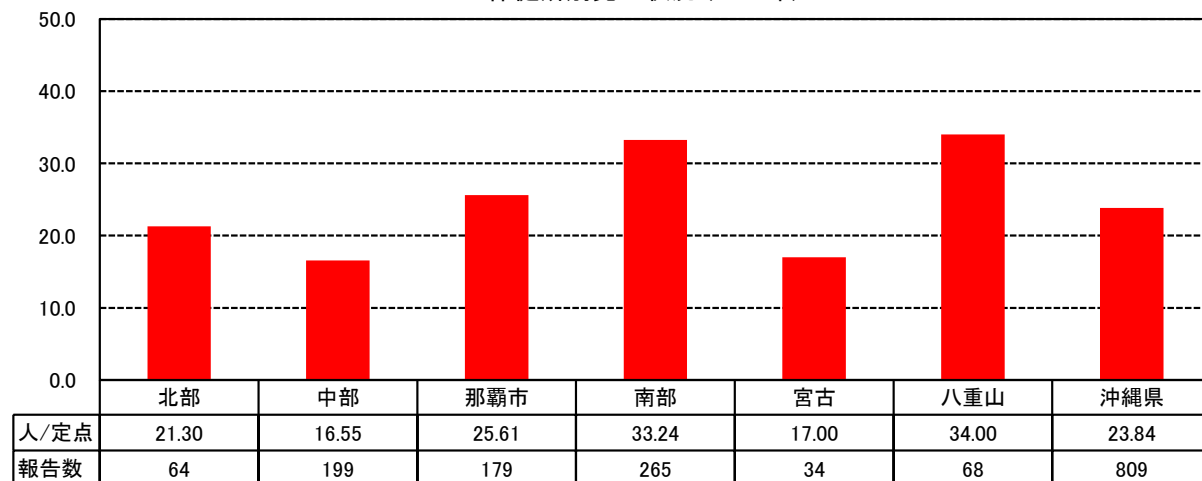
(人/定点)

手足口病 定点当たり報告数(2020年)

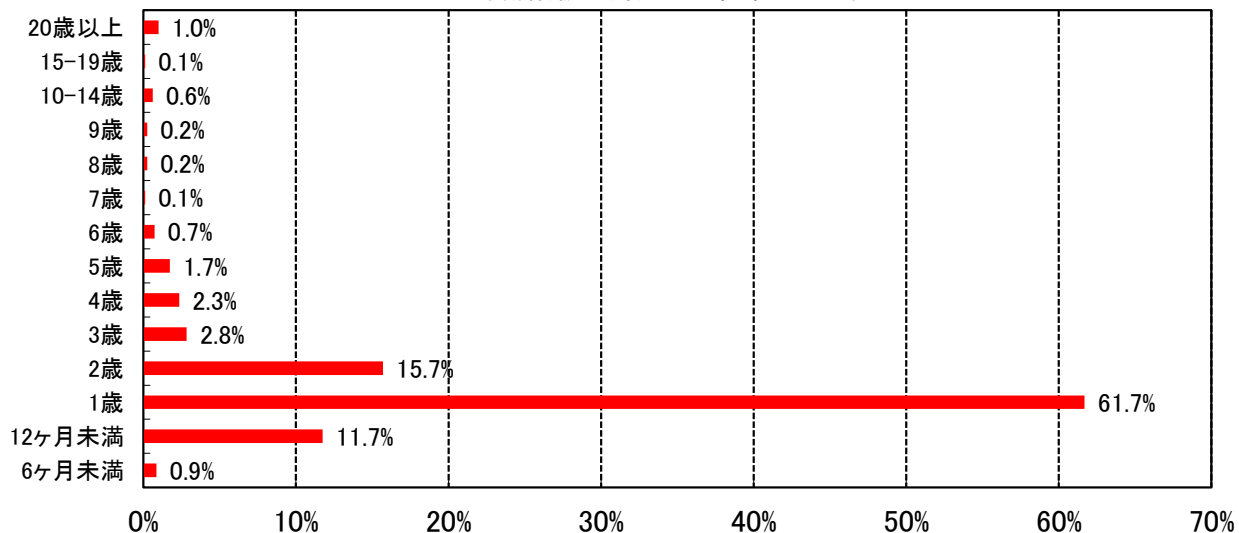


(人/定点)

保健所別発生状況(2020年)



年齢階級別割合(沖縄県 2020年)



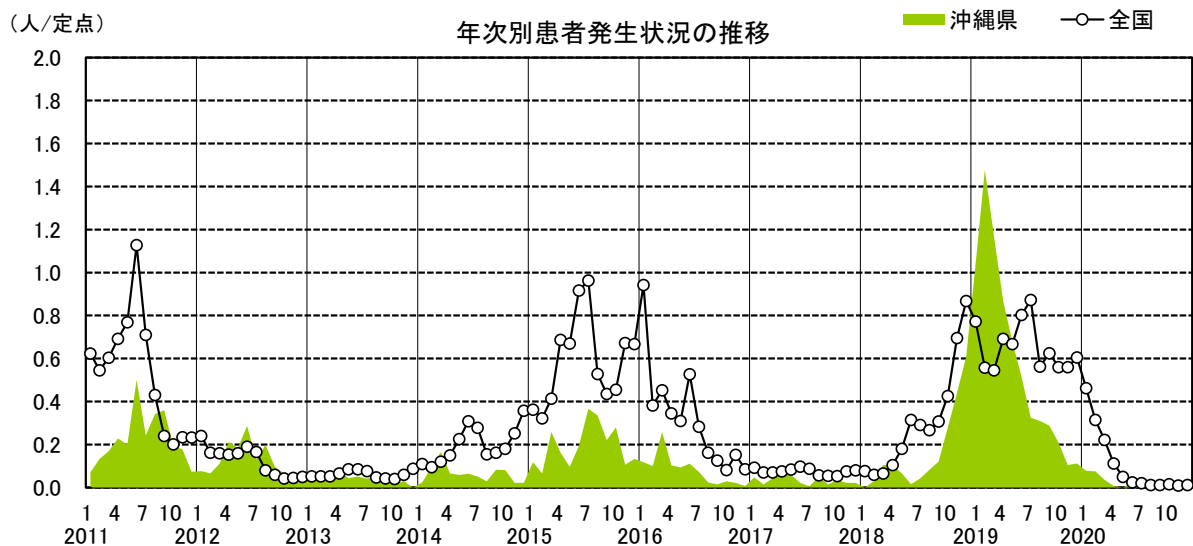
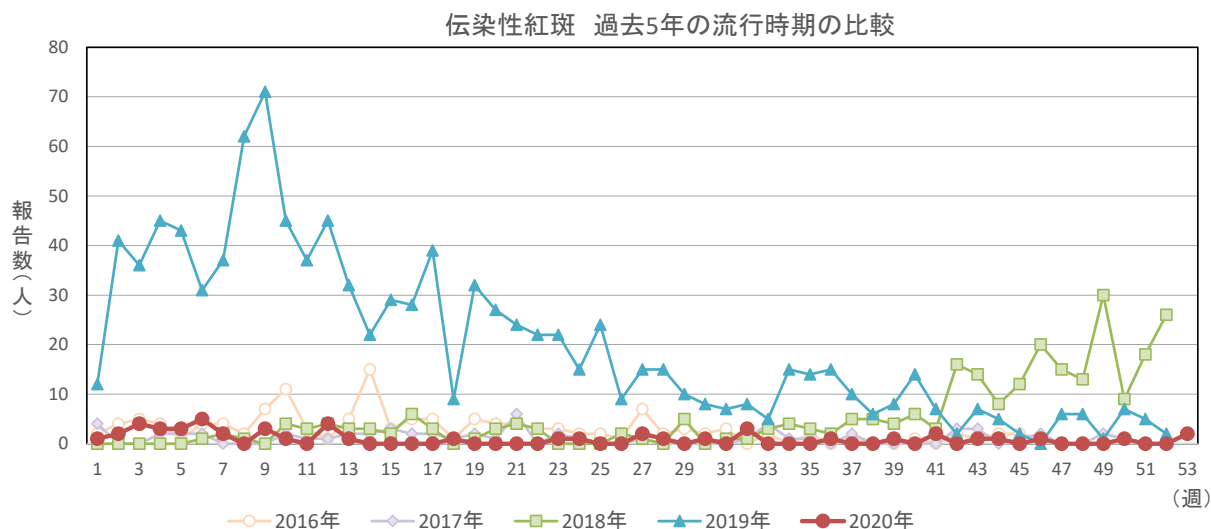
●伝染性紅斑

伝染性紅斑は、ヒトパルボウイルスB19による流行性発疹性疾患である。頬に出現する蝶翼状の紅斑が特徴であり、小児に多く見られる。両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」と呼ばれることもある。1月から7月にかけて報告数が増加し、9月頃最も少なくなるという流行パターンを呈する。

2020年、沖縄県内の報告数は49人、定点当たり報告数は1.47人であり、過去10年で最も少ない報告数であった。

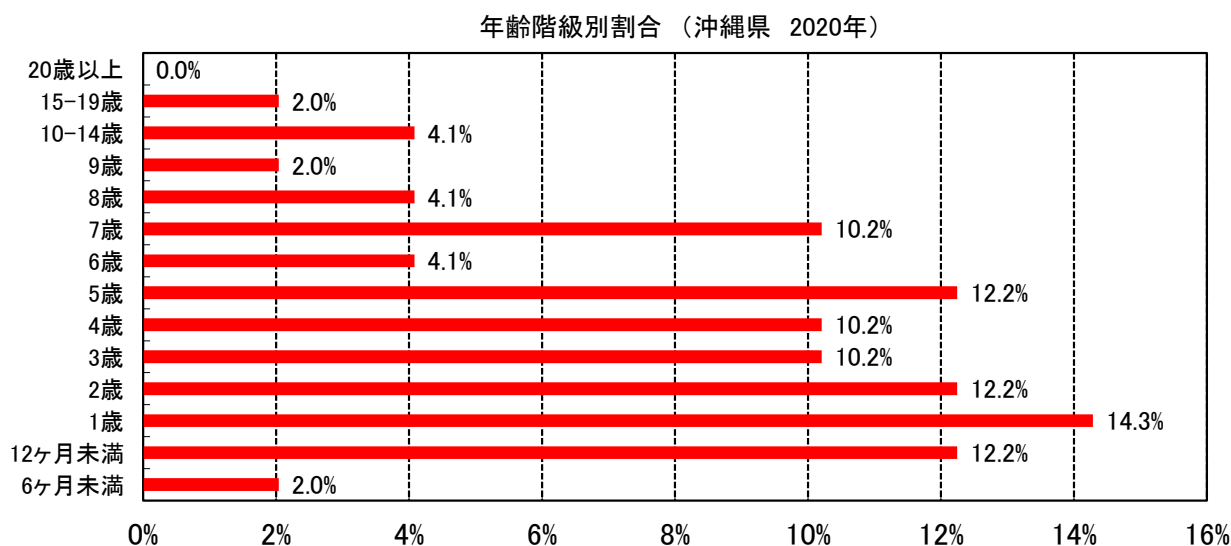
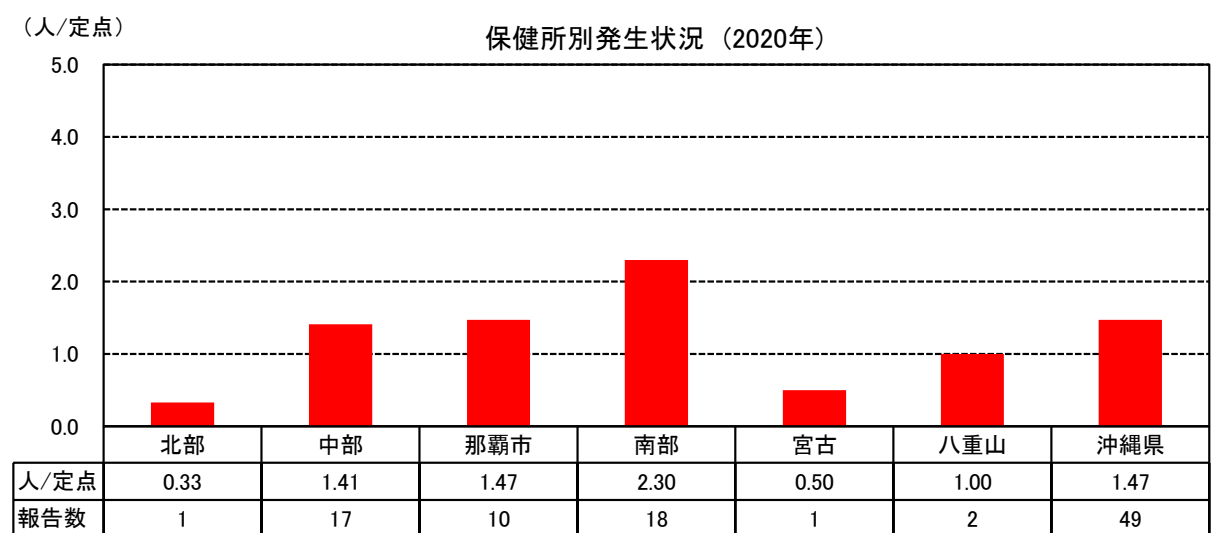
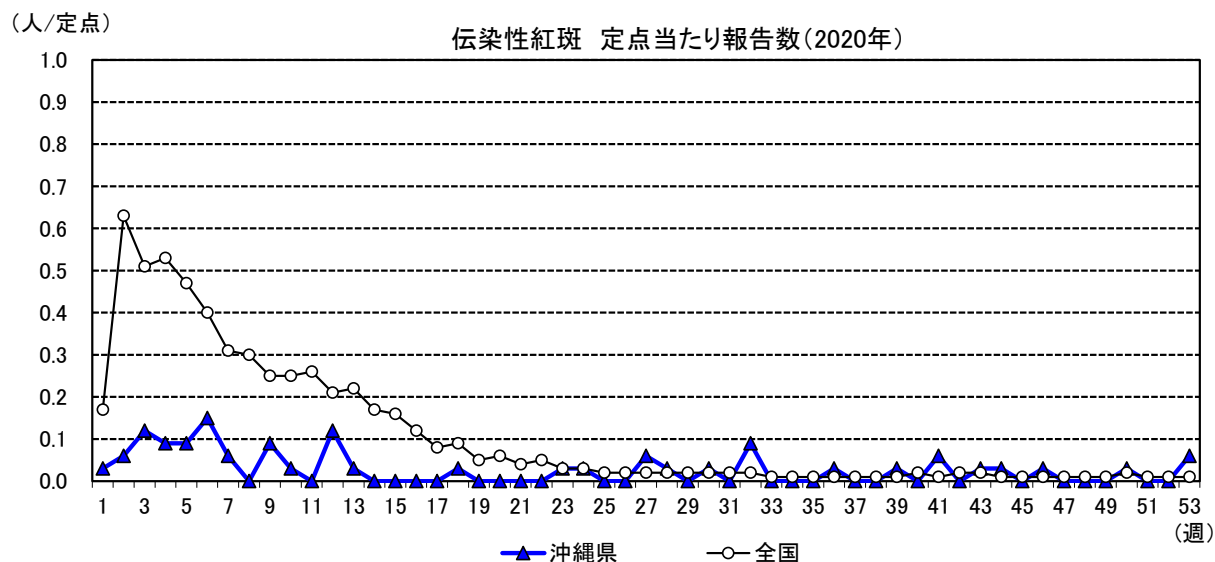
また、沖縄県、全国ともに、大きな流行はなく、警報レベルの開始基準値2を上回る週はなかった。

年齢階級別では、10歳未満が93.9%を占めていた。



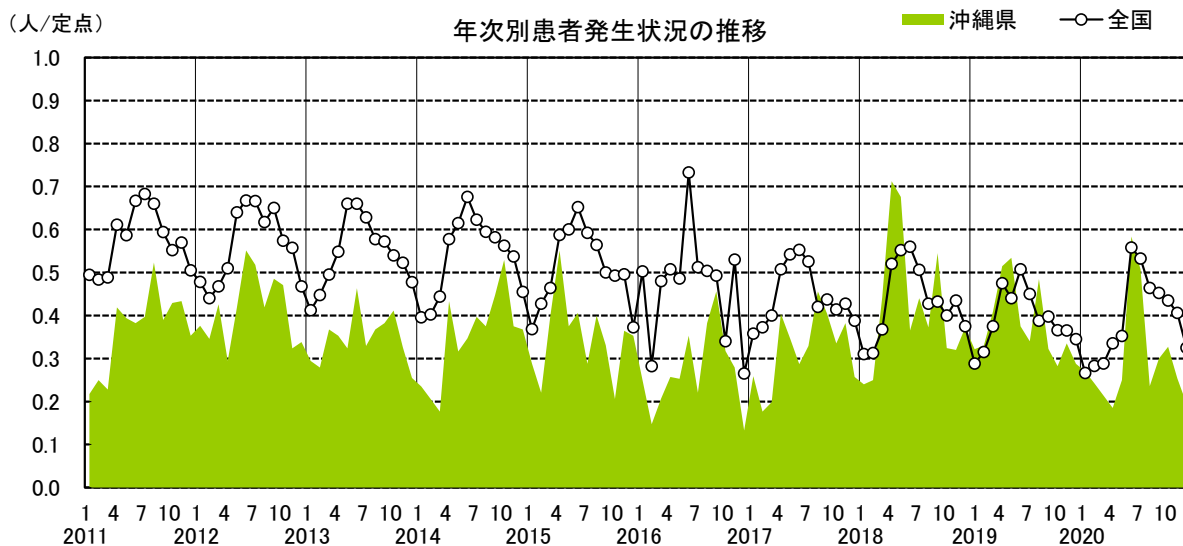
年別の報告数合計：伝染性紅斑

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
311	138	60	269	1039	49



突発性発疹は、乳児期に罹患することが多く、突然の高熱と解熱前後の発疹を特徴とするウイルス感染症で、予後は一般に良好である。原因ウイルスは、ヒトヘルペスウイルス6あるいは7であることが多い。

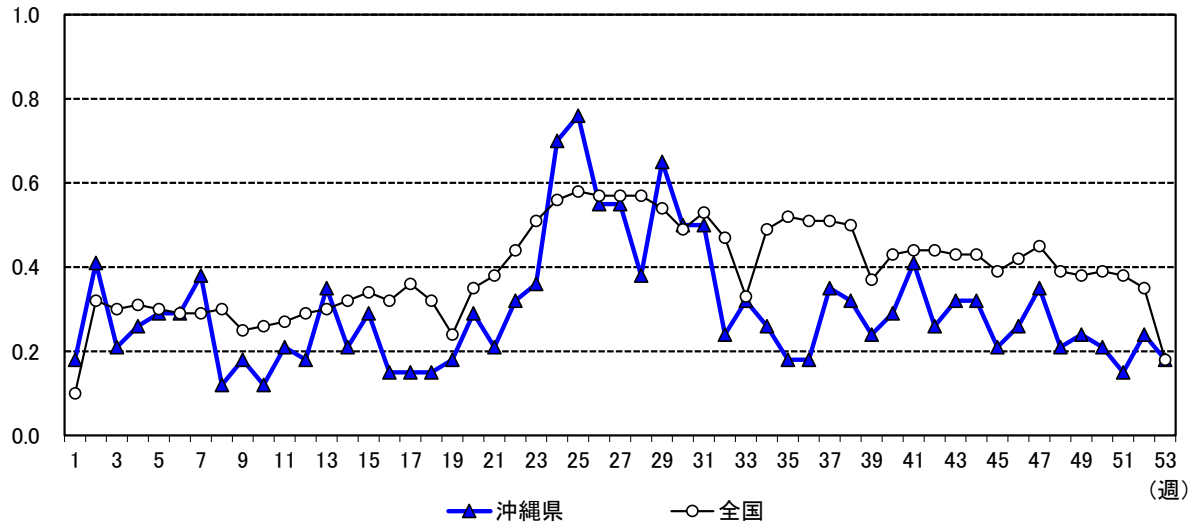
年齢階級別では、1歳が最も多く、全体の52.8%を占めた。



平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
598	480	565	747	666	534

(人/定点)

突発性発疹 定点当たり報告数(2020年)

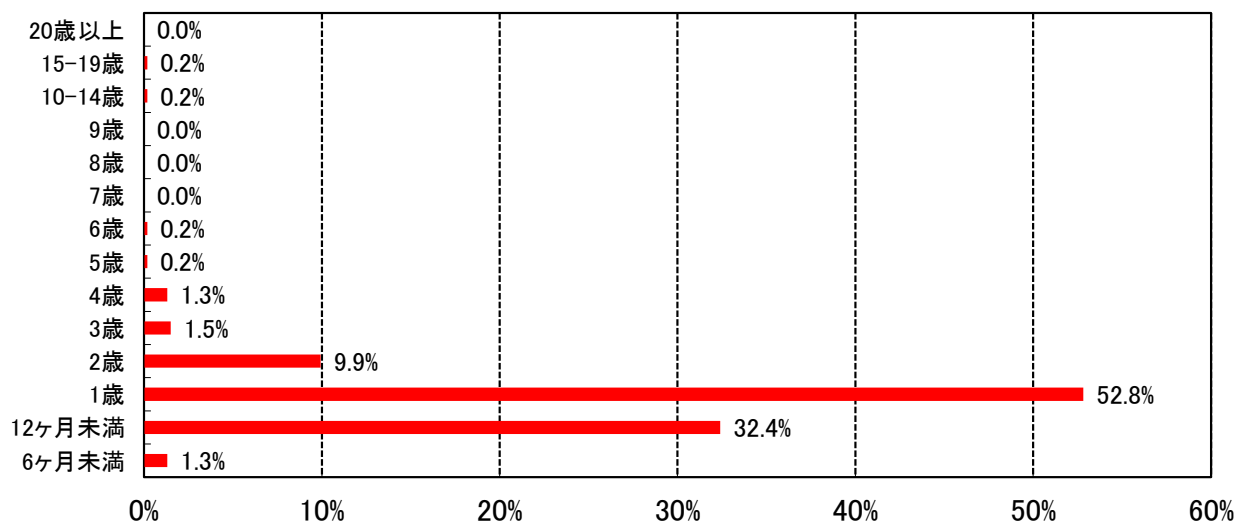


(人/定点)

保健所別発生状況 (2020年)



年齢階級別割合 (沖縄県 2020年)



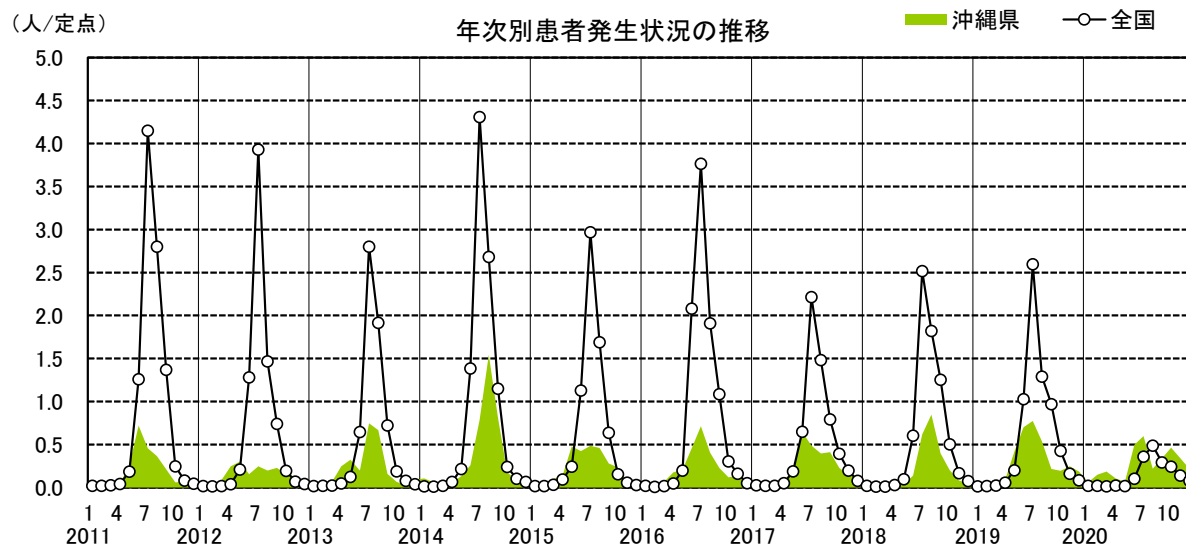
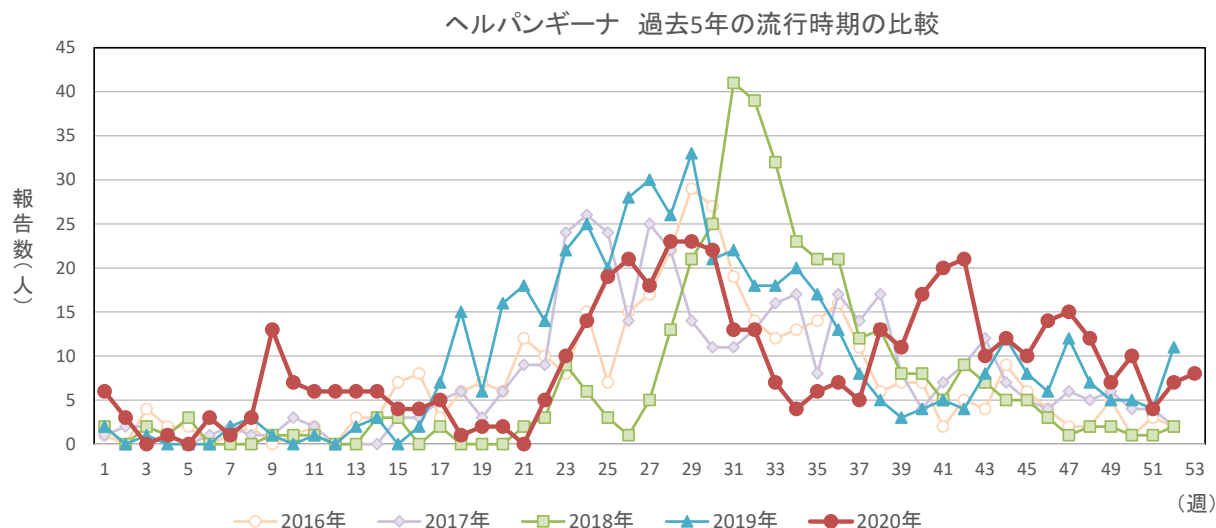
●ヘルパンギーナ

ヘルパンギーナは、エンテロウイルス属、特にコクサッキーウイルスA群を主原因とする感染症である。発熱と口腔粘膜の水疱性発疹を特徴とし、夏季に流行する夏かぜの代表的疾患である。

2020年、沖縄県内の報告数は480人、定点当たり報告数は14.25人であった。

また、沖縄県、全国ともに、警報レベルの開始基準値6を上回る週はなかった。

年齢階級別では、1歳の報告数が最も多く全体の48.1%、次いで12ヶ月未満が21.0%、2歳が18.3%と続いた。

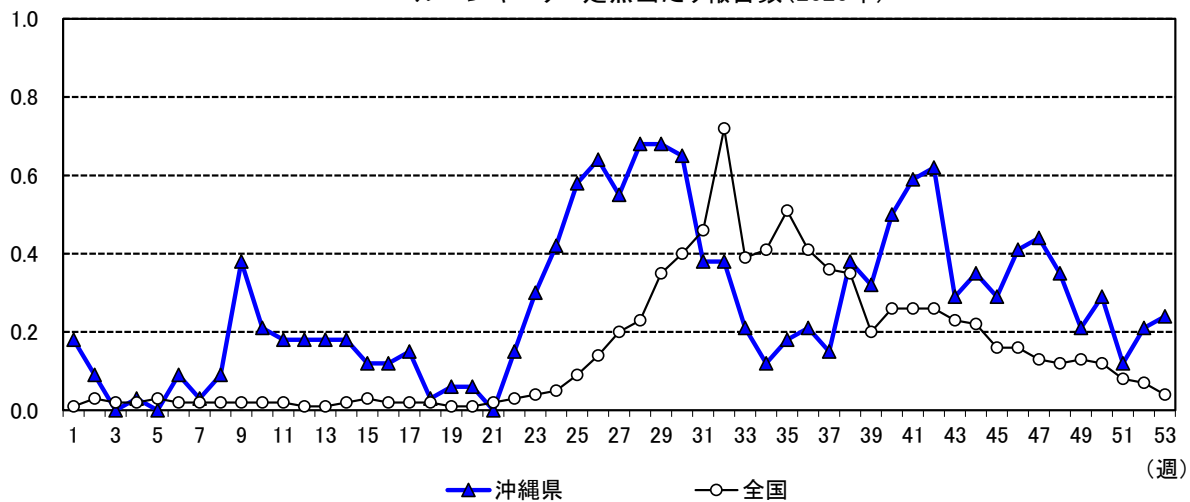


年別の報告数合計：ヘルパンギーナ

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
432	384	416	368	513	480

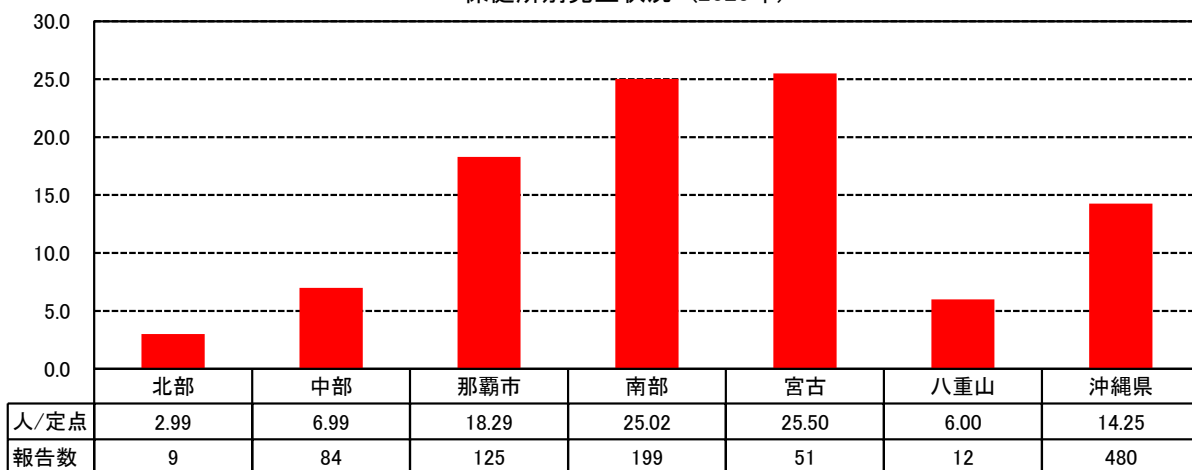
(人/定点)

ヘルパンギーナ 定点当たり報告数(2020年)

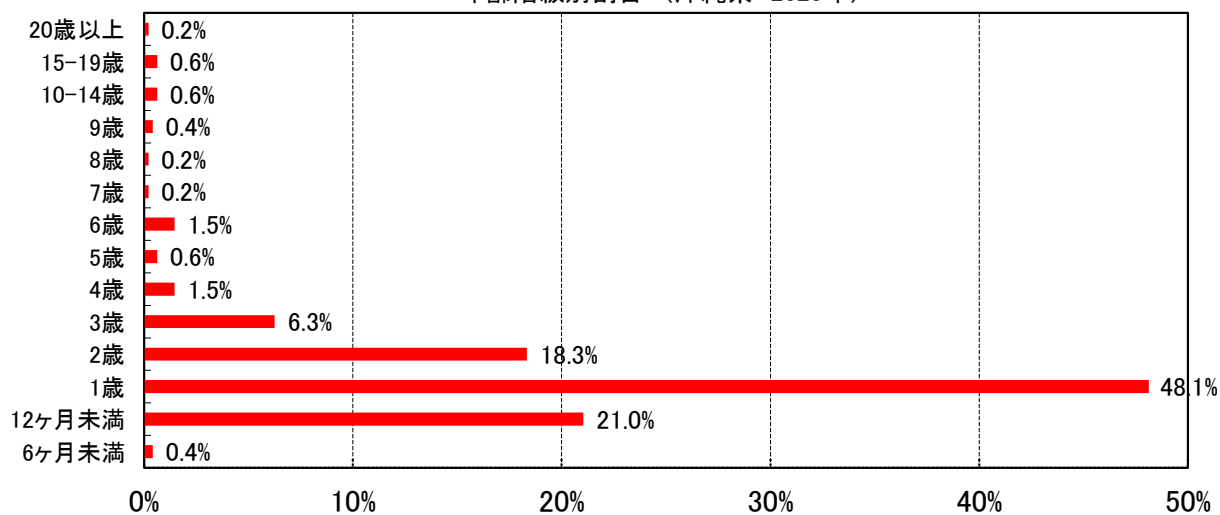


(人/定点)

保健所別発生状況 (2020年)



年齢階級別割合 (沖縄県 2020年)



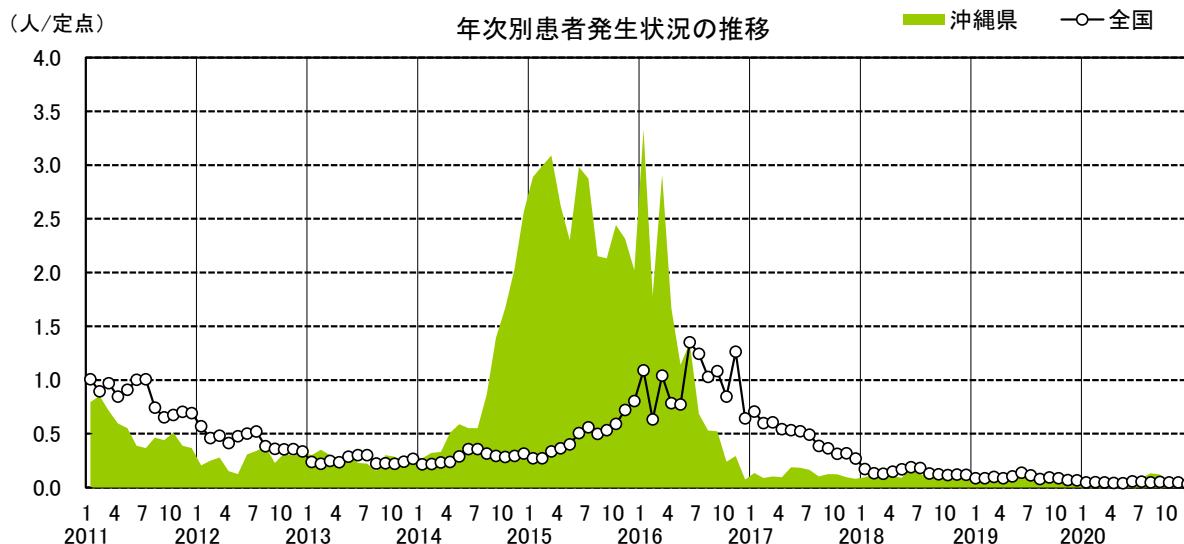
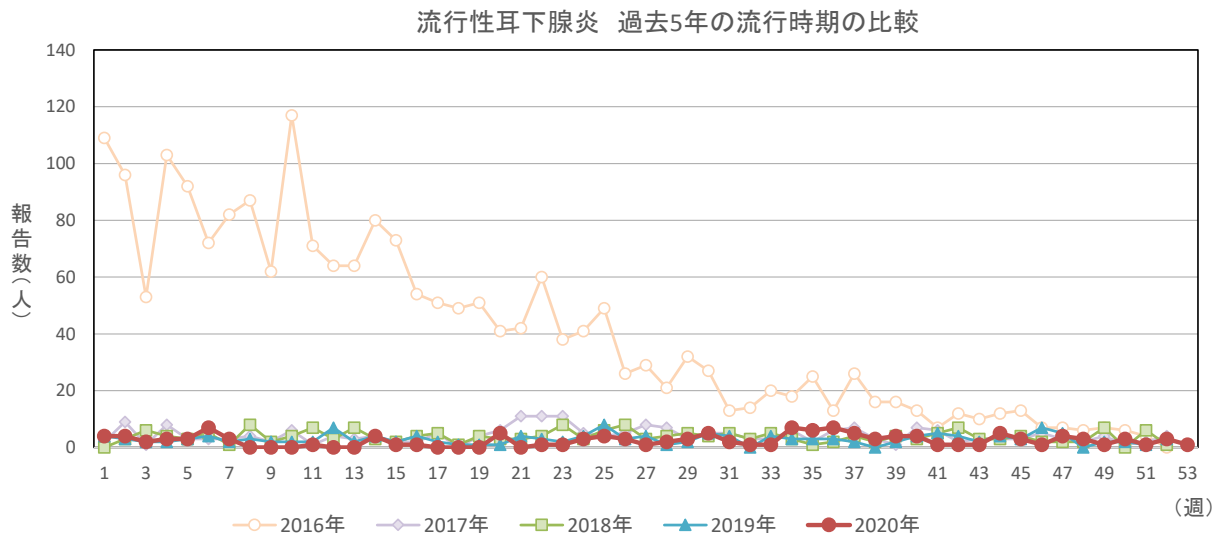
●流行性耳下腺炎

流行性耳下腺炎は、片側あるいは両側の唾液腺の腫脹を特徴とするムンプスウイルスによる感染症である。本疾患は全国でも毎年、3～4年周期での患者増加がみられており、本県でも概ね4年周期で増加が認められている。前回の増加期は2009年（2,295人）と2010年（3,530人）及び2015年（4,647人）と2016年（2,101人）であった。

2020年、沖縄県内の報告数は129人、定点当たり報告数は3.87人であった。2015年以降は減少傾向にあり、2020年は過去10年で最も報告数が少なかった。

2020年は、沖縄県、全国ともに、警報レベルの開始基準値6を上回る週はなかった。

年齢別では、10歳未満が多く、全体の93.0%を占めていた。また、20歳以上は全体の3.1%であった。

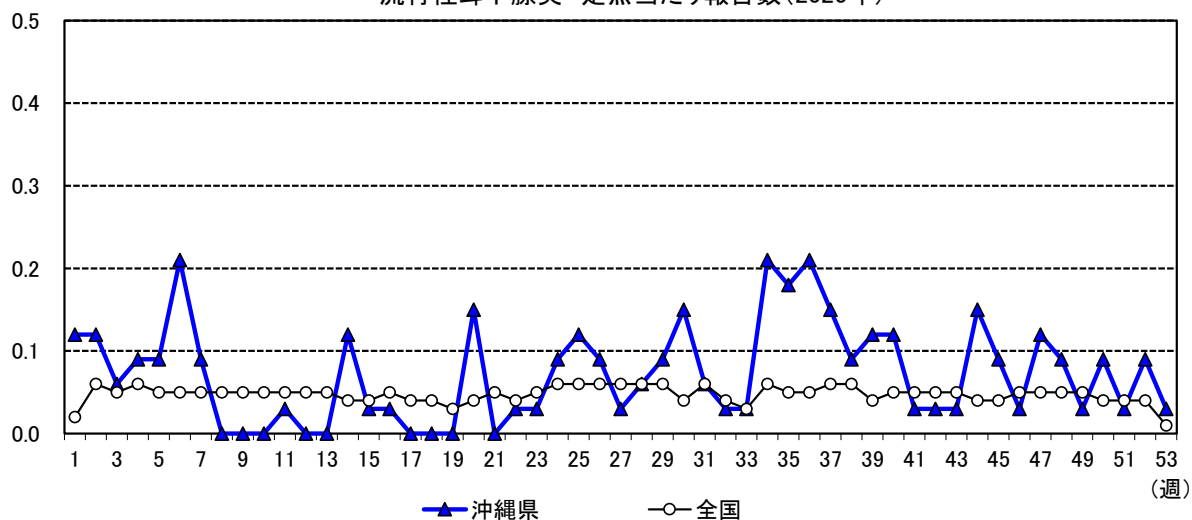


年別の報告数合計：流行性耳下腺炎

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
560	2,101	223	197	152	129

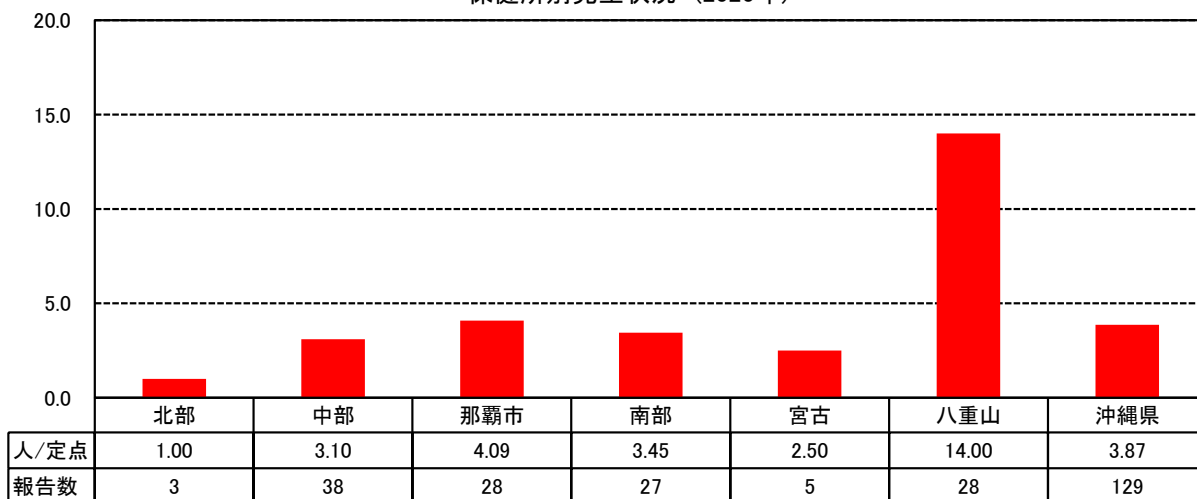
(人/定点)

流行性耳下腺炎 定点当たり報告数(2020年)

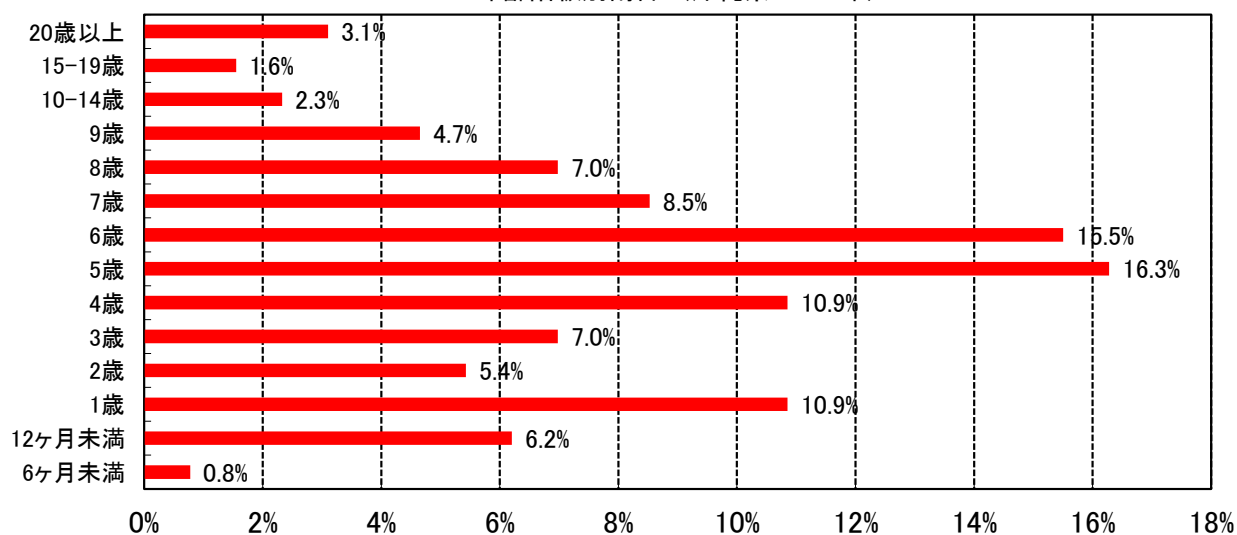


(人/定点)

保健所別発生状況 (2020年)



年齢階級別割合 (沖縄県 2020年)

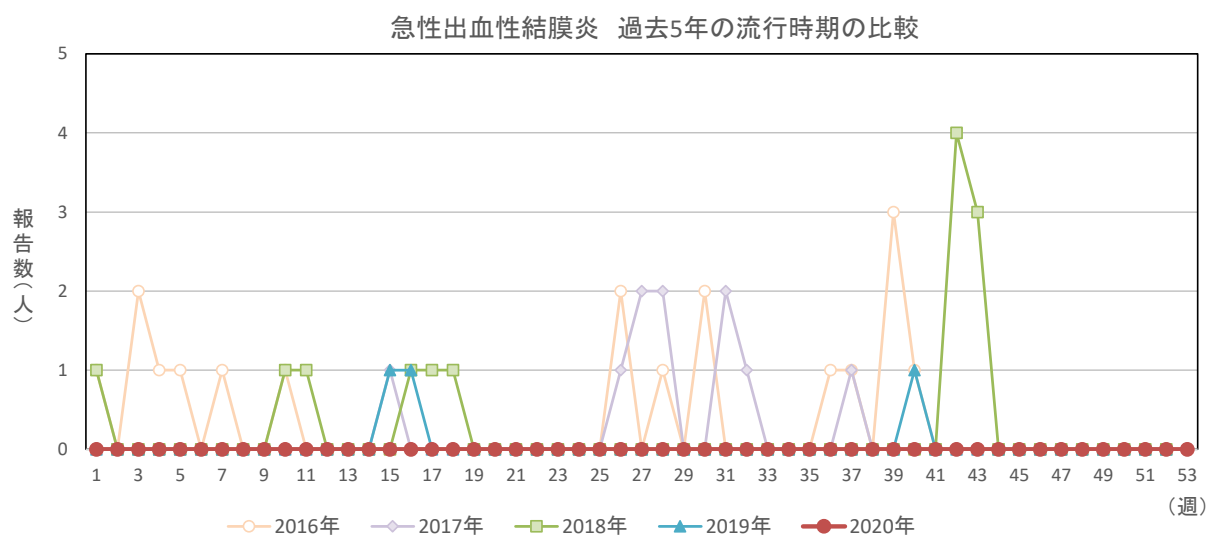


(2) 眼科定点

●急性出血性結膜炎

急性出血性結膜炎（AHC）は、エンテロウイルス70型（EV70）とコクサッキーウイルスA24変異型（CA24v）を主原因とする激しい出血症状を伴う結膜炎である。県内では2011年夏に流行した。

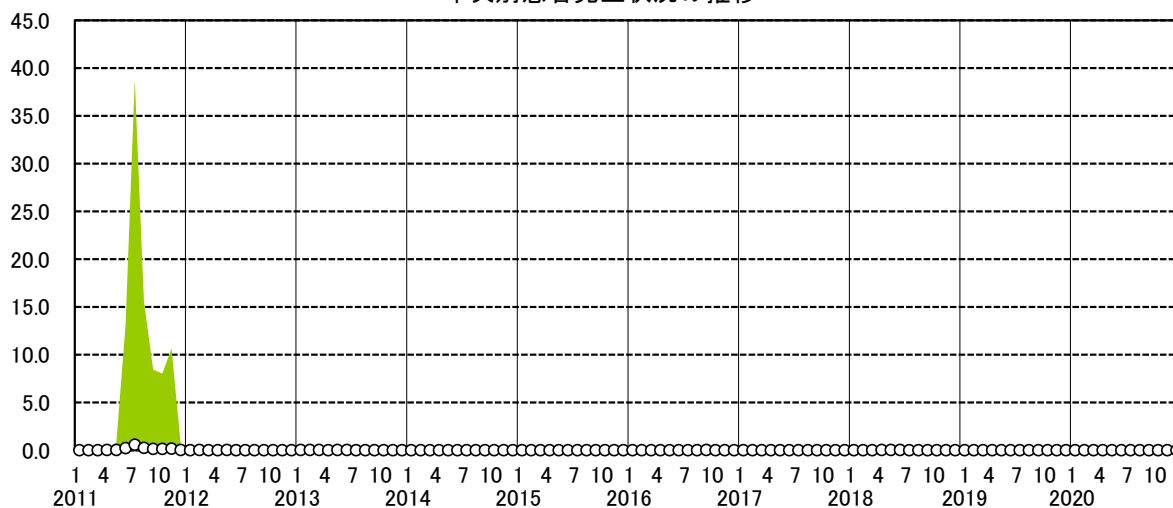
2020年、沖縄県内の報告数は0人（報告なし）、定点当たり報告数は0.00人であり、過去10年で最も少なかった。



(人/定点)

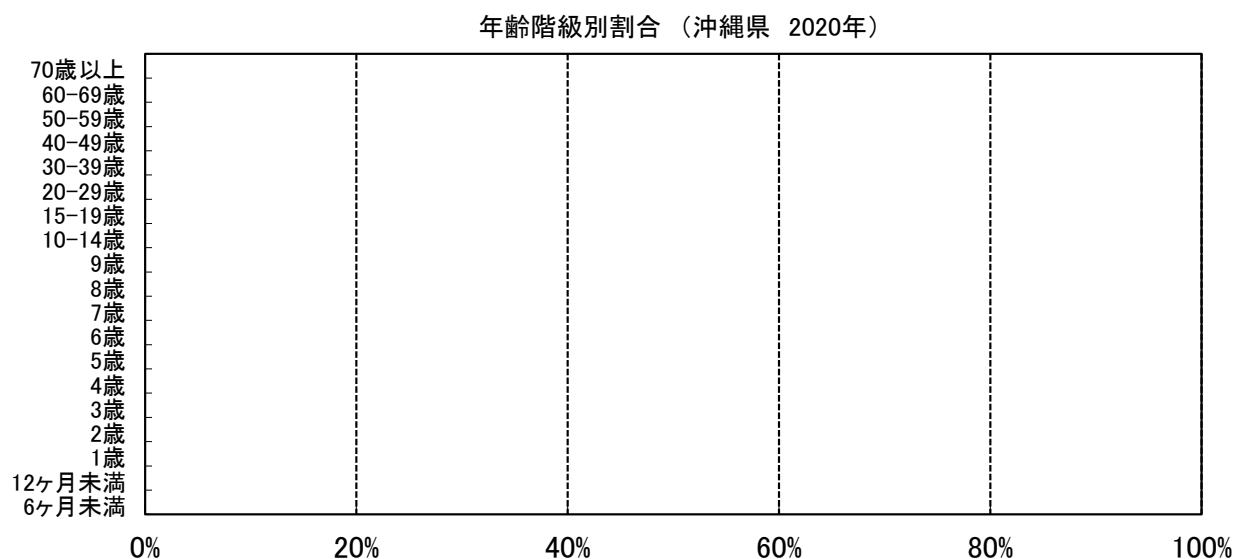
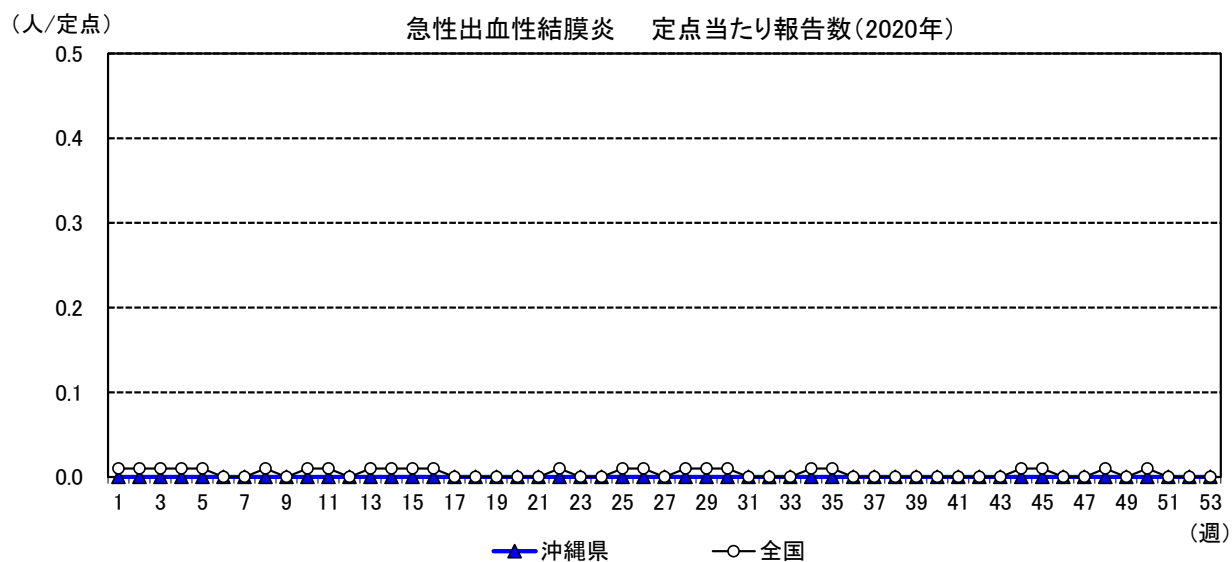
年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国



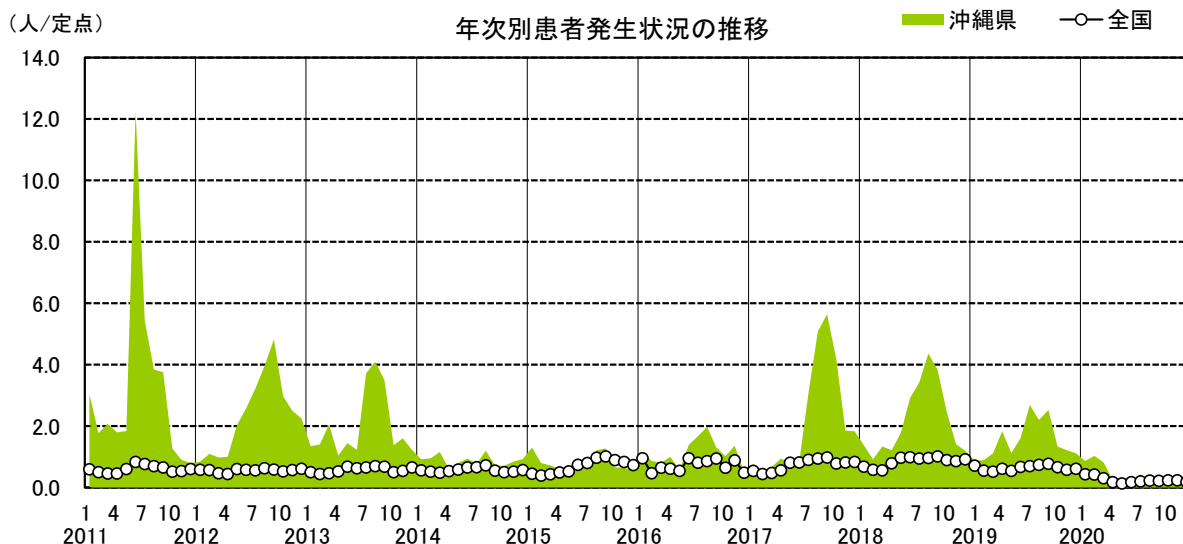
年別の報告数合計：急性出血性結膜炎

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
9	18	10	13	3	0

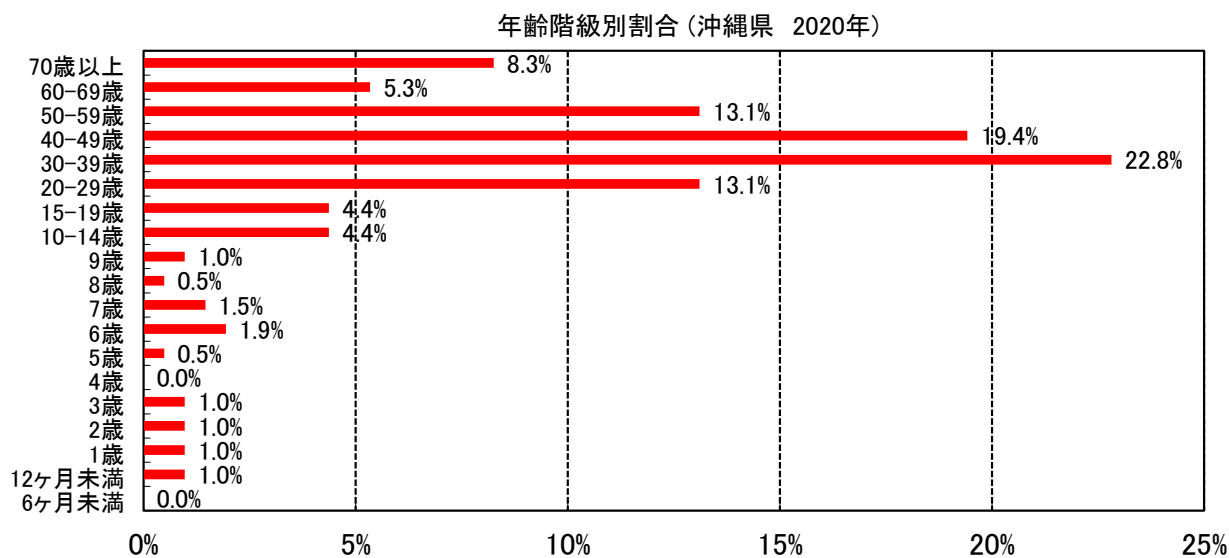
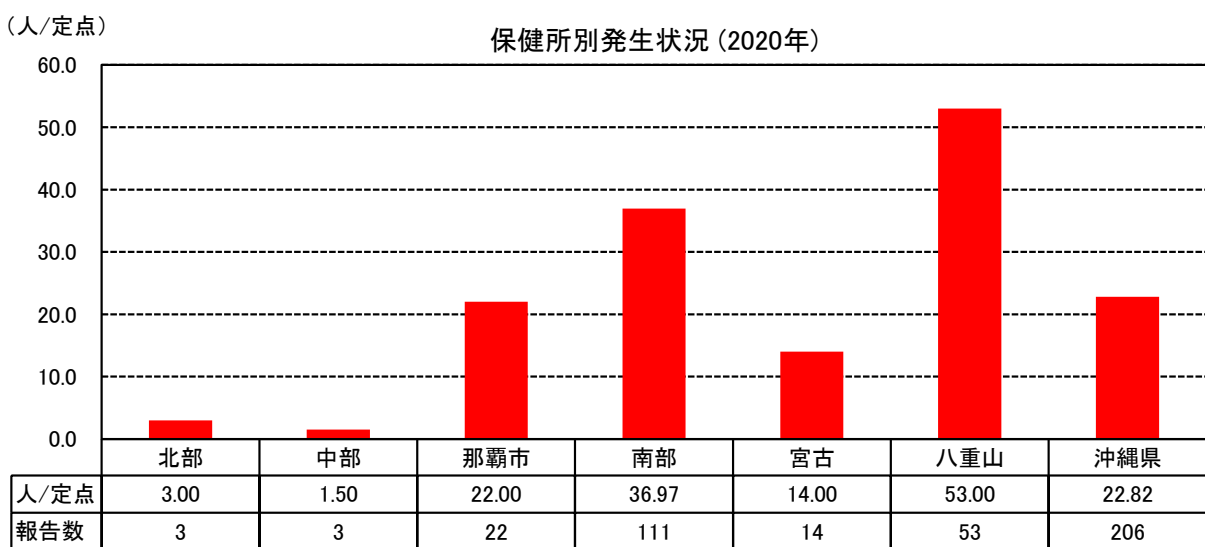
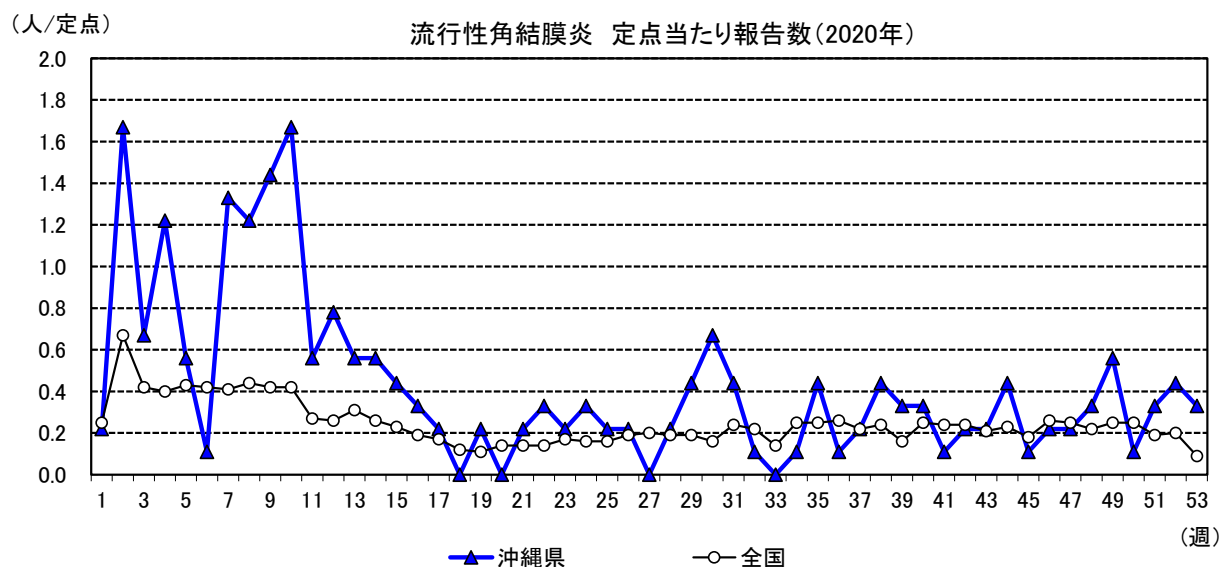


流行性角結膜炎（EKF）は、アデノウイルスD種の8、19、37型等を原因ウイルスとし、流涙（なみだ目）・充血・眼脂（めやに）を主症状とする。家庭内、職場、病院などの人が濃密に接触する場所で流行しやすいとされている。

年齢階級別では、30代が22.8%で最も多く、次いで40代が19.4%、20代及び50代が各13.1%となっていた。



平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
700	530	1,019	1,024	720	206



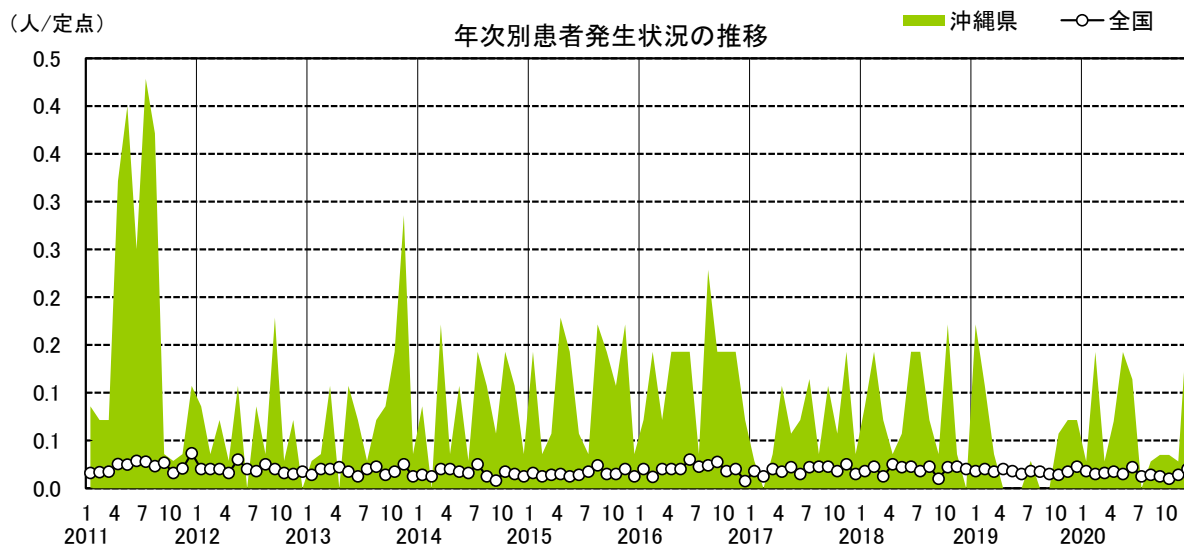
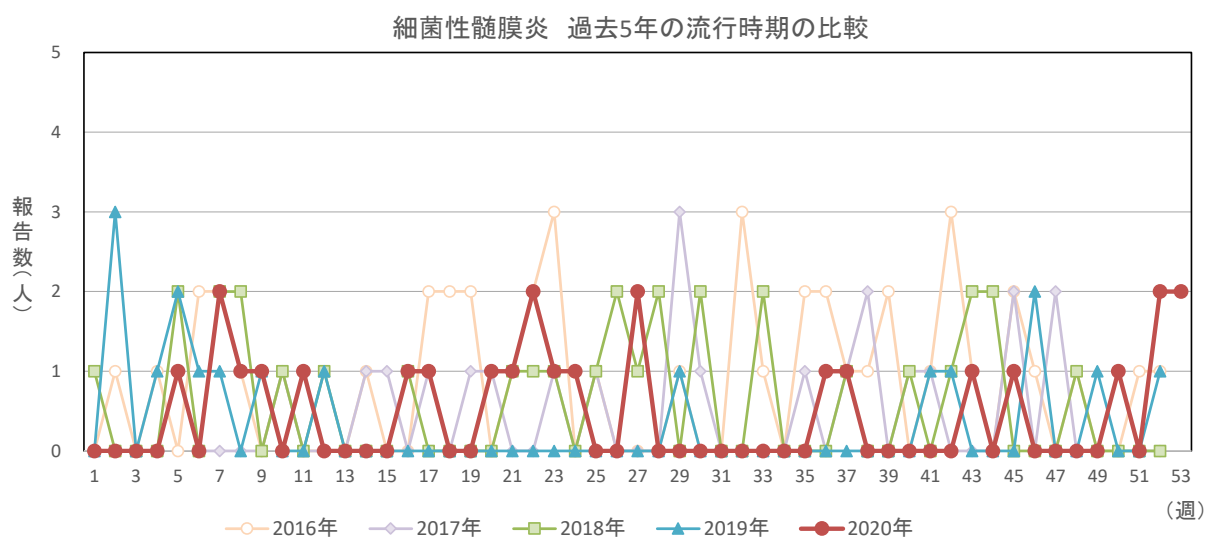
(3) 基幹定点

●細菌性髄膜炎

細菌性髄膜炎は、種々の細菌感染による髄膜炎の総称であり、多くは発熱、頭痛、嘔吐を主症状とし、進行すると意識障害や痙攣がみられる。季節性はなく、原因菌はインフルエンザ菌、肺炎球菌が多い。

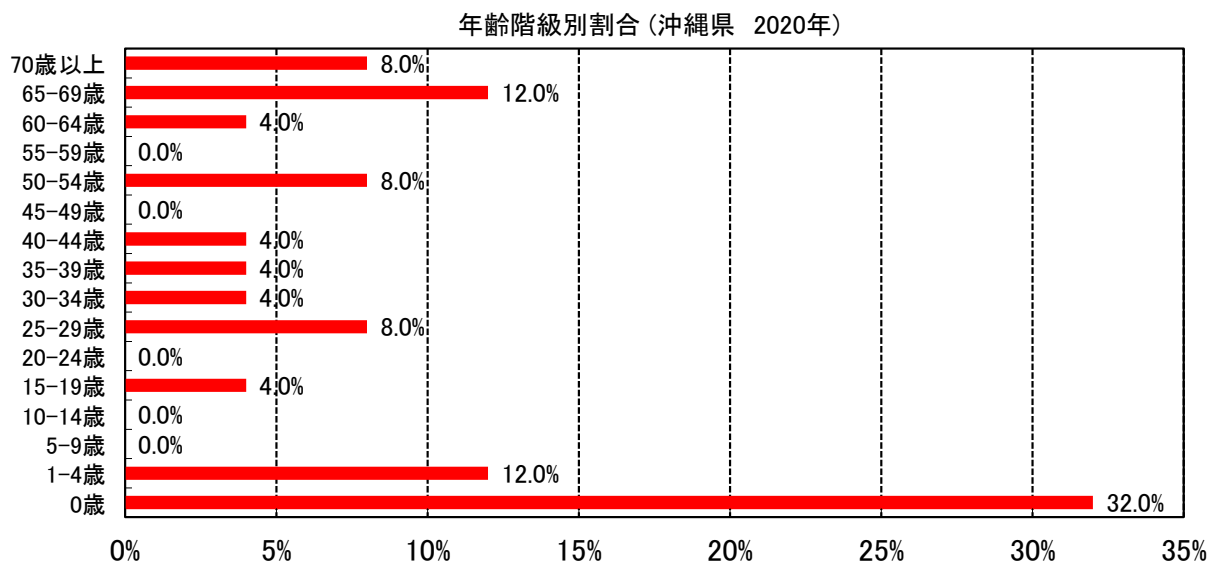
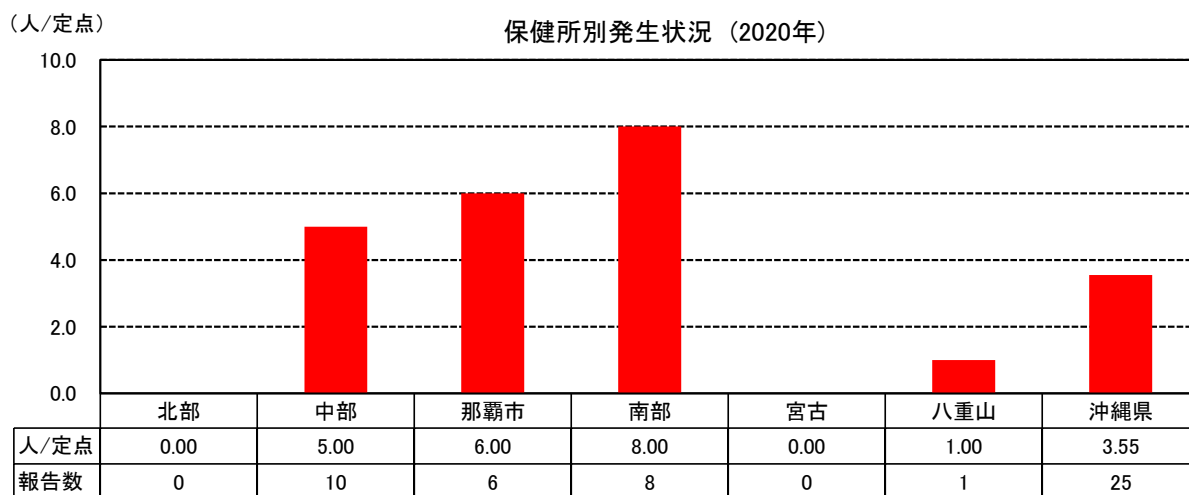
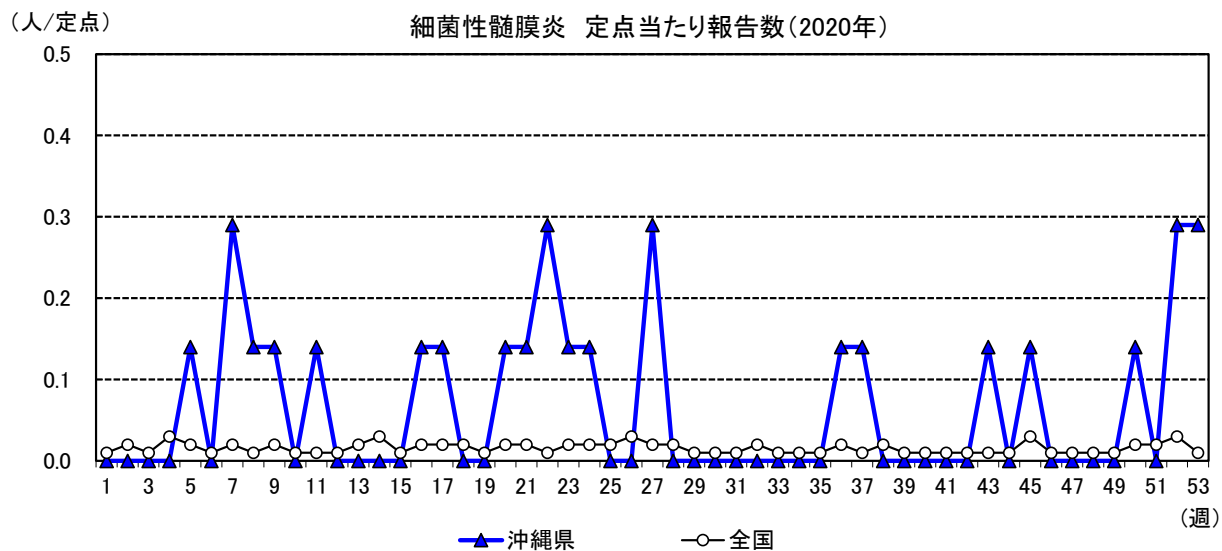
2020年、沖縄県内の報告数は25人、定点当たり報告数は3.55人だった。

年齢階級別では、0歳が32.0%と最も多く、次いで1-4歳と65-69歳の12.0%が続いた。



年別の報告数合計：細菌性髄膜炎

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
29	46	24	31	17	25

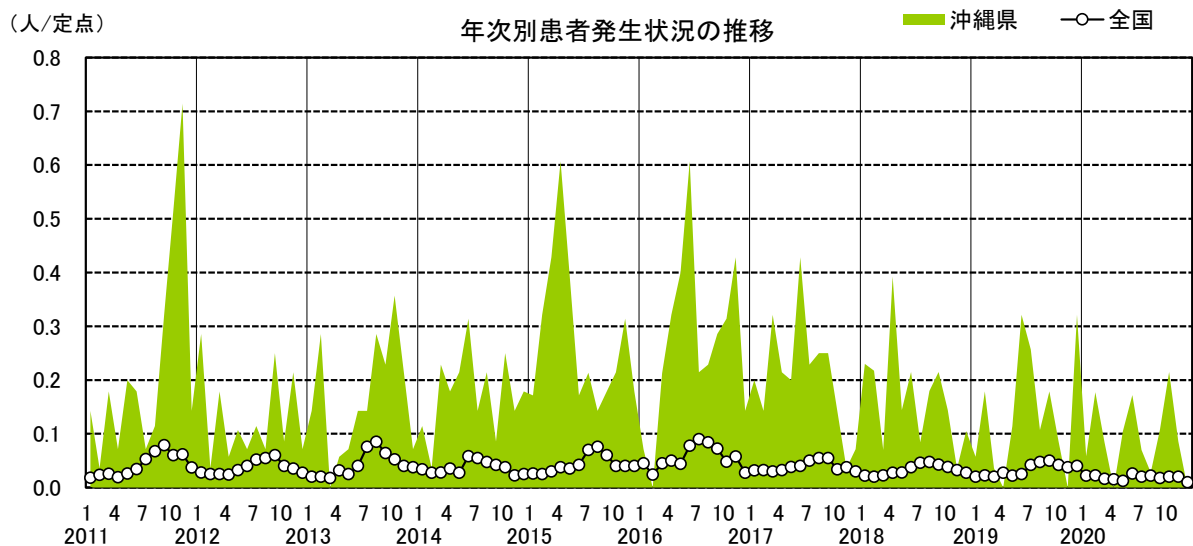
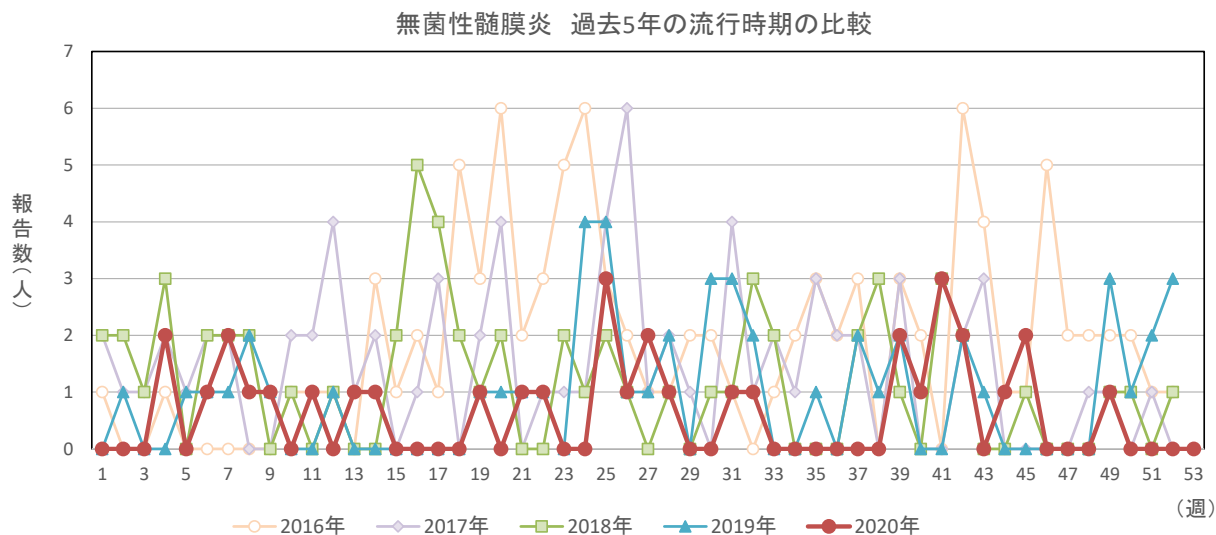


●無菌性髄膜炎

無菌性髄膜炎は、多種多様な起因病原体があるが、全体の85%がエンテロウイルスによるものである。通常、発熱、嘔吐、頭痛を主症状とする。

2019年沖縄県内の報告数は34人、定点当たり報告数は4.84人であり、過去5年間で最も少ない報告数だった。また、南部、宮古、八重山保健所管内からの報告はなかった。

年齢階級別の患者報告数では、幅広い年代で報告が見られた。

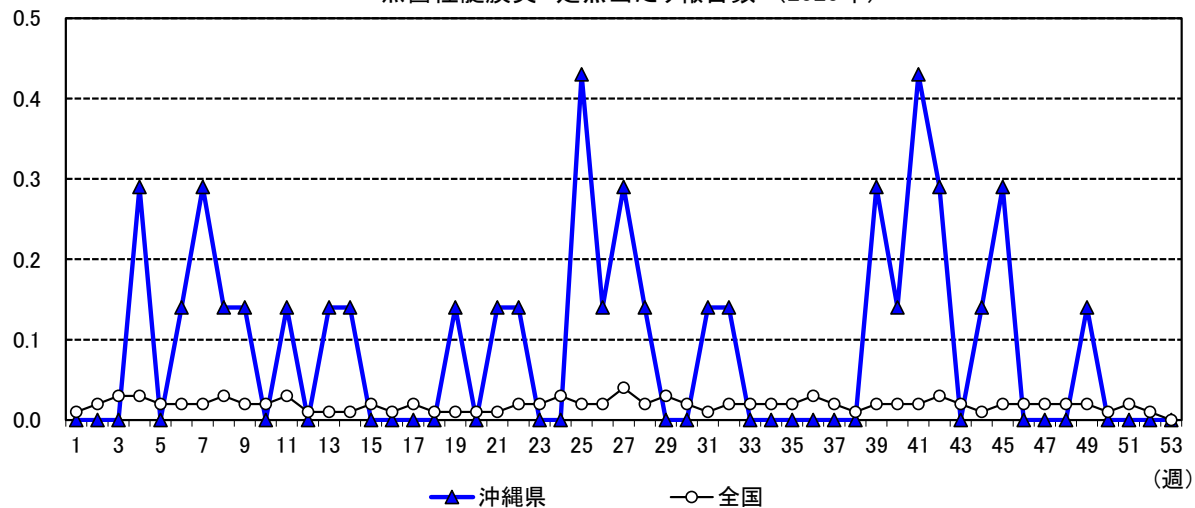


年別の報告数合計：無菌性髄膜炎

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
63	97	75	61	50	34

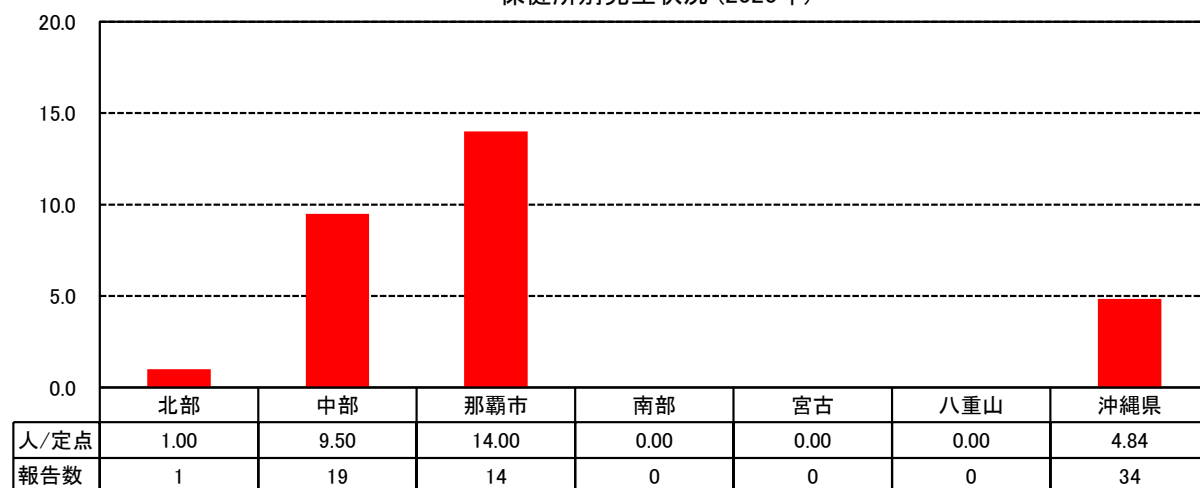
(人/定点)

無菌性髄膜炎 定点当たり報告数 (2020年)

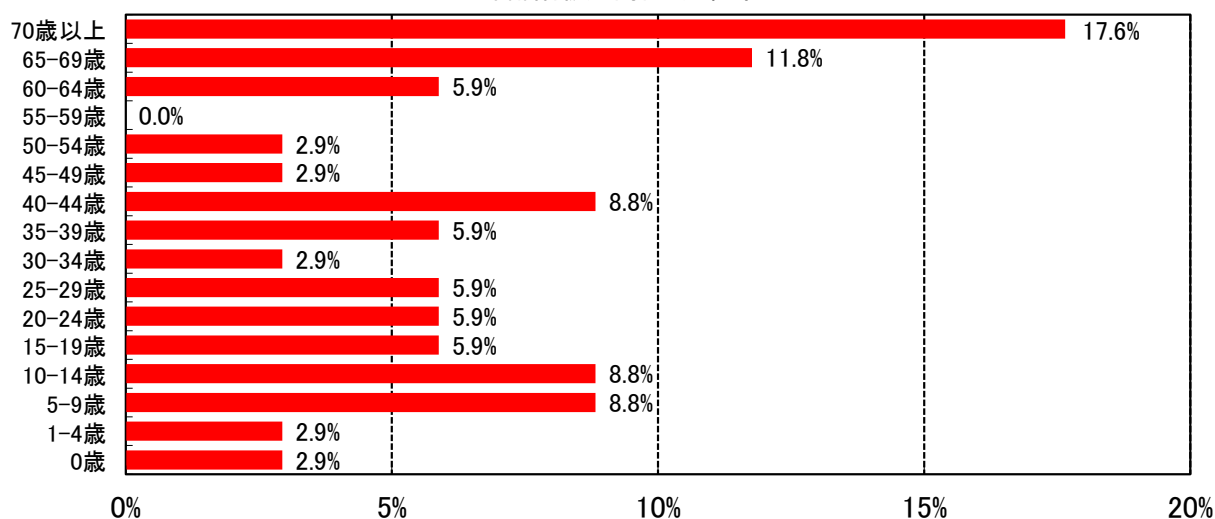


(人/定点)

保健所別発生状況 (2020年)

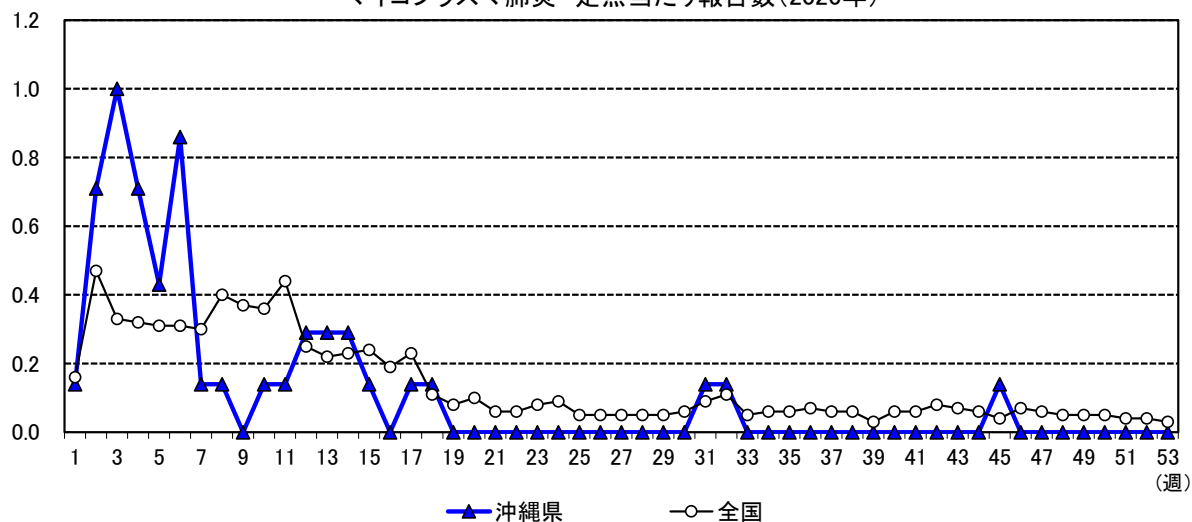


年齢階級別割合 (沖縄県)



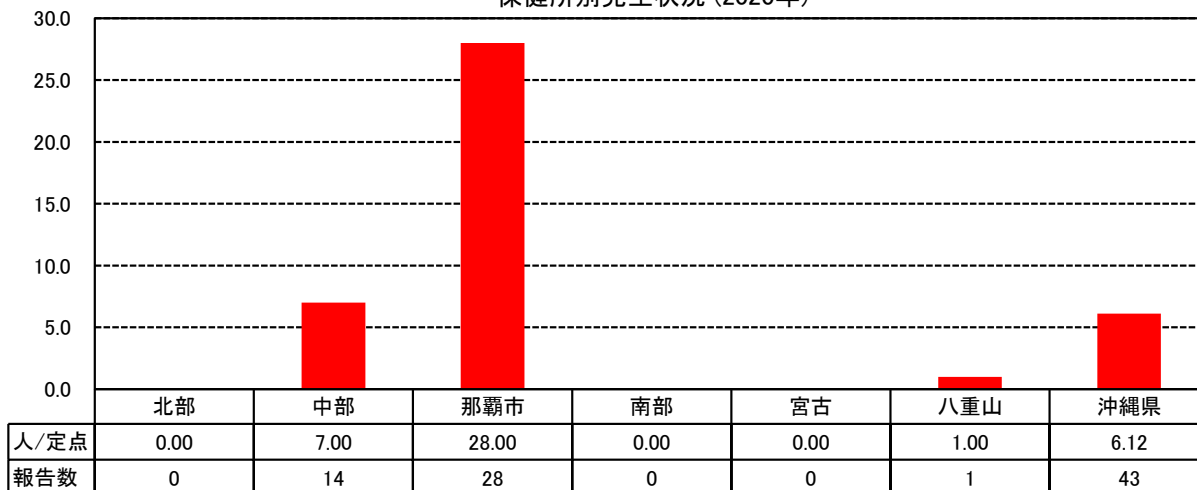
(人/定点)

マイコプラズマ肺炎 定点当たり報告数(2020年)

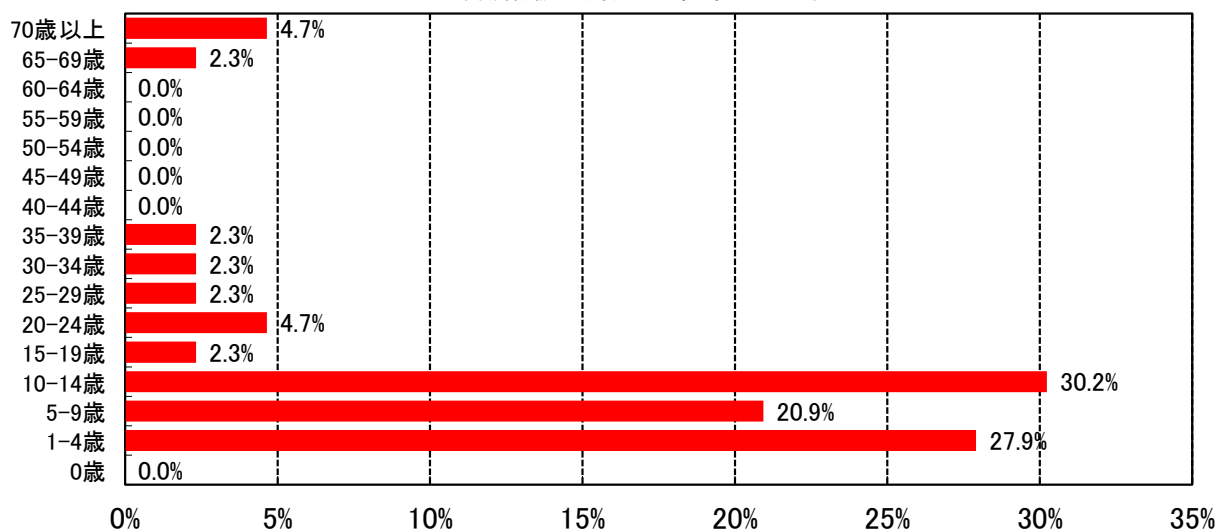


(人/定点)

保健所別発生状況 (2020年)

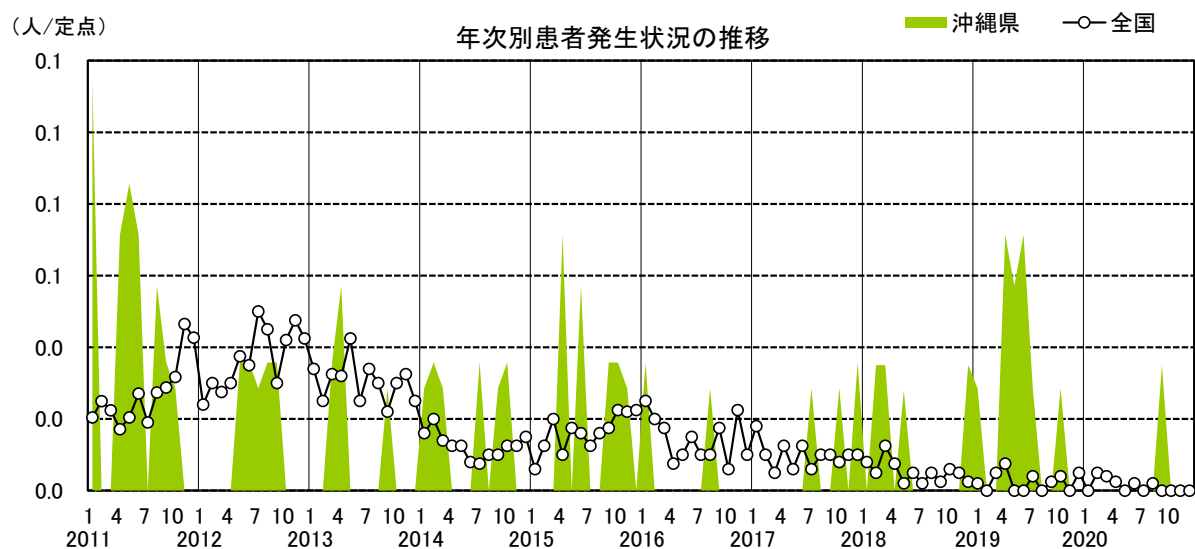
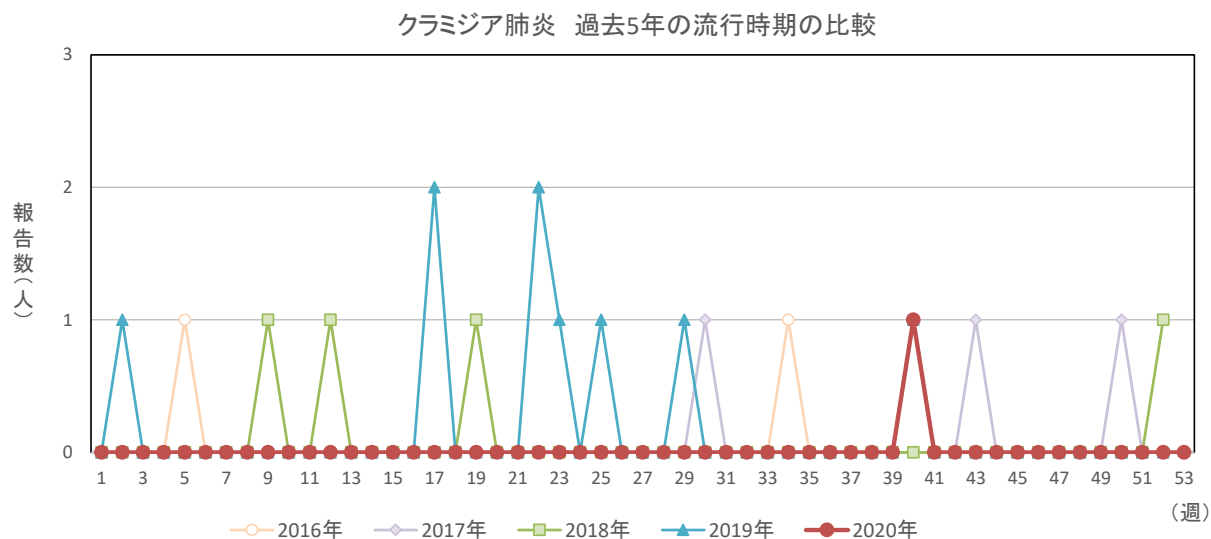


年齢階級別割合 (沖縄県 2020年)



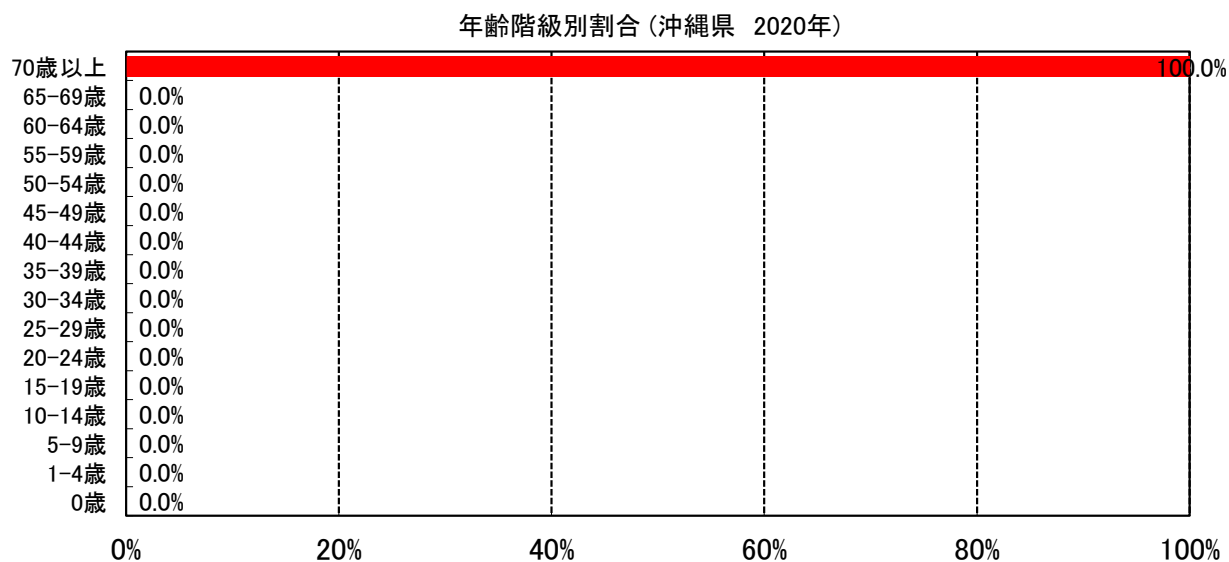
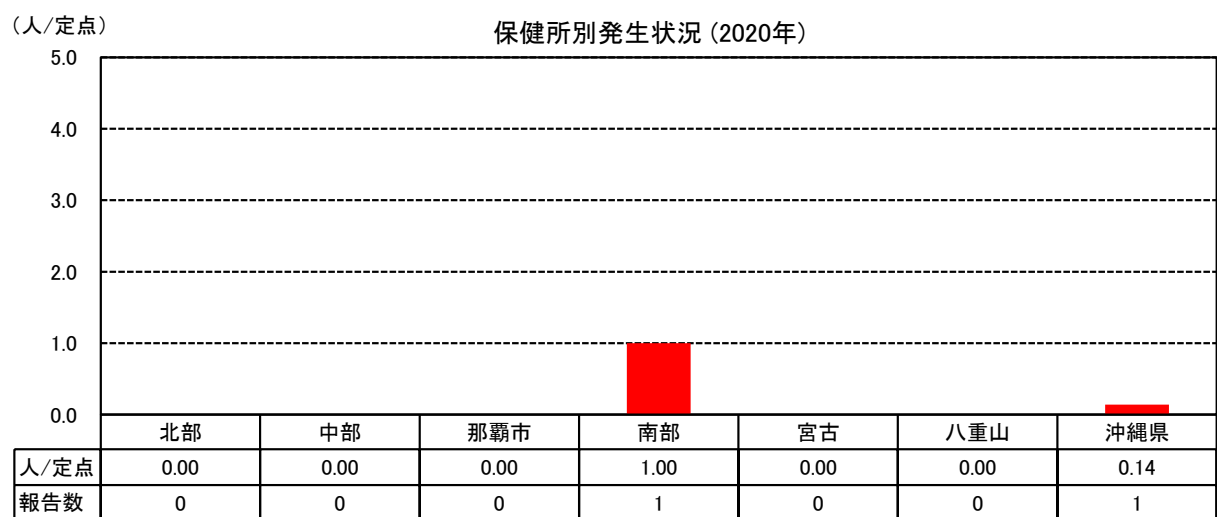
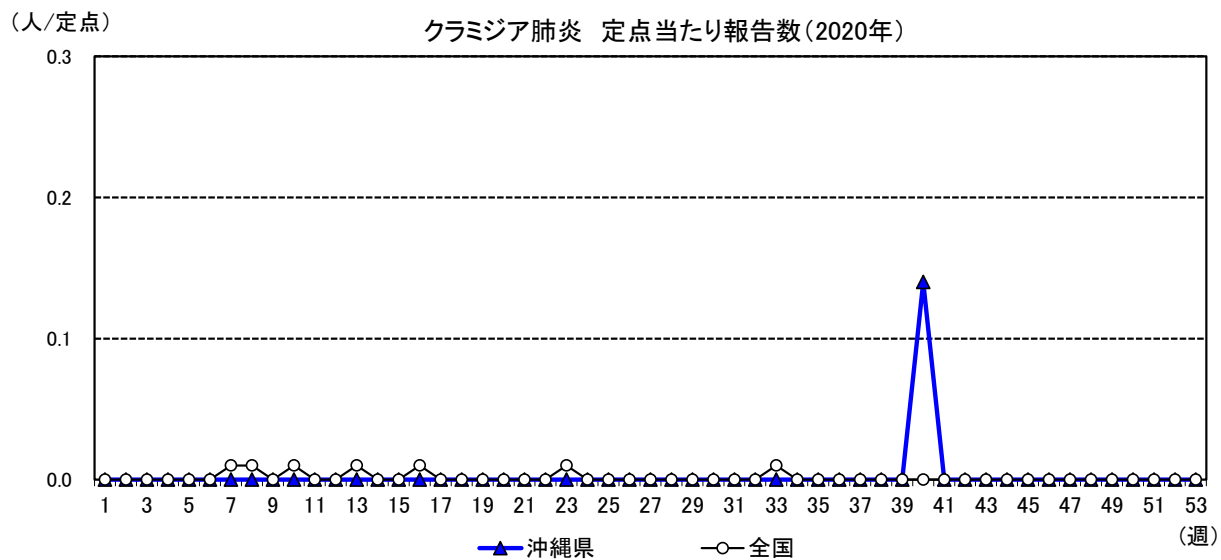
● クラミジア肺炎

クラミジア肺炎は、肺炎クラミジア、トラコーマ・クラミジアによる肺炎である。
2020年、沖縄県内の報告数は1人、定点当たり報告数は0.14人であり、過去5年で最も少なかった。
報告例は南部で70歳以上だった。



年別の報告数合計：クラミジア肺炎

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
4	2	3	4	9	1

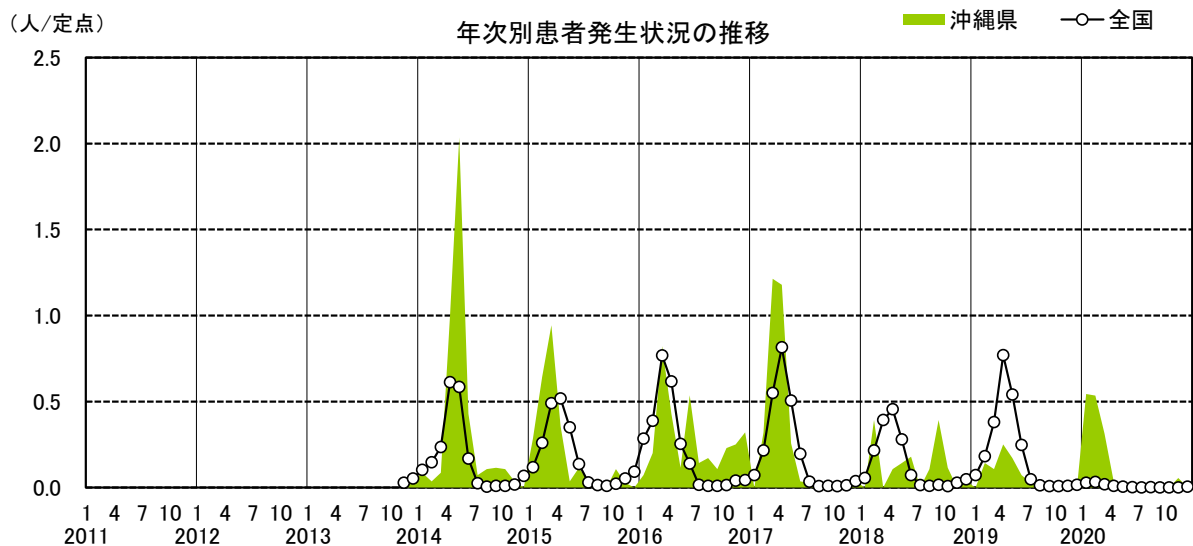
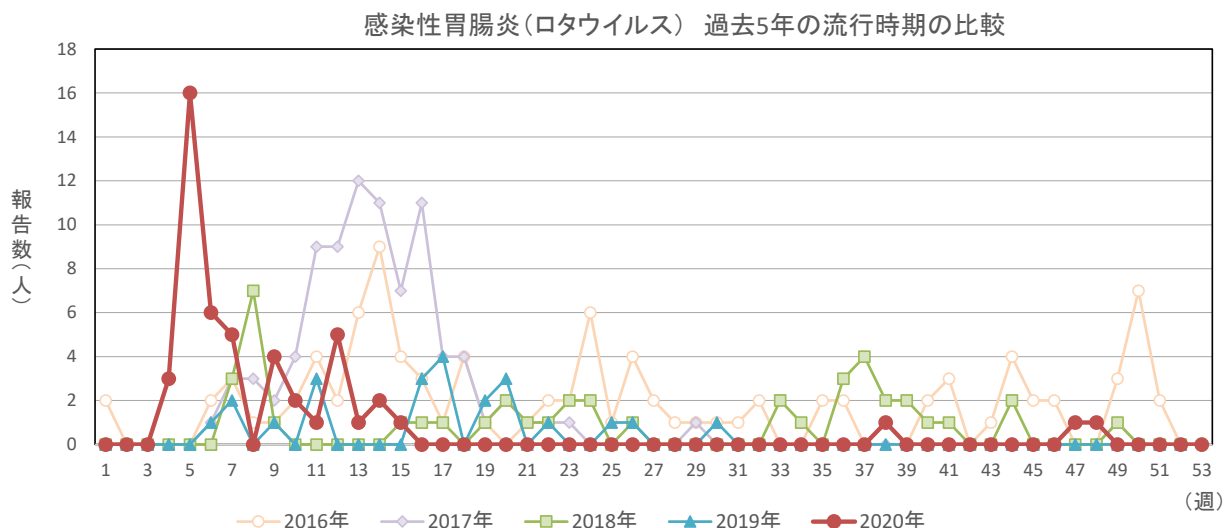


● 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

2013年（平成25年）10月14日から、ロタウイルスによる感染性胃腸炎が基幹定点の対象疾患に追加された。この改正により、感染性胃腸炎について、現行の小児科定点における届出に加え、基幹定点において迅速診断キットによりロタウイルスによる感染性胃腸炎と診断された症例を届出の対象とすることで、重症例を中心にロタウイルス胃腸炎の発生動向をより正確に把握することとなった。

2020年、沖縄県内の報告数は49人、定点当たり報告数は6.99人だった。沖縄県では第5週をピークとした流行が見られたのに対し、全国では目立った流行はなかった。

保健所別では、北部保健所管内の定点あたり報告数が32.00人で他保健所管内と比べ多く報告があった。年齢階級別では、10歳未満が全体の96.0%を占め、うち、1-4歳の報告数は67.3%と最も多かった。

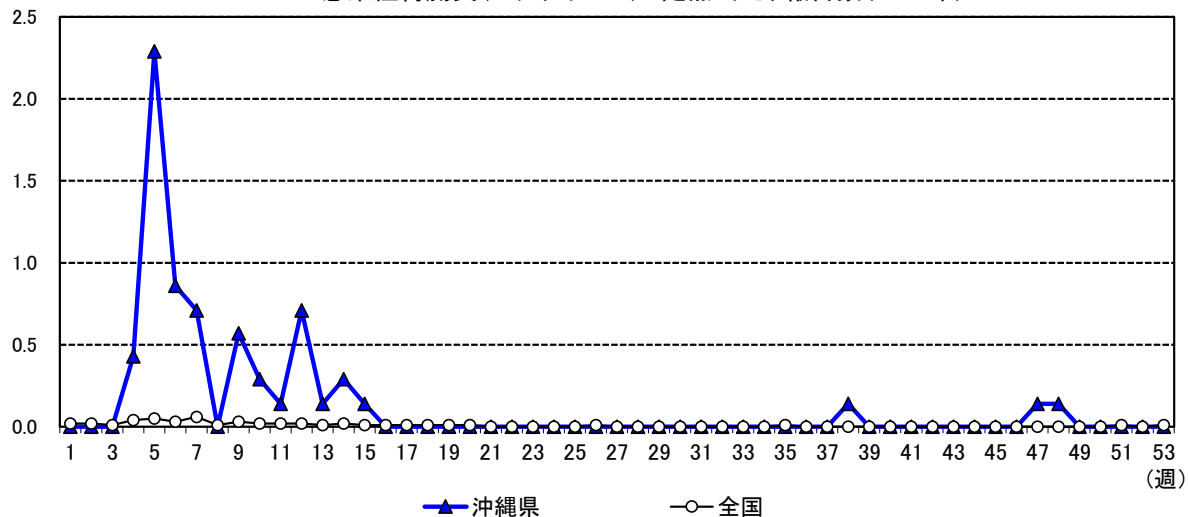


年別の報告数合計：感染性胃腸炎（ロタウイルス）

平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
61	100	88	43	23	49

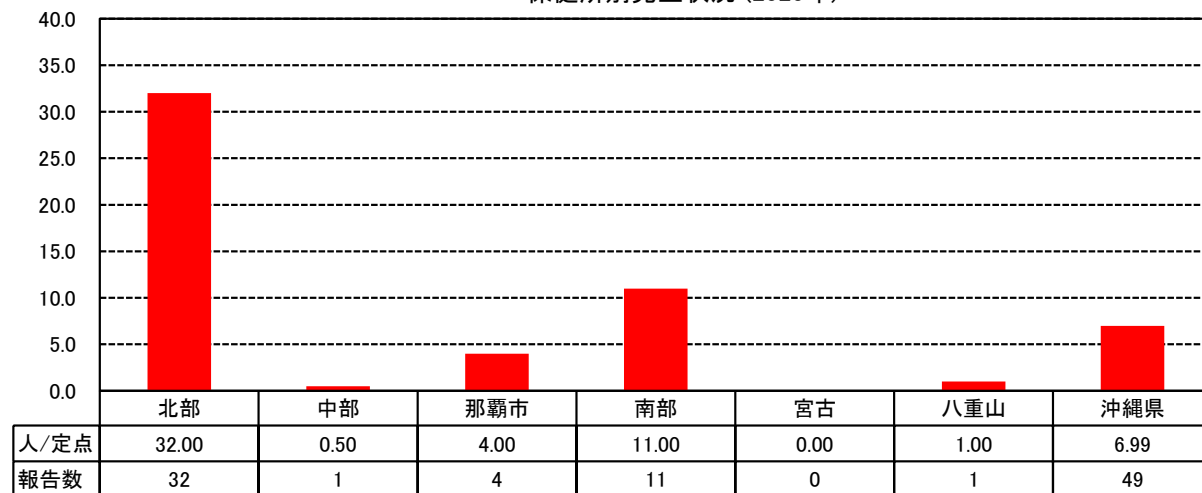
(人/定点)

感染性胃腸炎(ロタウイルス) 定点当たり報告数(2020年)

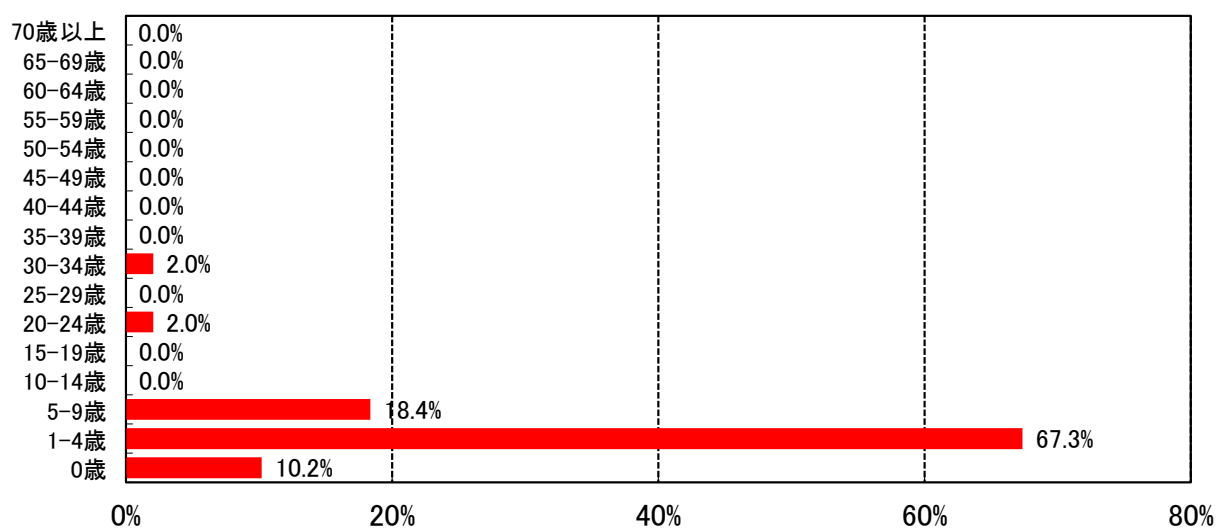


(人/定点)

保健所別発生状況(2020年)



年齢階級別割合(沖縄県 2020年)



MEMO

2 月報

(1) 性感染症 (STD) 定点

(※宮古・八重山は人口規模が小さいため、性感染症の定点医療機関は設置されていない。)

●性器クラミジア感染症

性器クラミジア感染症は、クラミジア・トラコマチスによる性感染症である。ほとんどが無症状だが、女性是不妊症や子宮外妊娠の恐れがある。また、妊婦が治療を行わずに出産した場合は出生児が産道感染する可能性がある。

2020 年の沖縄県の報告数は 292 人、定点当たり報告数は 24.68 人であり、前年比 114.8%だった。性別では男性が 32 人、女性が 260 人で女性の報告数が多かった。年齢別では、男女共に 20 代の報告数が最も多かった。過去 10 年間、全国では男女ともに報告数の推移に大きな変化は見られていない一方、県内では女性の報告数が 2016 年にかけて減少し、その後は増加に転じている。

●性器ヘルペスウイルス感染症

性器ヘルペスウイルス感染症は、単純ヘルペスウイルス 1 型または 2 型による性感染症である。感染後、3 日から 7 日の潜伏期を経て、性器や肛門、口唇などに水疱ができるが、無症状の場合も多い。一度感染すると、体内にウイルスが残るため、再発しやすくなる。

2020 年の沖縄県の報告数は 121 人、定点当たり報告数は 10.20 人であり、過去 10 年で最も多かった。前年比は全国が 95.7%だったのに対し、沖縄県は 133.2%だった。性別では男性が 11 人、女性が 110 人だった。過去 10 年間、全国では男女ともに報告数の推移に大きな変化は見られていないが、県内では女性の報告数が 2016 年以降、増加傾向にあり、2020 年は県および女性の定点あたり報告数が全国より高い値となった。

●尖圭コンジローマ感染症

尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス (HPV) 6、11 型などが原因となる性感染症で、性器やその周辺にイボができる。

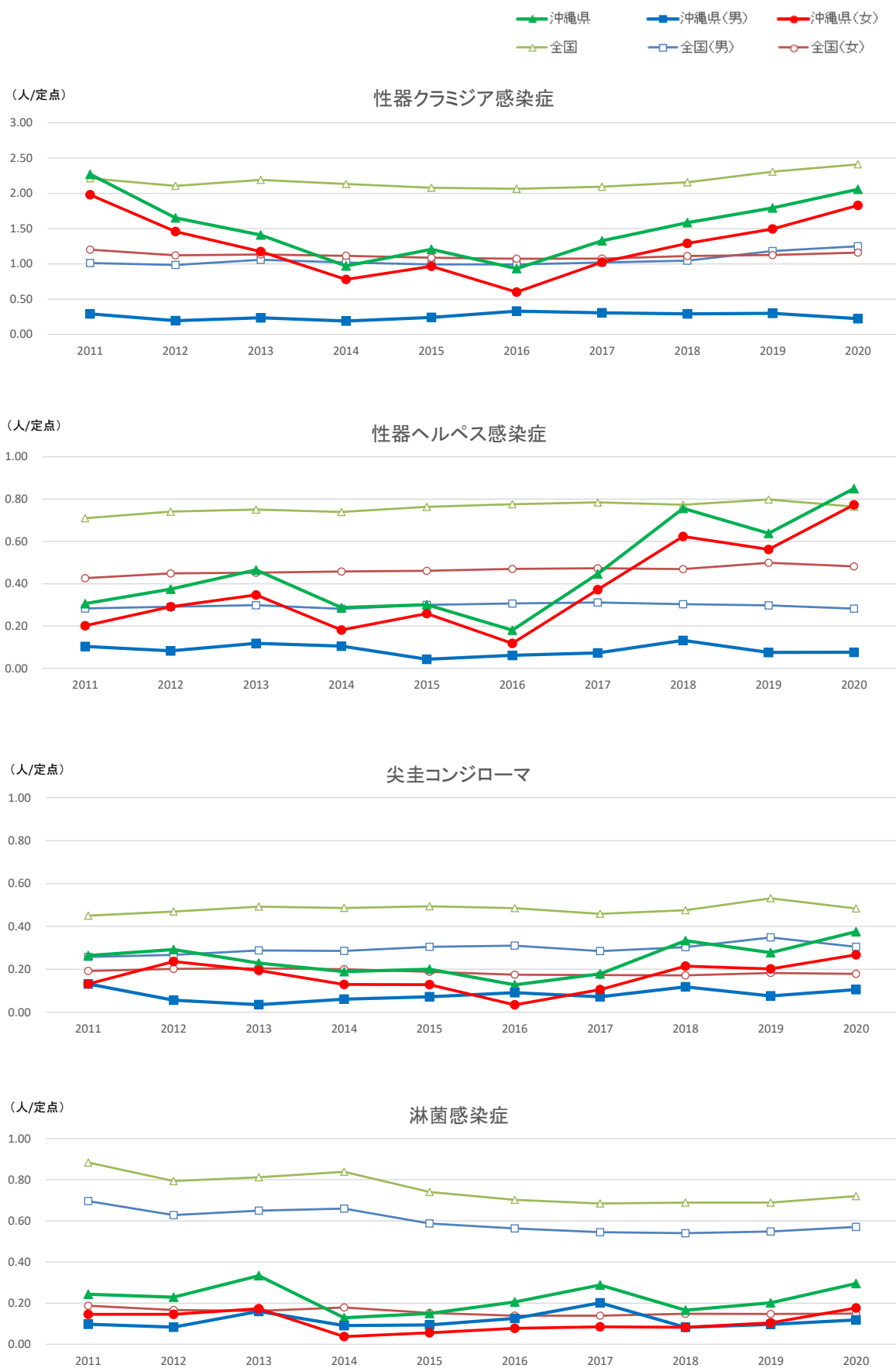
2020 年の沖縄県の報告数は 53 人、定点当たり報告数は 4.50 人で、過去 10 年で最も多かった。前年比は、全国が 91.1%だったのに対し、沖縄県は 135.1%だった。性別では男性が 15 人、女性が 38 人だった。

●淋菌感染症

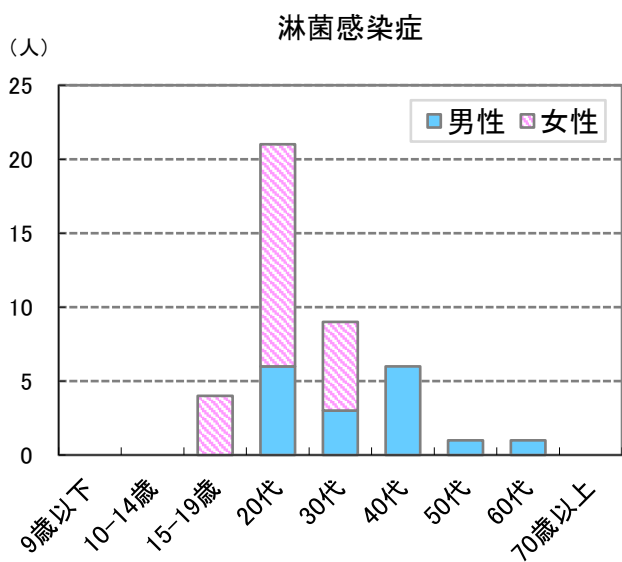
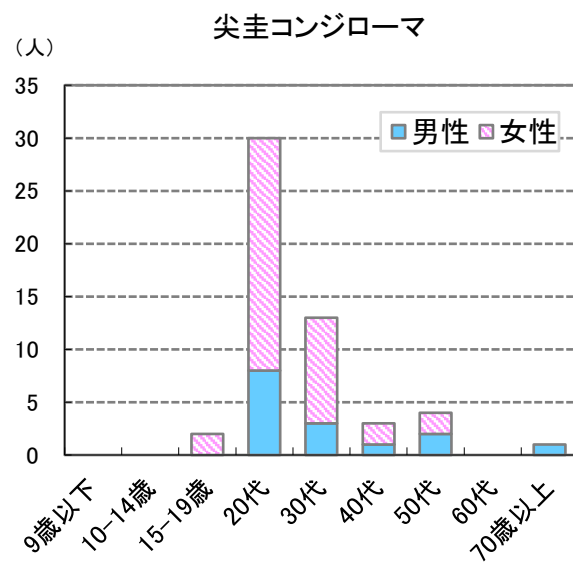
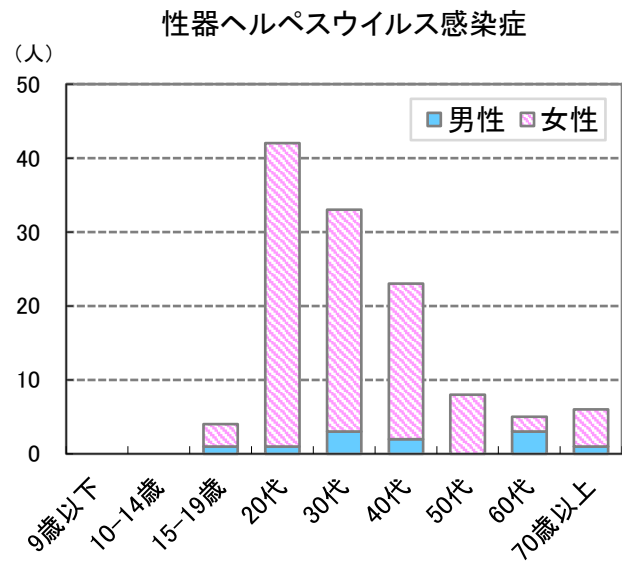
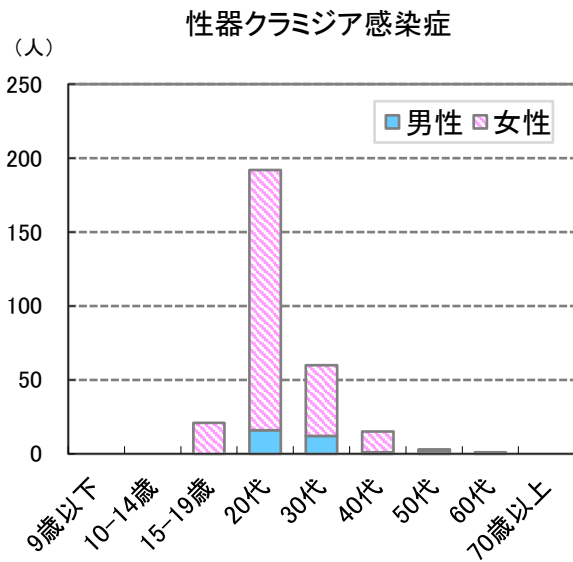
淋菌感染症は淋菌による性感染症で、主な症状は尿道炎である。

2020 年の沖縄県の報告数は 42 人、定点当たり 3.54 人であり、前年比 146.3%だった。性別では男性が 17 人、女性が 25 人だった。

ア. 疾患別定点当たり報告数（月平均）の年次推移



イ. 性別・年齢別患者報告数（沖縄県：2020年）



		9歳以下	10-14歳	15-19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	小計	合計
性器クラミジア 感染症	男性	0	0	0	16	12	1	2	1	0	32	292
	女性	0	0	21	176	48	14	1	0	0	260	
性器ヘルペス ウイルス感染症	男性	0	0	1	1	3	2	0	3	1	11	121
	女性	0	0	3	41	30	21	8	2	5	110	
尖圭 コンジローマ	男性	0	0	0	8	3	1	2	0	1	15	53
	女性	0	0	2	22	10	2	2	0	0	38	
淋菌感染症	男性	0	0	0	6	3	6	1	1	0	17	42
	女性	0	0	4	15	6	0	0	0	0	25	

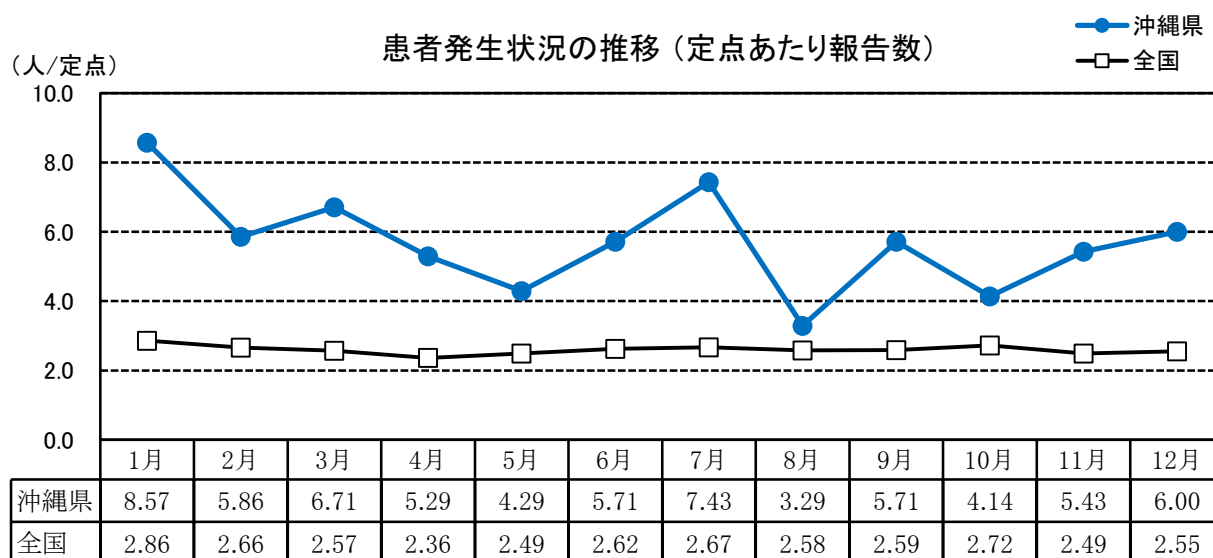
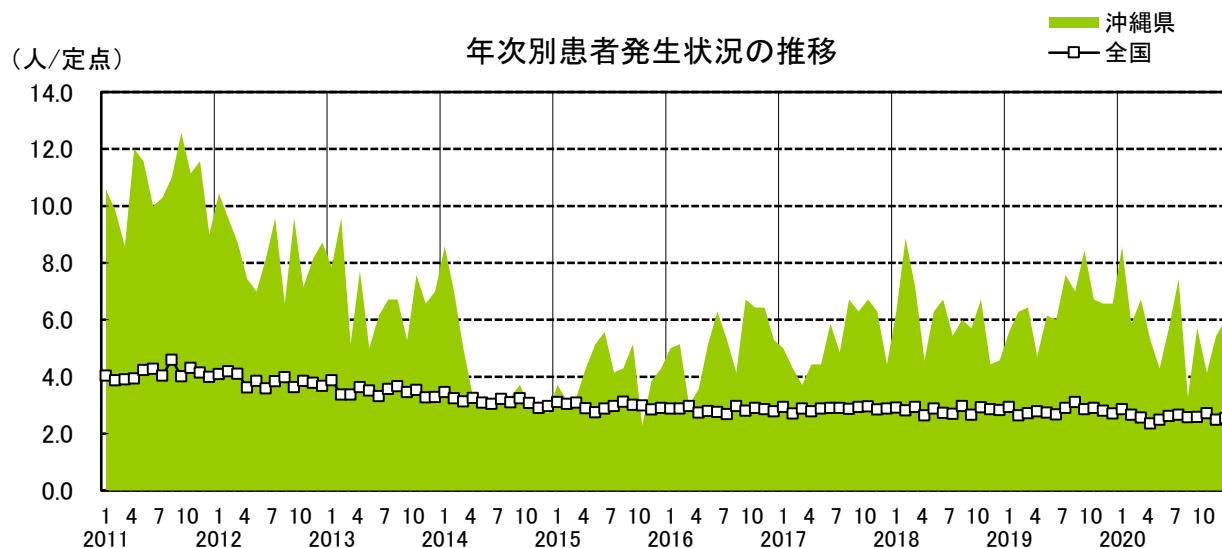
(2) 基幹定点(薬剤耐性菌)

●メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は、メチシリンなどのペニシリン剤をはじめとして、 β -ラクタム剤、アミノ配糖体、マクロライド剤など多くの薬剤に対し耐性を示す黄色ブドウ球菌による感染症である。

2020年、沖縄県内の報告数は479人、定点あたり報告数は68.43人だった。本県の定点当たりの報告数は2015年11月以降、全国値を上回り続けている。

年齢階級別の患者報告数は70歳以上が最も多く、全体の46.8%を占めていた。

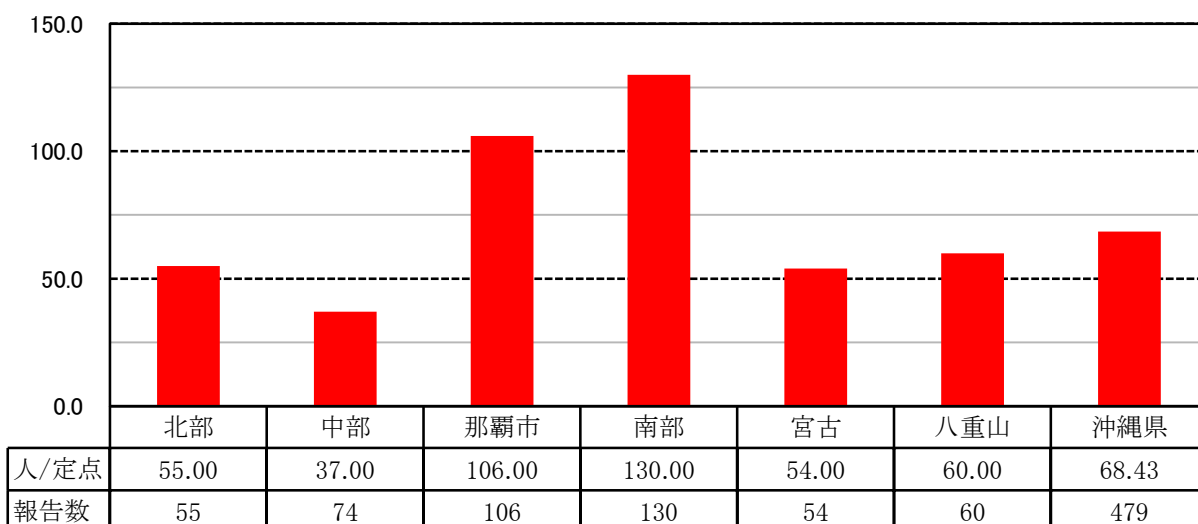


シーズン別の報告数合計：メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

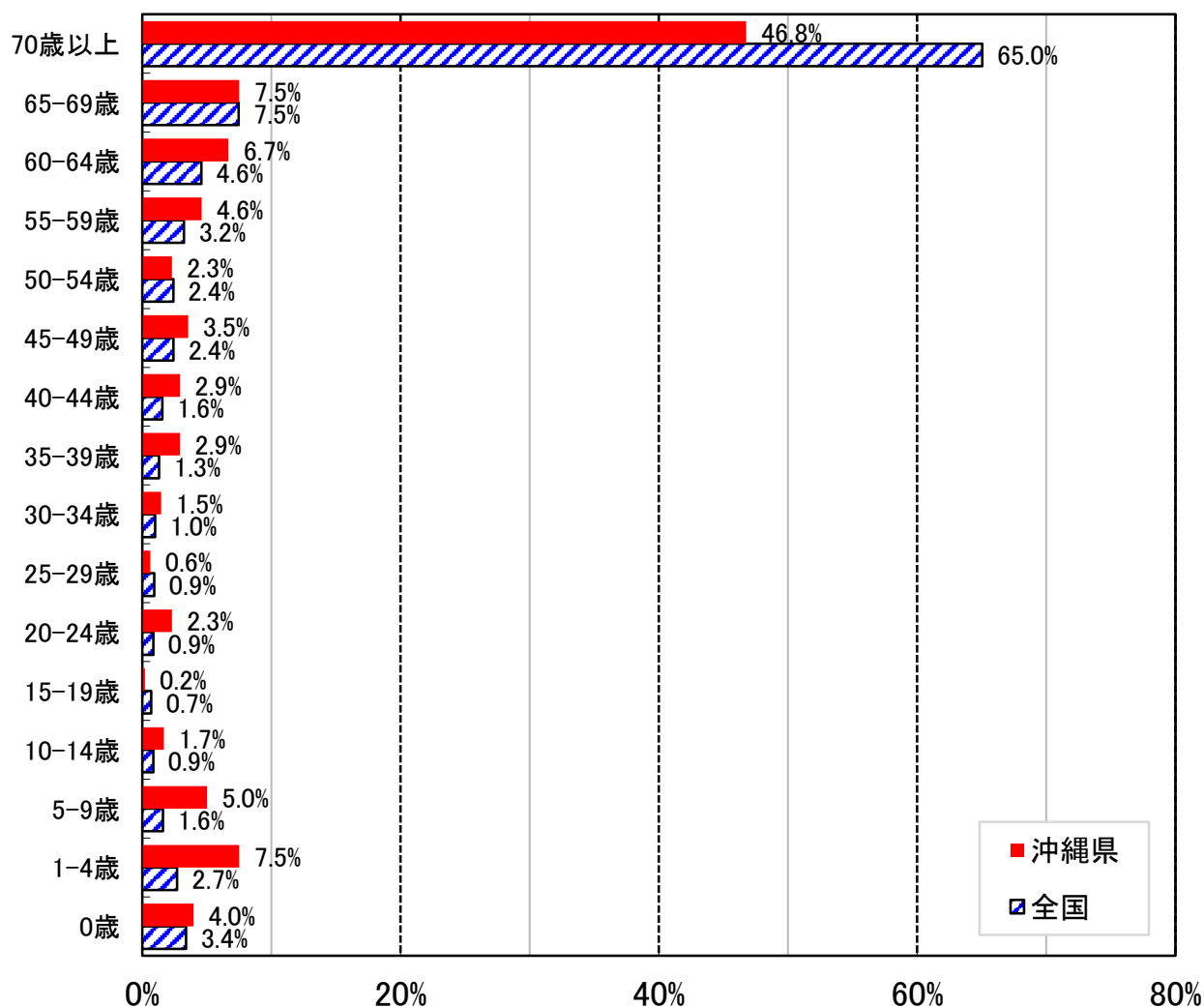
平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
482	437	441	509	546	479

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 保健所別発生状況

(人/定点)



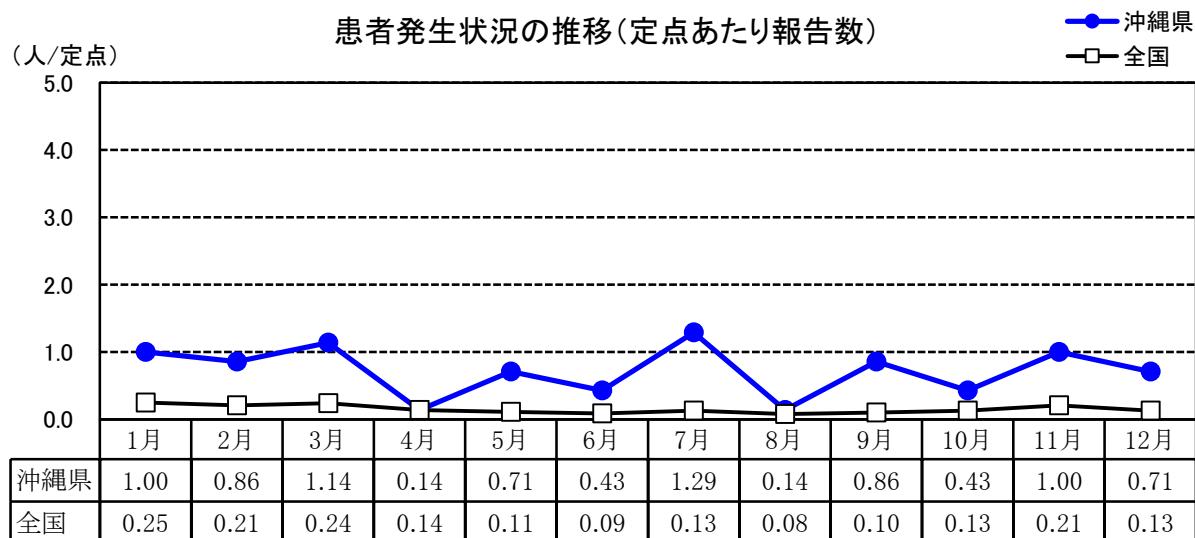
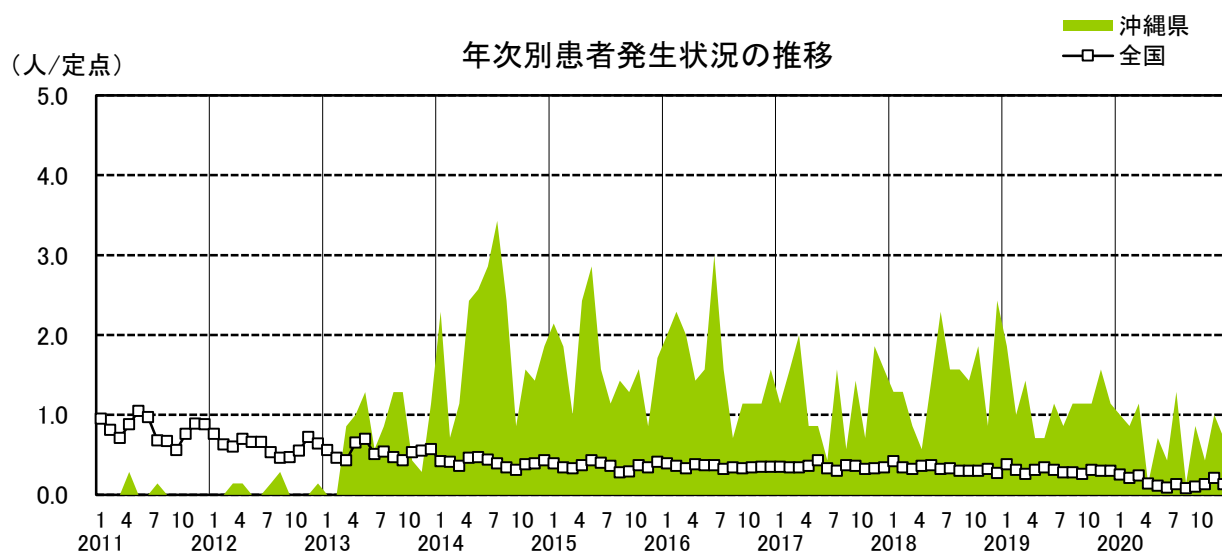
年齢階級別割合



●ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は、抗生物質であるペニシリンに耐性を獲得した肺炎球菌である。通常は無症状であるが、小児の中耳炎や肺炎、高齢者の肺炎などの原因菌となって発症することがある。

2020年、沖縄県内の報告数は61人、定点あたり報告数は8.71人であり、過去5年で最も少なかった。

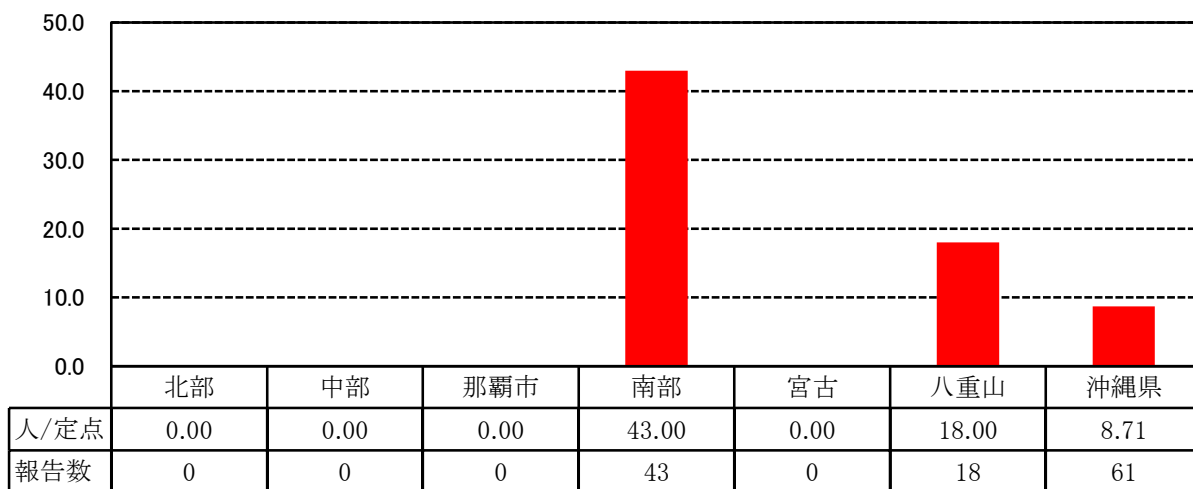


シーズン別の報告数合計： ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

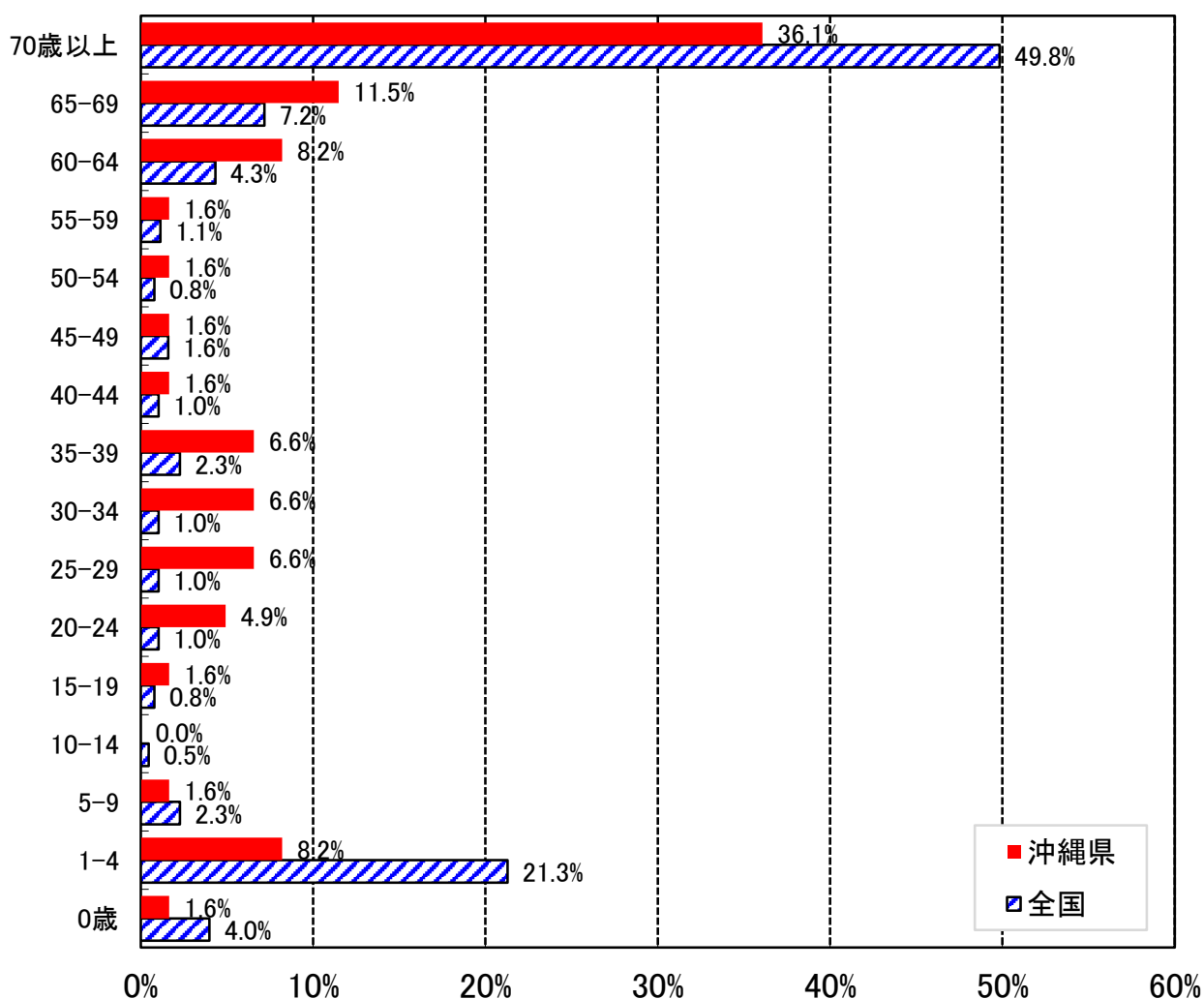
平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
104	137	102	122	97	61

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 保健所別発生状況

(人/定点)



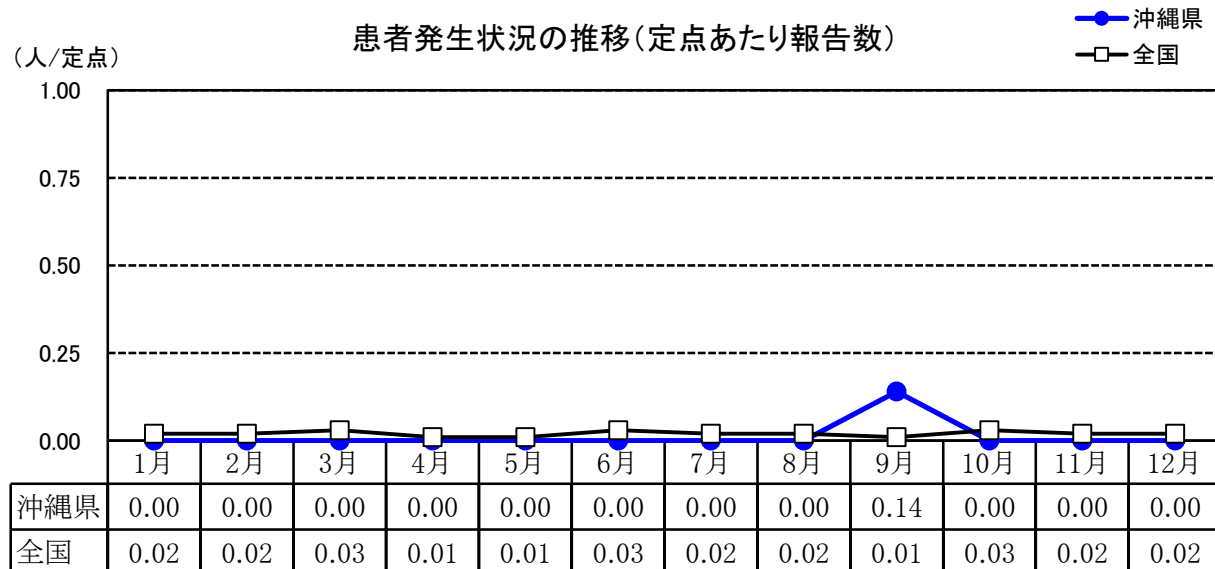
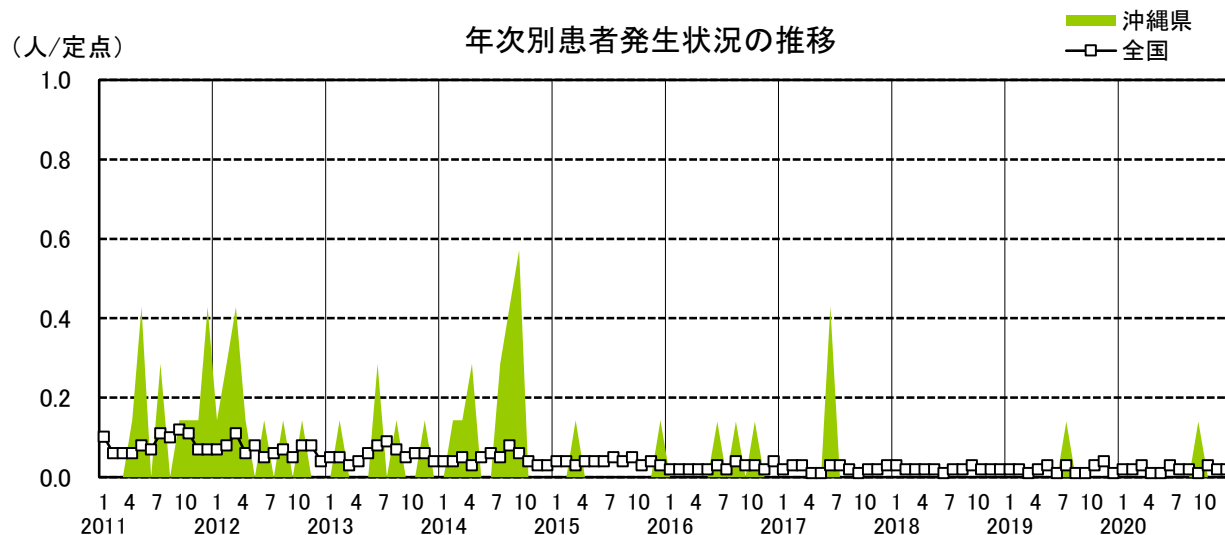
年齢階級別割合



●薬剤耐性緑膿菌感染症

薬剤耐性緑膿菌感染症は、広域βラクタム剤、アミノ配糖体、フルオロキノロンの3系統の薬剤に対して耐性を示す緑膿菌による感染症である。感染防御機能の低下した患者や抗菌薬長期使用中の患者に日和見感染し、敗血症や骨髄、気道、尿路、皮膚、軟部組織、耳、眼などに感染症を引き起こす。

2020年県内の報告数は1人、定点あたり報告数は0.14人であった。

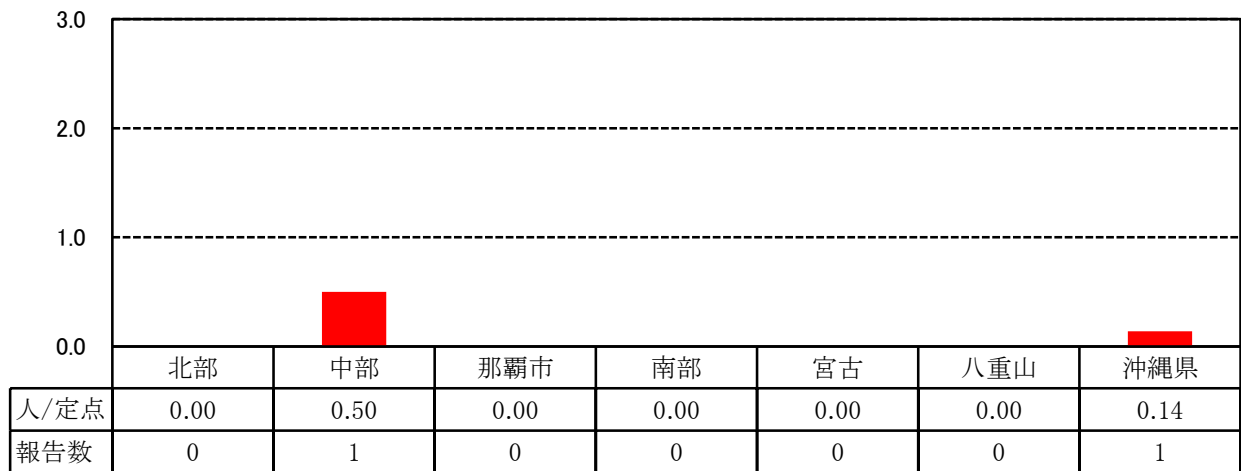


シーズン別の報告数合計： 薬剤耐性緑膿菌感染症

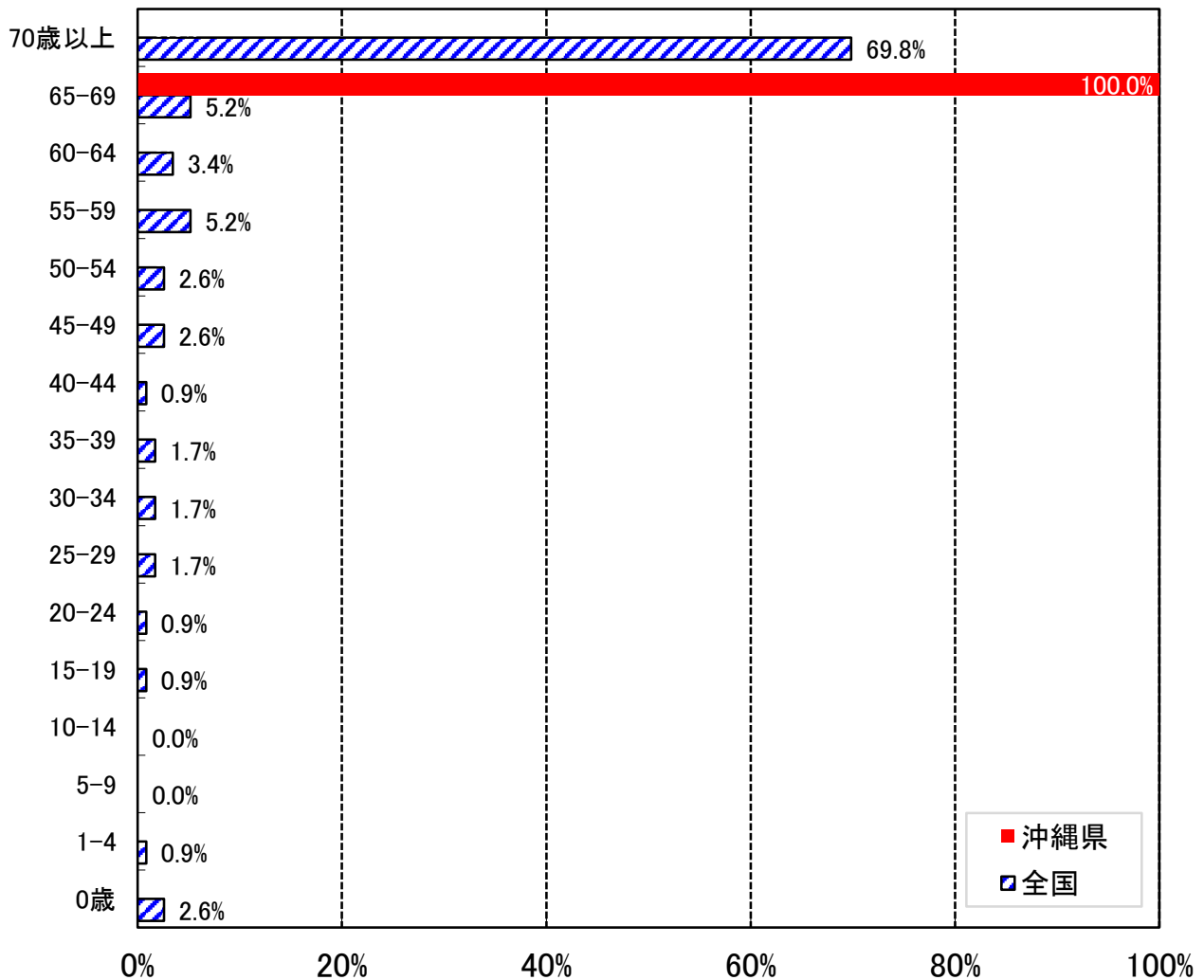
平均報告数	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
2	3	3	0	1	1

薬剤耐性緑膿菌感染症 保健所別発生状況

(人/定点)



年齢階級別割合



MEMO